“ The Reddest World ”

星宮ワルツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
“Ｔｈｅ　Ｒｅｄｄｅｓｔ　Ｗｏｒｌｄ”

【Ｎコード】
Ｎ４０８９Ｉ

【作者名】
星宮ワルツ

【あらすじ】
紅い空と寂れた遊園地の世界、レデストワールド。
そこでは『主人公』か『魔王』を殺した者は願いが一つ叶えられ、それ以外の者は皆殺しにされるという残酷なゲームが行われていた。
案内人によって招かれた不幸な少年少女達。
逃れられない紅。抜け出すことなど決してできはしない…

序章（前書き）

はじめまして。初の投稿となりますが頑張っていきたいと思います。
残酷な展開や悲しい結末の話もあったりしますので苦手な方はご注意ください。
それではよろしくお願いします。

序章

冷たい風の音がする。
獣が肉を求めて練り歩くのが見えた。
窓からは、ジェットコースターもメリーゴーランドも赤茶けている、
さびれた小さな遊園地が見えている。
遠くに観覧車が寂しげに見えた。
普通、空は青いものだ。
けれど、ここでは空も月も、狂気さえ感じるような深い紅。
ここは、不気味な紅い月の登る真紅の世界だった。

「退屈ねぇ。」

澄んだ美しい声が響いた。
一人の綺麗な女性が、アンティーク調の椅子に腰掛け、しきりにペンを動かして女性が持っている古く分厚い一冊の本に何かを書いている。
白と青と紫をグラデーションさせたような美しくも不気味な長い髪に、白い滑らかな肌、そしてパッチリとした紫と青のオッドアイを持つ誰もが振りかえるような美人だった。
女性は一点の迷いもなくペンを走らせて本に何かを書いていく。
まるで何かにとり憑かれたように。
何かにすがるように。
ペンと紙が擦れあう音は延々と静かな紅の世界に響き渡った。

満月がちょうど登りきった頃だった。
急に女性がペンを動かす音が止まった。
感じられるのは迷いではなく終わりだった。
女性は何かを期待するような、けれどどこか寂しそうな薄い笑みを

浮かべて本を閉じた。
そして、遊園地の入場券のような一枚の取り出した。
「…洸(コウ)。」
女性が名前を呼ぶと、素早く、けれど落ち着いた足取りで、執事のような恰好をしていて包帯で右目を隠している黒髪の青年が現れた。
洸と呼ばれた青年は丁寧に女性にお辞儀をして尋ねた。
「お呼びでしょうか、永久(トワ)様。」
今まで少し寂しそうな顔をしていた永久だったが洸の顔を見たとたん、表情が緩み、解き放たれたような柔らかい表情に変わった。
永久は取り出した紙を洸にそっと手渡した。
「また、新しいお話を始めましょう。
これを、渡してきてちょうだい。」
「かしこまいりました。」
洸はそう言ってお辞儀をしたかと思うとくるりと後ろを向き、突然人差し指で宙に線を一本ひいた。
普通なら宙に線など引けるわけがない。
けれど洸が指でなぞった空間には確かに黒い一本の線が引かれていた。
「いってらっしゃい。」
永久が透き通るような声で言った。
次の瞬間、宙に浮いた黒い線の部分が開き、空間が裂けだした。

同時に赤い風が辺りに激しく吹き荒れ始める。
裂け目の向こう側は暗くて何も見えなかった。

洸は一度永久の方を向いて微笑んだ。
永久も楽しそうに微笑み返す。
そして、洸は空間の裂け目に飛び込んでいった。

「さあ、面白いお話、見せてくれるかしら、今度の主人公さんは。
楽しみね。」

そう言って永遠は笑う。
響き渡った。気味が悪いほどの澄んだ声が。
舞い上がった。この世のものとは思えない色の髪の毛が。
吹き始めた。混沌と狂気に満ちた赤い風が。

そして、始まった。残酷な物語が…

第1部：裏切りの物語・1（前書き）

始まりを告げるのは、紅い月とチェーンソー。

第1部：裏切りの物語・1

第1部・裏切りの物語

今日も一日の授業が終わった。クラスメートが笑いながら話しているのが聞こえてくる。
通り過ぎていく足音。ただの物音と化してゆく話し声。
壁に寄りかかり、来るはずの人を待つ。
静かな世界。いつまでもこのまま誰も来ないのではという不安がよぎる。
昇降口に茜色の光が何かの終わりを告げるように射し込んでいた。
川崎奈々（カワサキナナ）は時計をちらちら見ながら人を待っていた。
幼なじみの遠藤鏡（エンドウキョウ）がなかなか来ない。もう終礼は終わった時間帯だと思うのだけれど。
どうしたんだろうと少し奈々は心配になった。
鏡は剣道部だから、今日は部活があったとかそんな理由でもあるのだろうか。
それとも友達との会話に夢中で奈々が待っていることなんて忘れてしまったのだろうか。
心臓にぽっかり穴が空いたような不安感を覚えた。
帰ろうかな。そう奈々が思ったとき、息を切らす音と同時に引き止めるように肩を叩かれた。

「悪ぃ、奈々。担任に怒られてた。」

走ってきたのだろうか。竹刀を抱えるようにして持った鏡は息を切らしながら少し微笑んだ。

奈々は少し驚いたように目を見開いた後、安心したように微笑み返した。
そして一瞬忘れられたのではと思ったことを後悔した。

◇　◇　◇

「また授業サボったの？」

「まあな。」

学校から最寄りのバス停で、二人は喋りながらバスを待っていた。
鏡は先生に叱られたのにサボったことを全く反省してはいないようだった。
奈々はため息をついた。全く鏡らしい。鏡は昔からこうなのだ。
奈々は困った顔をしながら穏やかに言った。

「もーだから怒られちゃうんだよ？
　アメーバ並みの下等生物でもいい加減学習すると思うんだけどなぁ。」

「何気酷いぞ奈々…つかそれはアメーバにも失礼だ。」

鏡は硬直しながらそう言った。
奈々はその言葉を聞いて「そうなの？」ときょとんとした顔で言った。
鏡はさらに硬直した。奈々はさらにきょとんとした。
少しして鏡は何かを思い出したような顔をすると心配そうに奈々に聞いた。

「そういや、お前の兄貴のこと、警察から何か連絡来たりしたか？」

その言葉を聞いた奈々は少し悲しそうにうつむいた。
そして首をふった。言葉は出なかった。
「そうか…」と鏡は心配そうな目で奈々を見た。
どうしようもない悲しさと寂しさが奈々を襲った。

一週間前、奈々の兄が突然失踪したのだ。
警察が必死に探してくれてはいるものの、目撃者すらまだ見つかってないという。
幼い頃に父親が多額の借金を残して逃げ出し、そのショックで母が無理心中をしようとした。その時奈々を救い、手を引いて一緒に逃げ出してくれたのが兄の慎(シン)だった。
以来慎は常に奈々の世話を焼き、優しくしてきてくれた。
慎はいつだって奈々のことを第一に考えてくれていた。
両親のいない生活も慎がいたからこそ乗り越えてこれたのだ。
その慎が失踪したのだ。悲しくないわけがない。
なぜ失踪したのか、どこに言ってしまったか、何もわからない、ただ警察からの報告を待つだけだ。
けれども慎が見つかったという知らせは届きそうにもなかった。

「…その、あんま無茶すんなよ。」

鏡は少し顔を背けながら言った。
けれども、その言葉からは確かに心配してくれているということが伝わってきた。
奈々はうんと頷いた。
奈々が頷くと同時に低いエンジン音が聞こえてきた。
奈々は顔を上げた。右に大きなバスの影が見える。夕焼けが黒ずんだ窓ガラスに反射していた。
バスは奈々たちを見つけるとゆっくり歩道に近づき、止まった。

バスの扉が開き、少し薄暗い車内が見える。
鏡は竹刀を担ぐようにして持ちながら奈々に笑って言った。

「ほら、下向いてないで帰ろーぜ。」

明るくて優しい声だった。
奈々もにっこり笑って言った。

「うん、そだね。
鏡並みの下等生物ですら笑ってるんだもんね。」

「……ひでぇ。」

二人はバスに乗り込んでいった。
だから気づかなかった。気づかなかった。
あの時バスの行き先を確かめればと何度後悔したことか。
けれど、もう遅い。
それはいつも乗っているバスとは違った。
バスの行き先は確かにこう書かれていたのだ。

「レデストワールド」と……

◇　◇　◇

少し揺れる薄暗いバスの中で奈々と鏡は楽しく喋りあっていた。
夕方だというのに奈々たち以外の客は一人もいなくて、少し寂しい様子だった。

「それでね、友達がテスト中に携帯鳴っちゃって。」

「ふぅん。」

「あ、そうだ、もうすぐ剣道の大会でしょ？
せいぜい頑張ってね！」

「ああ。」

「…どうしたの？」

奈々は心配そうに鏡にそう聞いた。
どうも先ほどから鏡は上の空で奈々が話しかけても曖昧な返事しかしない。
何か悩み事でもあるのだろうか。
奈々は心配で鏡の顔を覗き込む。
何か悩み事があるなら何でも相談に乗るつもりだった。
鏡は眉をひそめながら窓の外を凝視している。
そして、しばらく窓の外を眺めた後、ようやく鏡は口を開いた。

「…俺たち、バス間違えたんじゃね？」

奈々はその言葉を聞いて青ざめ、肩が硬直した。
慌てて窓の外を覗く。
確かに窓の外に見えるのは見たこともない広大な野原の田舎道だった。
遠くに林まで見える。
これはまずい。すごくまずい。明らかにいつも通る道と違う。
沈んでいく夕日が奈々を焦らせる。
奈々と鏡は真っ青になって顔を見合わせた。

「…間違えてる…よね？」

こくりと鏡が頷くやいなや、慌てて次の停留所で止まるためにボタンを押した。
早くバスを降りて引き返さなければならない。
こんなに遠くに来るまで別のバスに乗ってしまったことに気がつかなかったなんて。
奈々はそんなことを考えながら少し自己嫌悪していた。
奈々ががっくりとうなだれながらお金が足りるか確認し始めた時、突然停電でもしたかのように辺りが真っ暗になった。
けれどよく見ると窓の外にオレンジ色の光が点々とついている。
バスの後ろ側を見てようやく気づいた。どうもトンネルに入ったらしい。
奈々はさらに慌てた。次の停留所までどれくらいだろう。
田舎の方だと停留所と停留所の間が長いことはよくある。
不安になった奈々は小さな声でひそひそと鏡に言った。

「…ねえ、次の停留所までどれくらいか聞いてみない…？」

「…え、ああ、そうだな。」

二人は暗い車内中、先頭の運転席へと歩き出そうとしてその方向を向いた。
そして顔を上げたその時、はるか遠くから出口らしき光が見え始めた。
途端に奈々は背筋にぞわりと冷たい感覚が走るのを感じた。
足が硬直して動かない。
出口に見える光の色が明らかにおかしかった。
その光は恐ろしく鮮やかな赤色だった。

夕焼けの色とは明らかに違う。血の色を思わせるような深い深い赤だった。
出口に見える赤色はどんどん強い光を放ち膨れ上がり、奈々たちの乗っているバスを呑み込んでいく。
そして、バスはその赤い光の中へと完全に突っ込んだ。

見えてきた景色はどこもかしこも見慣れない赤だった。
というのも空が血で染めたような赤なのだ。
遠くに気味の悪い大きな月が怪しく輝いている。
そしてその月の下には古くさびれた遊園地が広がっていた。
遊園地の中央にそびえ立つ城が奈々たちを見下ろしているように感じる。
ここはどこだろう。奈々の頭の中にはその言葉しか浮かばない。

「おい、ここどこだ運転手！」

あまりに異様な雰囲気なので鏡が運転手に対して怒鳴った。
途端に急ブレーキがかかり、バスが止まった。
バスが止まると運転手の男が運転席から立ち上がりバスの通路へと足を移す。
男は二十歳くらいの黒髪の青年で、右目に黒い眼帯をつけていた。

「お待たせしました、終点ですよ。」

男は穏やかな口調でそう言ったが、その男から明らかに何か「ヤバいもの」が感じられた。
鏡が奈々の前に立ち、少々尖った口調で男に尋ねた。

「終点は結構なんだけどな、帰りのバス停はどこにあるか教えてくれねえか？」

「帰る必要なんてありませんよ、遠藤鏡さん。
あなた方は招かれたのですから。」

突然知っているはずのない鏡の名前を言われて鏡は一瞬たじろいた。
奈々は気味の悪い状況に動くことすらできなかった。
男はあくまで穏やかに笑った。
何か危険が隠れていそうな笑みだった。
そしてぺこりと頭を下げてお辞儀をしながら男は言った。

「ようこそ、レデストワールドへ。」

第1部・2

「れで…？何それ…」

何が何だかわからず混乱しながら奈々はおそるおそるそう尋ねた。
奈々たちを取り囲む赤い世界。逃げ出せそうな出口はどこにもない。
不気味な赤い月の光が不安となって体に染み込んでいった。
洸はにこりと笑った。そして話し始めた。

「レデストワールドとはこの世界の名称です。
ここはもうあなた方がもといた世界とは違います。
あなた方はこれからこの世界であるゲームをしてもらいます。
ルールは…」

「ちょっと待て、俺たち何かやらせられるのか？」

鏡が突然口を挟んだ。
双眸を相当細くして、氷のような表情を浮かべ、鏡は洸を睨みつけていた。
奈々はこんな表情の鏡を初めて見た。
相当怒っている、ということだけは奈々にもわかった。

「ええ、そのとおりです。」

洸がにこりと微笑みながらそう言った。
鏡が鬼のような形相で怒鳴り始める。

「ふざけんな！勝手に変なとこ連れてきた挙げ句、変なゲームに参加しろだと！？

何様のつもりだ。俺はそんなゲームに乗ったりしねえからな。」
鏡は荒々しい口調で行くぞと言って混乱している奈々の手を引き、バスから降りた。
それを見た洸はふっと笑った。
洸を無視して二人はバスから降りた。
そしてすぐにバスが通ってきた道の方へと歩き出そうとした。
だがその時、二人は目の前に広がる光景に言葉が出なかった。
何度も目をこすり、もと来たはずの道を見回すけれど、本来あるべき道は現れない。
このバスが通ってきたはずのトンネルがどこにもなかったのだ。
目の前にあるのは、壁のように立ちふさがる遊園地の入場口だけで、その入場口の向こう側のどこまで遠くを見回してもトンネルなんてどこにもなかった。
あまりの光景に奈々は驚きを隠せず、思わず手で口を抑えて数歩後ずさりする。
だが、その時奈々のすぐ後ろから声がした。

「残念ですが逃げることはできませんよ。」

洸の声だった。奈々は驚きすぐさま振り返る。そして奈々が何か言うより先に鏡が奈々の前へ出た。
洸はいつの間にかバスから降りていたようだ。
鏡はさらに洸を睨みつけながら一歩前に出た。
そして、急に鏡の眼光が鋭くなったかと思うと、突然洸になぐりかかった。

「鏡、やめて。」

奈々の声が響くと同時に鏡の拳がピタリと止まった。

鏡が少し驚いたような表情で奈々の方へ振り返る。
奈々は洸の前へ静かに歩いていき、顔を見上げて静かに言った。

「そのゲームについて、説明してください。」

「奈々！？」

鏡が奈々の言動を疑うような顔をした。
洸は相変わらずのすました表情を浮かべている。

「別にゲームに参加するわけじゃないよ。どうせろくでもないものだろうし。
ただ、ここのことについて眼帯ゲス詐欺師の言うことでも聞くだけ聞いておいたほうが脱出の方法だって考えようがあるかなって思ったの。
まがいなりにも人の形してるんだし、教えるだけの言語力はありますよね？」

奈々はさらっとそう言った。
笑ってもいなければ怒ってもいない、ただ、真剣な表情だった。
目の前の状況はどう足掻いても奈々にはわからない。
なら、聞くだけ聞いてみるべきだ。
ここについて何もわからなければどうすることもできないだろうから。
洸は静かに微笑んだ。

「かしこまいりました。
このゲームのルールは簡単です。
ゲームの参加者の中に紛れている「主人公」と「魔王」。そのどちらかを殺してください。」

殺す。その言葉が出てきた時、一瞬だけ心臓の鼓動が大きくなった気がした。
電流が流れたようなショックが体じゅうを流れた気がした。
つまり、人殺しをさせられるのか。

「…な、そんなのやってられっか！」

鏡が再び怒鳴って洸にくってかかろうとする。
「だめ。」と、奈々は小さな声で止めた。
鏡は悔しそうに歯を食いしばって拳を下ろした。
鏡がおとなしくなったのを見て、洸は説明を続ける。

「「主人公」と「魔王」はランダムに参加者の中から選ばれます。
主人公には右手に剣の入れ墨が、魔王には大蛇の入れ墨が左手にあるのですぐわかるはずですよ。
主人公か魔王を殺した人がゲームの勝者となり、残りの方々は敗者となって皆殺しになります。
そして、勝者には褒美として、願いを何でも一つ叶えることができます。
これが大体のルールです。」

奈々と鏡はしばらく言葉が出なかった。
聞き捨てならない言葉のオンパレードだ。
けれど一番問題なのは、生き残れるのは一人だけということ。
どうかしている。それが最初に思い浮かんだことだった。
奈々は本気で人殺しをするなんて今まで考えたこともなかった。
冗談で「死ねよー。」などと言ったことはあったが、本気で殺意を抱き、凶器を持って誰かを殺そうなんてしたこともなければしようと思ったこともない。

大抵の人は普通そうだろう。
そんな非日常的で残虐なことをゲームの勝利条件にするなんて。
目眩のするような思いで奈々は立ち尽くしていた。
しばらく黙っていた鏡がふっと鼻で笑って言った。

「はっ、くだらねえゲームだな。
俺はそんなゲームには乗らねえからな。
くだらねえルールに縛りつけられるのは嫌ぇなんだ。」

「そうですか、ではご勝手に。」

鏡の言葉に洸はさらりとそう言った。
まるで、何をしても無駄とでも言うようだった。
続けて洸は説明を続ける。

「ああ、あと「能力」について説明しないといけませんね。
このゲームでは一人に一つ特殊な能力が与えられます。
大抵が現実ではありえない能力です。
使い方は参加者の自由で、何度使ってもなくなったりしませんが、中には使う時に代償を払わなければならない能力もあるのでご注意ください。
あとの詳しいことはあなた方が持っているチケットに大抵のことは書いてありますので、そちらをお読みください。」

「チケットだぁ？」

「ポケットに入っているはずですよ。」

洸は笑いながら答えた。
あるわけない。鏡は完全にその言葉を信用していない顔をしていた。

馬鹿にしたような顔で鏡はポケットに手を突っ込んだ。
だが、鏡がポケットに手を突っ込んだ瞬間、その表情が見る見るうちに青ざめていくのがわかった。
そして、ポケットから出てきた鏡の手には確かに一枚のチケットが握られていた。

「嘘だろ…」

ありえないものを見るような表情で鏡はつぶやいた。
洸は驚いた表情もだから言ったのにと見下すような表情もせず、ただ軽く微笑みながらその様子を眺めていた。
鏡のポケットにあったのなら自分のところにもあるのだろうかと奈々はふと思った。
奈々は右手をポケットの中に突っ込んでぐるぐると動かしてみた。
するとすぐに紙切れのような何かに手が当たった。
おそらくこれがそのチケットだろう。先に鏡がそのチケットを見つけたからかそこまで驚きはしなかった。
そのチケットをつかんで手をポケットから出す。
だが、奈々の表情が変わったのはその時だった。
右手の甲にインクで書いたような黒い剣の入れ墨があった。
奈々は先ほどの洸の説明を思い出して青ざめる。
…「主人公」は自分だ。そう奈々が気づいたとき、奈々はすでに手を再びポケットに突っ込んでいた。

「…どうした？」

「ううん、何でもない。
私のとこにもチケットあったからちょっとびっくりしたの。」

奈々は無理に笑顔を作りながら心配する鏡にそう言った。

主人公が奈々だと知ったら鏡はどう思うだろう。どうするだろう。
そう思うと、この手を鏡にには見せられなかった。

「それでは、説明は以上です。
健闘を祈りますよ。」

洸はそう言うと、一つ笑って、どこかへ行ってしまった。
健闘を祈ると、そう言われたけれど、奈々の心は落ち着かなかった。
鼓動はどんどん大きくなるばかりで、周りの赤色全てが目となり、
奈々を狙っているのではとさえ思った。
心臓の鼓動はまるで奈々に言い聞かせるように響き渡った。

お前は、殺される立場だと。

第1部・3（前書き）

読んでくださりありがとうございます。
最初はゆるゆる行きますよー。
途中からじわじわとガッツリシリアスになる予定です。

第1部・3

洸が去った後も奈々はしばらくポケットに手を突っ込んだまま動くことができなかった。
心臓から聞こえてくる鼓動が鳴り止む気配はまるでない。
奈々の心は締め付けられたような緊張と恐怖が止むことはなかった。
まさか自分が「主人公」で、この赤い世界の全ての人から狙われる存在となるなんて思いもよらなかったから。
きっと、奈々が主人公だと知られれば、誰もが奈々を殺しにかかってくるのだろう。
もしかすると、今隣にいる鏡でさえそうかもしれない。
生き延びられるのは一人だけ。
暗い想像がいつまでも菜々の中を渦巻き続け、動けなかった。

「…どうした、奈々。顔色悪いぞ？」

突然耳に入ってきた鏡の声に驚いて、思わず肩に力が入った。
奈々は右手の甲を見られないように制服の袖で手を隠しながらポケットから手を抜き、あくまで平然としているように装い、笑って言う。

「何でもない。さっきの人が言ってたルール、ちょっと怖いなって思って…」

精一杯の一言だった。
鏡は心配そうな表情を消さなかった。
きっと、相当酷い表情をしていたんだろうなと菜々は思った。
当然だ。自分が殺されるゲームをしなければならないとわかって、落ち着いていられるわけがない。

これからどうすればいいだろう。ここで立ち尽くしていてもどうしようもない。
それにここは目立ちすぎる。入場口の前には高い建物も菜々たちを隠してくれそうな茂みもない。
とりあえずどこかに移動した方がいいだろうなと菜々は思った。

「ねえ、とりあえずどこかに移動しない？
ここ、目立つし…」

「たしかにそうだな。」

そう言って、鏡と菜々は歩き始めた。
ジェットコースターや、メリーゴーランドなど、辺りにある遊具は全て金属部分が錆びていて、赤茶色の何かで酷く汚れている。
遊具の周りには、使われなくなった鉄パイプや何かの破片などが散らばっていて、遊園地が本来在るべき明るく楽しそうな様子はどこにもない。
むしろ、恐ろしささえ感じるくらいだ。
居心地の悪さを感じつつも、そんな寂しい遊園地の中を若干急ぎ気味で菜々と鏡は歩いていく。
コーヒーカップの横を通り過ぎ、ジェットコースターのレールをくぐる。
そして二人は何かの売店らしき建物の裏へと駆け込んだ。

「…気味…悪いね。」

駆け込むとすぐに菜々はつぶやいた。
鏡も「そうだな。」と曖昧に返事を返す。
恐怖のせいか緊張のせいか、少し走っただけで菜々は足に酷い疲労感を覚えてその場に座り込んでしまった。

これからどうすればいいのだろう。
辺り一面の赤色に逃げ場なんてない。
この間にも、「主人公」を探して殺そうとしている人がいるかもしれないと思うと立ち上がることさえ恐ろしくなる。
どうすればいいだろう。というかまず、鏡に自分が「主人公」だということを教えるべきなのだろうか。
鏡は奈々が「主人公」だと知ったらどうするだろう。
気にせず、今までどおり、奈々に協力してくれるだろうか。
それとも……

「奈々、後ろ！」

突然鏡が叫んだ。
奈々が驚いて振り返ると、そこには見たこともない動物が一体、こちらを睨みながら唸り声を上げていた。
見た目はとても大きな犬のようだが、毛の色が青く、牙が妙に大きめで爪も普通の犬より明らかに鋭い。
おまけに尻尾が二つに分かれている。こんな犬、現実的に考えているわけがない。
目の前にいるものの奇怪な姿に恐怖で足がすくんで立ち上がれない。
その生き物は低い唸り声を上げながら一歩一歩奈々に近づいてくる。
その目は明らかに獲物を狙う目だった。
逃げなきゃ。そう思った瞬間、素早く鏡が間に入り、持っていた竹刀を振り下ろした。
その生き物はひょいと後ろへ下がってそれを避けた。

「チッ、避けたか…」

鏡はそうつぶやいた。
奈々はその生き物が遠ざかったのを見て少し安心した。

そして、鏡にお礼を言おうと顔を上げた時、奈々はあることに気づいた。
奈々は鏡がさっきあの生き物に振り下ろしたものは鏡が持ってきた竹刀だと思っていた。
けど、今鏡が持っているものは違った。
長い棒状のものであることに変わりはない。だが、本来竹の棒がついているべき部分についているものが普通と違う。
美しい銀色に輝く金属製の鋭い刃だった。
奈々は驚いて鏡が持っているものをもう一度見直す。
しっかりした造りで持ちやすそうな柄、見たこともないくらい鋭い刃。鏡が持っているものは間違いなく竹刀ではなく日本刀だった。

「あの…鏡？
…愚人でも銃刀法くらい知ってるよね？」

「は？何だよ急に。　ただの竹刀だぜ……ってああ！？」

どうやら鏡は自分でも持っているものが竹刀から日本刀に変わっていることに気づかなかったらしい。奈々は呆れてため息をついた。
どうして急に鏡の竹刀が日本刀に変わったりしたのだろう。
そう考えた時、奈々はさきほどの洸の説明を思い出した。

「……そっか、ひょっとして、これが『能力』ってやつなのかな？」

「…は？」

「鏡、さっきのチケット見せて！」

奈々がそう言うと、鏡は戸惑いつつもチケットを取り出した。
奈々はすぐにそれを覗き込む。

たしかあの洸とかいう人は詳しい説明はこのチケットに書いてあると言っていた。
なら、目の前の摩訶不思議な生物のことも、今の竹刀が日本刀に変わったことも、このチケットにひょっとしたら何か書いてあるかもしれない。
そう思った奈々はチケットに書いてある大量の説明に目を通し始める。
そして、少しして奈々は鏡の「能力」に関する説明を見つけた。

「えっと…『剣士』。
発動することで竹刀を日本刀に変えることができる。…だって。」

「…それ、『武士』の間違いじゃねえの？」

ごもっともだ。日本刀なのになぜ剣士なんだ。
そう思ったけど口には出さなかった。
続いて更に下の方に目の前の生物のことらしき説明があったのでそれを読んでみた。

「へえ…『ケモノ』っていうらしいよ、あれ。」

「…そのまんまだな。」

だが読み進めているうちに今ここでぐずぐずしている場合ではないということもわかってきた。
ケモノはどうやら人肉や人の血が主食らしい。
このままでは、あのケモノは奈々たちに襲いかかり、食おうとしてくるだろう。
すでに先ほど鏡が攻撃しようとしたケモノは大勢を立て直し、こちらを睨みながら威嚇しているところだった。

ケモノは今にも襲いかかってきそうな勢いで一歩一歩近づいてくる。
これ以上呑気に説明を読んでいる暇はなさそうだった。

「ねえ、さっき能力ってどうやって出した？」

奈々は鏡に聞いた。
鏡は困った顔で言う。

「そう言われてもわかんねえよ…」

「うわ、自分でやったくせに…霊長類の片隅にも置けない愚かさ…」

「……酷ぇ。」

能力の発動の仕方がわからないと知り、奈々は少し焦った。奈々の能力が何かまだわからないが、おそらく能力が使えないと目の前のケモノに太刀打ちする術がないし、鏡一人に任せるわけにもいかない。
路地の出口もケモノの背中側だし、とりあえずこのケモノを追い払わなければどうしようもなかった。
どうすればいいだろう。今すぐ能力を使いたいのに。
そう思った時、左手の方が急に明るくなるのを感じた。
奈々は驚いてそちらを向く。
そして、奈々は何故か自分の手のところが光り輝いていることに気がついた。
驚いたのもつかの間、すぐに光は消え、気がつくと奈々は左手に銀色の刃で、持ち手が赤い巨大なチェーンソーを握っていた。

「…なんか、使いたいって思えば発動するみたい。」

奈々がつぶやくと同時に目の前で威嚇を続けていたケモノが突然飛びかかってきた。
奈々と鏡は慌ててそれを避ける。
ケモノはすぐにこちらを向き直し、またこちらを睨む。どうやら、もう待ってはくれないようだ。

「くそっ、とりあえずこれ追っ払うぞ！」

「う、うん！」

二人がそう言うと同時に、ケモノの方もまた奈々たちの方に飛びかかってきた。

第1部・4

「えいっ、えいっ、どっか行けーっ！」

耳が痛くなりそうなチェーンソーの音が響きわたる。
奈々はチェーンソーのスイッチを入れながらやみくもに振り回していた。
それをケモノはひょいひょいといとも簡単にかわしていく。
ただの犬だったらチェーンソーの音を聞いただけで逃げ出しそうなものだが、このケモノは全く怯えないどころか落ち着いてチェーンソーをかわして奈々たちに向かってくる。
なかなかケモノが逃げてくれない様子を見ていたら、なんだか奈々の方が逆に怖くなってきてしまった。
また奈々がチェーンソーを振った瞬間、ケモノは一歩後ろへ下がりそれをよけたかと思うと突然奈々に飛びかかってきた。
避けようと思ったが恐怖でとっさに足が動かない。
まずい。当たる。そう思った瞬間、鏡が素早く間に入りケモノの攻撃を止めた。

「大丈夫か？」

「う、うん。何あれ、全然逃げ出す気配ないよ…
ケモノって、ひょっとしてすごく気が強いのかな…奇抜な色した気色悪い犬にしか見えないのになぁ…」

「推測は後でな。来るぞ。」

ケモノはまた飛びかかってきた。
剣道をやっているせいだろうか。鏡は奈々よりも素早く動いてそれ

をかわしていく。
だが、刀でケモノを斬りつけることはしなかった。
多分、怖いのだろう。鏡の気持ちが奈々には大体想像がついた。
なぜなら奈々だって刀であのケモノを斬ることはできないだろうから。怖い、できない。多分そう思うだろう。
日常的に犬などの動物を殺したりすることなんてまずない。するわけがない。
殺せば当然血が出る。無残な死体が残る。そうなることを怖いと思うのは自然なことだ。
奈々はケモノの攻撃をかわしはしても刀で斬りつけはしない鏡の様子を見て少しだけ安心した。
ケモノを殺さないようなら、もし奈々が主人公だと鏡が知っても、殺さないでくれるかもしれないと奈々は思った。
けどすぐに安心してはいられなくなった。
鏡が自分を斬りつけてはこないとケモノはわかったのか、ケモノは積極的に鏡を攻撃し始めた。
鏡は刀でそれを受け止めたが、少しずつ後ろへ後ろへと追いやられていた。
後ろにあるのは固い壁だけ。そこまで追い詰められたら逃げ場がなくなる。
危ない。そう思って奈々が間に入ろうとした時だった。

重たい銃声が2回響き渡った。
奈々は思わず立ち止まって目をつぶった。
そして、目を開けた時に見えたのは、半ば怯えたような表情で立ち尽くす鏡と、血まみれの状態で地面に横たわって動かないケモノの姿だった。
奈々はショックで立ち止まってしまった。
先ほどまであんなに強気で鏡に襲いかかっていたケモノが今はもうピクリとも動かない。

奈々は鏡の刀を見た。血はついていない。
やったのは鏡ではないようだった。

「やれやれ、鏡、大丈夫？」

奈々たちと同年代と思われる少年の声が聞こえた。
奈々が路地の奥の方を見ると、そこには一見すると優しそうな雰囲気の少年が一人立っていた。
だが、右手に煙立つ銃を持っていることから、このケモノを撃ったのはその少年だということはすぐにわかった。
それと、少年の目が奈々は気になった。
右目の色が左目と違って赤色だった。
その少年に奈々は見覚えはなかったが、鏡はその少年を見ると非常に驚いた様子で言った。

「霧也！？なんでここにいるんだ！？」

どうやら鏡はその霧也という少年を知っているようだった。
霧也は鏡を見つけるとすぐに駆け寄ってきて言った。

「それはこっちのセリフだよ。
鏡もこのゲームに巻き込まれちゃったんだね。
あと川崎さんも。」

霧也は奈々の方を向いてそう言った。
奈々は霧也を知らない。それなのになぜ霧也が奈々のことを知っているのか少し不思議だった。
鏡は奈々が霧也を知らないのに気づいたようで、奈々に言った。

「ああ、こいつ、竹内霧也。隣のクラスの奴で俺の友達。」

「よ、よろしくね。ところで、なんで私のこと知ってるの？」
奈々が首をかしげながらそう聞くと霧也は笑いながら答えた。
「だって有名だし。鏡は川崎さんが…」
「わー馬鹿！言うな言うな！」
鏡が慌ててそう叫んだせいで後の言葉は聞けなかった。
それよりも気になることがあった。
霧也の目だ。なぜ右目だけ赤いのだろう。
現実的に考えて左右の目の色が違うのだっておかしいし、赤い目なんて見たことがない。
気になったので聞いてみた。
「あの、竹内君の目…」
「ああ、これか。
これが僕の能力なんだ。
あとで詳しく話すよ。」
どういうことかよくわからず、奈々は首をかしげた。
その時、またケモノの唸り声が聞こえた。
だがその唸り声は先ほどとは比べものにならないくらい弱々しかった。
ケモノは血まみれのまま地面に這いつくばり、顔だけ上げてこちらを睨んでいた。
先ほどまで嫌というほど攻撃をしかけてきていたが、今はもう立ち上がることもできないこのケモノを見て、奈々は心が痛んだ。

だが霧也はすぐにこう言った。

「うわ、意外としぶといな。
二人共、一旦逃げよう。こっちに隠れられそうなところあるから。
」

そう言って霧也は銃をしまって走り出した。
鏡と奈々もすぐあとについていく。
奈々は霧也のさっきの言葉に少し反感を覚えた。
たしかにあのケモノは奈々たちを襲ってきたが、それでもあのケモノは生き物だ。
それなのに簡単に撃ち、その上しぶといなというのはさすがに酷いと思う。
怒りを感じている奈々とは裏腹に、鏡はなんだか少し悲しそうな顔をしていた。
鏡は小さな声で霧也に言った。

「…なんか、変わったな。」

霧也はすぐには何も言わなかった。…言えなかったのかもしれない。
悲しそうにうつむきながら霧也は言った。

「……やっぱりそうか。
……こっちに、慣れちゃったからかもしれないな…」

その霧也の悲しそうな、寂しそうな様子から、奈々はこのゲームがどんなにつらく、恐ろしいものかわかってしまった気がした。

けどそれは、所詮このゲームの辛さのほんの欠片に過ぎなかった。

第1部・5

たどり着いたのはジェットコースター乗り場の裏だった。
ケモノの鳴き声も人の声もしない、気味が悪いくらい静かな空間だった。
奈々たちはそこに駆け込むとすぐに誰かが潜んでいたりしないか辺りを見回し、確認した。
けれど奈々たちを見つめるものは頭上に浮かぶ赤い月だけ。
誰もいないことを確認すると奈々はほっとしてそこに座り込んだ。
肌寒いくらいの風が奈々の髪をかすめていく。冷たくて、どこか寂しい風だった。
周囲に何もいないことを確認すると、鏡は霧也の方を見て言った。

「そろそろ教えてくれよ。
お前がこんなところに来た経緯と、お前の右目が赤い理由。」

霧也の目の色はいつの間にかもとに戻っていた。
霧也は頷いて言った。

「そうだね。じゃあ右目の話から先にしようかな。そっちの方が短いし。」

そう言って霧也はその場に座り込んだ。
鏡も奈々も興味津々で霧也の方に身を乗り出す。
霧也は一度手で右目を押さえ、そして離した。すると霧也の右目の色がここの空の色のような鮮やかな赤色に変わった。
そして、霧也は話し始めた。

「これが僕の能力。『スコープアイ』っていうらしいよ。」

「具体的にどういう能力なんだ？」
「能力を発動すると、遠くのものを拡大して見られるようになるんだ。
銃を撃つ時に狙いを定めるのに便利なんだよね。
ところで鏡たちの能力は？」
奈々と鏡は顔を見合わせた。
霧也に能力を教えていいのだろうか。
さっきの言動を考えると少々不安なのが本音なのだけれど。
けれど、さっき助けてもらったのは事実だし、相手が自分の能力を言った以上、こちらも言わないわけにはいかないだろう。
奈々と鏡はそれぞれのチケットを取り出して言った。
「俺の能力は『剣士』で、なんか竹刀が日本刀になる能力らしいぜ。」
「ふーん、日本刀なのになんで『剣士』なんだろうね。
それで川崎さんのは？」
「そういや奈々の能力はまだ名前聞いてないな。」
奈々はそう言われるとチケットをのぞき込んで書いてあることを読み上げた。
「えっと…『ロガー』。チェーンソーを出すことができる……だって。」
「ロガー…って木こりか？

だからチェーンソー？ずいぶん現代的な木こりだな。
ってかそれって武器？」

いきなり鏡につっこまれまくったが、奈々にだってわからないのだから答えようがない。
答える代わりに奈々は霧也の方を向いて尋ねた。

「そういえば、竹内君はどんな愚行をしたらこんな殺伐としたところに来ちゃったの？」

奈々がそう言うと霧也はなぜか目を丸くしてぽかんと口を開けたまま奈々を見た。
隣にいた鏡がポンポンと肩を叩いて「自覚症状がないんだ、許してやれ。」と言っていたがどういうことだかはわからなかった。

「んで、結局なんでここに来たんだ？」

鏡が尋ねると霧也は急に表情を曇らせて下を向いた。
下を向いているので表情は見えなかったが、とても悲しそうな表情だった。
その様子に、奈々たちは視線をチケットから霧也へと移す。
しばらくして霧也は顔を上げて話し始めた。

「二人とも、五月原栄恋（サツキバラエレン）ってアイドル知ってるよね？」

「知ってるけど…」

五月原栄恋は奈々たちと同年代で、少し前に大ヒットしていたアイドル歌手だ。
けれど、喉の病気で声が出なくなり入院し、芸能界を去ることにな

った。
透き通るような美しい声を持ち、アイドル歌手にもかかわらず素晴らしい歌唱力を持っていた人で、初めてその歌声を聞いたときのことを奈々ははっきり覚えている。
けれど、なぜ今そんなアイドルの話が出てくるのだろう。
奈々は不思議に思った。
鏡も首をかしげている。
すると、そんな奈々たちに霧也は言った。
「実はね、僕と栄恋も、川崎さんと鏡と同じように幼なじみなんだ。」
「ええ！？あのアイドルと！？」
「マジかよ、聞いてねえぞ！？」
「そりゃあ、言ってないから。」
驚きの声をあげる二人に霧也は笑ってサラリとそう言った。
だが、霧也の顔から笑顔はすぐに消えた。
霧也は重い口調で話し始めた。
「栄恋が喉の病気で歌が歌えなくなったことは知ってるよね？
入院してから、栄恋は歌が歌えなくなったショックでずっと心を閉ざしていたんだ。
それで僕はよくお見舞いに行ってたんだけど…
ある日お見舞いに行ったら、栄恋が病院からいなくなってたんだ。
それで、看護婦さんたちと手分けして栄恋を探したんだけど見つからなくて、一回病院に帰ろうと思ってバスに乗ったんだ。
そしたら……」

「ここに来ちまったのか」
鏡がそう言うと霧也は頷いた。
バスに乗って…となると奈々たちと同じパターンだ。
霧也は再び話し始める。
「そして、ここに来てしばらくした時に……栄恋を見かけたんだ。」
「じゃあ、そいつもここにいるのか！？」
霧也は再び頷く。
栄恋がここにいるということは、栄恋も危ない目にあっているかもしれないかもしれないということだ。
どおりで霧也は不安そうなわけだ。
奈々がそう思っていると、霧也は不思議そうな顔をして言った。
「その時気になったんだけど…
栄恋、見たことない奴と一緒にいたんだよね。誰なんだろ…？
背の高い男の人だったと思うんだけど…」
背の高い男の人。そう聞いた奈々はふと行方不明になった兄、慎のことを思い出した。
◇　◇　◇
そこは遊園地のはずれにある小高い丘だった。
見下ろす世界はどこもかしこも赤い。

ケモノたちがはびこり、日々人間たちを狙っている。
人間たちはというと、こんな世界に来てしまったことに絶望してしまうものもいれば、この世界から抜けるために「主人公」か「魔王」を探そうと目を光らせているものもいる。
この丘に一人の少女が立っていた。
少女はしばらく何も言わず遊園地を見下ろしていた。
走り逃げ惑う人や目を光らせながら「主人公」や「魔王」を探す人、中にはお腹を空かせて食料を探し回る人もいる。
少女は思った。この世界に来たことを悲しんでいないのは自分くらいかもしれないな、と。
少女は顔をあげて息を吸った。
そして、一面に広がる赤い世界へ向かって歌い始めた。
透き通るような歌声がこの空に響き渡る。
元の世界では、喉の病気のせいでもうできなくなってしまったことだ。
けれどこの世界では違った。…「歌姫」の能力のおかげだった。
少女は歌った。美しい歌声は広い空に響き渡る。
初めて歌った時の忘れられない感覚が帰ってくる。
少女にとって、歌うことほど楽しいことは他になかった。
前の世界で、自分がもう歌えないと知った時の絶望感は今でもしっかり胸に刻み込まれている。
けれど、今は違う。今は歌える。
多くの人々にとって、ここは絶望の世界かもしれない。
けれど、少女にとって、ここは希望の世界だった。

「…栄恋、歌うなとは言わないがもう少し声を小さくしろ。
　ここは丘だからケモノが多いぞ。」

栄恋と呼ばれた少女は歌うのをやめて振り返る。
そこには、二十歳過ぎくらいの背の高い青年が一人立っていた。

いかにも女子から好かれそうな整った顔立ちだが、その表情はどこか暗い。
けれどそれは性格のせいとかそういうことではなく、仕方がないことだったりする。
栄恋はメモ帳とペンを取り出した。そしてメモ帳にこう書いて青年に見せた。

『何か、私が慎にできることはない？』

栄恋は訴えかけるような目でその慎（シン）という青年を見る。
慎はため息をついて言った。

「別に何もない。」

慎はそう言って栄恋に背を向けて歩き始める。
栄恋は急いで慎を追いかける。
慎は栄恋の命の恩人であり、歌が歌えなくなり、絶望していた栄恋がここに来るきっかけとなった人物だった。
栄恋は必死で慎を追いかけた。
慎は栄恋の恩人だ。そんな慎に、何か恩返しがしたい。そう栄恋は思っている。
何ができるだろうか。何をしたいと慎は思っているだろうか。
栄恋はわからない。聞くこともできない。だから、こうして薄っぺらい紙切れに言葉を書いて見せることしか手段がない。
けれど、慎の思いを栄恋に教えてくれたことは一度もなかった。
慎は栄恋の方を見ずに言った。

「俺なんかに無駄な恩を感じる必要はない。とっとと好きなところに行けばいいだろ。」

そう言って、いつも慎自身の願いを話してはくれないのだった。

第1部・6

「それで…これからどうしようか？」

奈々は震える声でそう言った。鏡と霧也は考え込む。
どんなにそうでないことを願っても周りにあるのはさびれた遊園地と赤い空だけだ。
この世界で奈々はこれからどうすればいいのだろう。こんなところで隠れているだけではしょうがない。
そして、鏡と霧也はどうするつもりなのだろう。
鏡の方はケモノ一匹斬れないところを見ると今からいきなり「主人公」を探して殺しに行くということはしなさそうな気がするが、霧也の方は見た目に反して容赦ないところがある。
けれど霧也はさっき、自分が前と変わってしまったのはこの世界に慣れてしまったからかもしれないと言っていた。
なら、鏡もいずれこの世界に慣れて、変わってしまう時が来るのだろうか。
そうなると、奈々とは敵同士になるのだろうか。
そう思うと怖くて顔を上げることができなかった。
そんなことを考えていると、鏡が少し怒ったような口調で言った。

「俺はこんなくだらないゲームに乗るつもりはねえ。
よって、こんなところにいる必要もねえ。
だから、俺はこの世界から抜け出す方法がないか探すことにする。
」

「あ…じゃあ私も！」

奈々は思わず声をあげた。

奈々だってこんなゲームはしたくない。こんな世界、今すぐ抜け出したい。もちろん、誰も殺さずに。
奈々は鏡がそう言ってくれて少しほっとして肩の力が抜けた。
誰も知らない、恐ろしいこの世界で奈々が名前も顔も、どんな人物かもよくわかっている数少ない人である鏡がそう言ってくれたことは、奈々にとってはとても嬉しいことだった。
一方、霧也の方は複雑そうな表情で下を向いていた。
奈々は少し心配で霧也の顔を覗き込む。
霧也がなぜそんな表情をしているのかはすぐに想像がついた。

「やっぱり…栄恋ちゃんのこと心配なの？」

「…うん、やっぱり放っておけないよ」

霧也はそう言って寂しそうにうつむくばかりだった。
すると、鏡が学生鞄を肩にかけながら立ち上がって言った。

「じゃあ、ここから抜け出す方法を探しながらそのアイドルも探せばいいじゃねえか。
　きっとそんなにすぐには抜け出す方法なんて見つからねえだろうし。」

「うん…そうだね。」

そう言って霧也もようやく顔を上げて立ち上がる。
そして、奈々も広い広い果てしない空を見上げながら立ち上がった。
殺伐とした空気が奈々たちを包み込む。
いつもは楽しいジェットコースターもメリーゴーランドも今は冷たい。
まるで三人をあざ笑うかのように肌寒い風が通り過ぎた。

三人はゆっくりと歩き始めた。
奈々の目の前には竹刀を持つ鏡とベルトに銃をぶら下げている霧也がいる。二人とも、表情は険しかったが強固な意思が感じられる。
奈々は前を歩く二人に静かな声で言った。

「…ねえ、約束して」

「何をだよ。」

鏡が立ち止まって聞き返す。
奈々は下を向きながら、何かに祈るような声で言った。

「必ず三人で、この世界から抜け出すって……」

それを聞いた鏡は振り返って奈々のところまで歩いてきた。
そして少しいたずらっぽい顔をして、笑って言った。

「ぶぁーっか。最初からそのつもりだよ。」

その言葉に奈々も思わず笑顔がこぼれる。
霧也も奈々の方を向いて薄く笑った。
そして、三人は遊園地の終わりを目指して歩き出す。
悲しい世界の中、紅の空の果てを探し始めた。

◇　◇　◇

冷たい風が吹く。まるであの人の心を表しているかのように。
真下に広がる遊園地はさびれて、茶色と灰色に染まっている。

この世界に唯一存在する色はこの空の色だ。目眩がするほどの紅がこの世界を包み込んでいる。
洸からしてみれば空の色はこの色が普通なのだが、ここに来る人々に聞くともとの世界はそうではないらしい。
だからといって洸は別にその空を見たいとは思わなかった。
ここは洸の主人…永久様の世界だ。外へ行く力を実際洸は持ってはいるのだが、永久様を捨てて外へ行くことなど洸にはできない。
洸はジェットコースターのレールの上から遊園地の様子を見下ろす。
ジェットコースターの乗り場の裏から遊園地の東側へと速歩きで歩いていく影が三つ見えた。
三人とも高校生くらい。一人は女であとの二人は男。
今回の物語の主人公の川崎奈々と、同じ学校に通っていた遠藤鏡と竹内霧也だ。
三人は周りに警戒しつつ、東へ東へと歩いていった。

「…とりあえず、駒は揃ったようですね。」

洸はぽつりと呟いた。
そして顔を上げるとくるりと向きを変え、来た道を戻り始めようとする。勿論、永久様のもとに戻るため。
永久様の傍にいて、永久様の願いを叶えること。それが洸の信念であるのだから。
だが、一歩踏み出そうとした時、洸の感覚に電撃が走り、洸は素早くその場に伏せた。

パンッ　パンパンッ

銃声が紅の空に鳴り響き、何かが洸の頭上の空気を裂いた。
洸は全く動揺せず、何も言わずに冷静に立ち上がり、服についた砂を手で払った。

そしてさっき銃を撃った人物をしっかりと見据える。
目の前に立っているのは、１６歳くらいで黒い学ランを着ているの目つきの鋭い少年だった。
目は青と紫のオッドアイ。そして髪の色は白色に青と紫をグラデーションさせたような色。……永久様の髪と全く同じ色だった。

「…お久しぶりですね。」

洸は笑ってそう言ったが少年は洸を睨んだまま銃を下ろさない。
少年は二丁の銃を持っていた。右手には割と新しい型でスコープ付きの明らかに連射型の銃。そして左手に持っているのは逆十字と悪魔の羽をかたどった模様のついたアンティーク銃で、少年はその二丁のうち連射型の銃の方を洸に向けていた。
洸はそれを見て鼻で笑って少年に言った。

「…『ヘンゼル』では私には勝てませんよ、わかっていますよね。
そちらの『グレーテル』を使ったらどうですか？」

「ヘンゼル」と「グレーテル」とは少年の持っている銃の名前だ。
連射型の方が「ヘンゼル」でアンティーク銃の方が「グレーテル」。
「ヘンゼル」はただの銃だが「グレーテル」にはちょっと特殊な力がある。
洸は永久様の力で護られているので普通の武器では傷一つつけることはできない。だから、洸を倒すつもりなのだったら本来なら「グレーテル」を使わなければならないはずなのだ。
だが、少年は嘲笑しながらこう言うだけだった。

「はっ、お前に言われる筋合いはねえな。
用件はわかっているだろ。とっととあいつの居場所を吐きな。
言わなきゃ…今度は『グレーテル』も使うぞ。」

そう言って少年は二丁の銃を構えて洸を睨んだ。
前方には銃を構えた少年。後方には急すぎるジェットコースターの坂。普通に考えれば逃げ場はない。
洸は急に少年から目をそらし、下の方を歩いている「主人公」たち三人組に視線を下ろして言った。

「まあ、そんな怖い顔しないでください。
　そんなに焦らないで楽しいお話でも見ていればいいじゃないですか。」

「お前阿呆か？ここの世界で楽しいお話なんて一度たりとも見たことねえぜ？」

少年は鋭い目で洸を睨みつけながらそう言う。
紅の空、冷たい風、さびれた遊園地、練り歩くケモノたち。
悲しみの苦しみがはびこり、果てしない絶望に浸っているこの世界に「楽しい物語」などあるはずがない。
洸はふと笑いながらつぶやいた。

「なら、貴方が『楽しい物語』を作ったらどうですか？」

そう言うと同時に、洸はジェットコースターのレールから飛び降りた。
洸は広い遊園地のど真ん中へ落ちていく。
すかさず少年は銃の照準を洸に合わせて「ヘンゼル」を2発撃った。
だが、その弾が洸に当たることはなかった。
その弾は洸に向かってぐんぐん突き進んでいったかと思うと、不思議なことに突然盾に弾かれたかのようにポロリと下に落ちていってしまった。

まるで、不思議な力が洸を守っているかのようだった。
そして洸は普通の人では到底降りられない高さから固い地面に無事に着地してみせた。
足への衝撃も痛みもたいして感じない。もともと「普通の人」ではない洸にとって少年から逃れることは難しくもなんともなかったのだ。
少年は悔しそうに洸を睨んだ。洸は笑いながら少年に言った。

「今回の鬼ごっこも私の勝ちのようですね。
それではまた今度。永久様が待っていらっしゃるので。」

洸はそう言って赤い世界の彼方へ走って消えていってしまった。
少年は悔しそうに舌打ちして走っていく洸を目で追ったがすぐに見失ってしまった。
少年が来た道を戻ろうとした時、下の方を歩く三人組に目が留まった。
少年は嘲るように哀れむようにつぶやいた。

「馬鹿な奴らだ。どうせこの世界から逃れることなんてできねえのに。
…まあ、せいぜい頑張ってくれよ。」

そう言って少年も赤い世界のどこかへと紛れて行ってしまった。

第1部・7

ケモノや、ガラの悪そうな人々から逃げつつ、遊園地の東へと歩き始めてもう2時間は経っていた。三人は息を殺しながらアトラクションの間を通り抜けて素早く移動していく。
いつどこに人やケモノが潜んでいるかわからない。
常に周りには警戒しなければならない。
そう思いながら歩いてしばらくした時、奈々は進んでいる道の向こう側から風を感じた。
奈々はスピードを上げてその方向へと歩き出す。鏡と霧也もすぐに奈々に続いた。
そして、アトラクションの影が消えると同時に赤い光が飛び込んできて、視界が晴れた。

「うわぁ……」

目の前に広がっていたのは先ほどまでの狭苦しい遊園地とは似てもつかない広々とした丘と、てっぺんにぽつりと立っている大きな観覧車だった。
奈々たちはゆっくりと丘を登る。
かなり長い時間歩き続けたので、足が少し痛かった。
普段奈々はあまり運動はしない。そのせいか丘のてっぺんについたころにはすっかり息切れしてしまっていた。

「つ、疲れたあ…」

奈々はそう言って思わず座り込んでしまった。
そして、観覧車の入り口の柵によりかかった。
霧也も少し疲れた顔で草原に座りこむ。

だが、鏡だけは休憩をとらずに丘の向こう側を険しい表情で眺めていた。
こんな固い表情の鏡は珍しい。奈々は心配そうに聞いた。
「…鏡、どうしたの、モアイみたいな固い表情して。
また奇怪な狂獣でもいた？」
「…モアイって…」
霧也がつっこんでも鏡の表情は変わらなかった。
そして鏡はチケットを取り出して、チケットと景色を交互に見ながら表情をさらに険しくする。
そしてしばらくして鏡は舌打ちしてこちらに戻ってきた。
一体何が見えたのか奈々が不思議に思っていると鏡は言った。
「くそっ…どうも遊園地の西と東はループしてつながってるらしいな。」
奈々はその言葉を聞いて左手でチケットを取り出し、丘の向こうの景色と見比べた。
ここは遊園地の東端、観覧車のある丘だ。そこから先の説明は書いていないがとにかくここが遊園地の東端であることに間違いない。
だが、その丘の向こうに広がるのは、本来なら遊園地の西端にあるはずの花畑だった。
そして花畑の向こうに見えるのは西側にあるはずのアトラクションばかりだ。
たしかに鏡の言うとおり、この遊園地の西端と東側はループしてつながっているようだ。
西と東がつながっているということは、北と南もつながっている可能性が高い。

遊園地の端から出ることはできないだろう。
奈々はがっかりしてうつむきため息をついた。
そんな奈々を見た鏡は言った。

「ばーか、まだ諦めるのは早ぇだろ？
他に方法がないか探してみようぜ。」

奈々は鏡の顔を見た。
空は赤く、風は冷たい。それなのに鏡の顔は少しだけ笑っていた。
自分だってつらいはずなのに、鏡は無理して笑っている。
それなのに、奈々は、一度うまくいかなかったくらいで座り込みうつむいていた。
くよくよしてる場合ではない。鏡は無理して奈々を元気づけてくれているのに。
鏡の様子を見て、申し訳ない気持ちになった。
「ありがとう。」と言おうと奈々が口を開こうとした時、霧也がそれを遮って言った。

「ところでさぁ、腹減らない？」

霧也は何の悪気もなさそうな顔をして雰囲気をぶち壊しにした。
奈々も鏡も途端に呆れ顔をして霧也の方を向いた。
そして奈々と鏡は冷ややかな声で言った。

「お前、タイミング悪すぎ……」

「竹内君、お腹減ったならそこらへんに草生えてるから…」

「ＫＹ……」

「ＺＩＴＳ…」

「ん？ちょっと待った、奈々。それは何の略だ？」

「え？地獄を見そうなくらい命知らずで低俗なサルの略だよ？」

そこまで言うともう鏡も霧也も硬直したまま何も言わなくなってしまった。

奈々はどうして鏡まで何も言わなくなったのか不思議に思い、首をかしげた。

別に鏡には何も言ってないはずなのに。

奈々と鏡に言われまくった霧也はふてくされて口を尖らせながら言った。

「…そこまで言わなくてもいいじゃんか…

お腹減ったんだからさぁ…」

でも霧也の言っていることもわからないことはなかった。

奈々たちは歩き始めてから何も食べていない。

奈々も少しお腹が空いていた。ここで休憩するついでに何か食べてもいいと思う。

だが、食べられるものなんて今あるのだろうか。

「竹内君、何か食べるものって持ってるの？」

「パンが少しとビスケットが少し。

でも三人分はないかな…

ここってなかなか食べ物見つからないんだよね…

川崎さんたちは何か持ってる？」

奈々と鏡はそれぞれの鞄の中をくまなく探した。
お弁当はもう学校で全部食べてしまったのであるのはおやつだけだ。
奈々は小さな袋を取り出して中をのぞき込んだ。
鏡も鞄の中をあさりながら言った。

「俺はあんま持ってねえなー…
買いすぎたオニギリが一つ残ってるだけだ。」

「どうやったらオニギリ買いすぎるの…
私は、ハバネロのスナック菓子と、激辛カレー味のお菓子と、あと赤唐辛子ならいくらでもあるよ。」

奈々がそう言うと霧也は少し意外そうに奈々のほうを見た。
そして霧也は奈々の持っている袋の中味を覗き込みながら言った。

「へー意外だな。川崎さん辛いもの好きなんだ。
川崎さんっておとなしくて清楚そうなイメージあるから甘いものの方が好きそうに見えるのに。」

「こいつの辛いもの好きは度が過ぎてるぜ。
よく赤唐辛子を生のままかじれるよなあ。」

「そっかな？おいしいんだけどな。」

奈々は首をかしげながらそう言うと袋の中の赤唐辛子をかじり始めた。
そして鏡と霧也もそれぞれ持っているものを少しだけ食べた。
ここは生き残れる保証なんてどこにもない世界。
食べ物もわずかしかないし、人を食べる生き物もうじゃうじゃいる。
一度座り込み、当たりを見回してみて、現在の状況がようやくわか

ってきた気がした。
悲しき世界。残酷な赤い世界。ここから抜ける方法なんてあるのだろうか。
それはもう何回も思ったことだが、それでも探すしかなかった。
休憩しはじめてしばらくたった時だった。
奈々の耳に何かが届いた。驚いて奈々は顔を上げた。
かすかだがたしかに何か聞こえてくる。とりあえず、誰か女の人の声であることは間違いなかった。

「何かの……歌…？」

奈々はぼそりとつぶやき、再び耳を澄ました。
そんな奈々の様子を見た鏡と霧也も周りの様子を伺いながら耳を澄ます。
たしかに歌が聞こえる。それも素晴らしく美しい声で、とてつもなく上手い歌だ。
歌っているのは素人ではないなと直感的に奈々は思った。
そんな時、奈々は霧也がとても驚いた顔をしていて、表情が固まっていることに気がついた。

「栄…恋……？」

そうつぶやいたかと思うと霧也は突然立ち上がり歌の聞こえる方向へ走り始めた。
驚いた奈々と鏡も霧也を追いかけた。
走れば走るほど歌声は近くなっていく。
奈々たちは霧也を見失わないように必死だった。
霧也は観覧車のある丘を駆け下りて、その向こうにある花畑の方へと走っていく。
奈々たちも霧也に続いて丘を駆け下りる。

とても美しい澄んだ歌声。思わず聞きほれてしまいそうなほどの歌唱力。
霧也が何を思って駆け出したのかはすぐにわかった。
そう、この声は……

そう思った時、霧也が立ち止まった。
薔薇に少し似た、けれど薔薇ではないピンク色の花が咲き誇る美しい花畑だった。
この世界には不似合いなほど可愛らしい花々の中、一人歌っている少女の姿が見えた。
少女は空を見上げながら、これまたこの世界には似合わないくらいの笑顔を浮かべて歌っている。
奈々たちが霧也に追いつくと同時に、少女は奈々たちに気づいて歌うのを止めてこちらを向いた。
アイドルだったことがよくわかる綺麗な顔立ちにサラサラした金髪。
そして吸い込まれそうなくらい澄んだ蒼い目。
どう見たってテレビで何度も見たあのアイドルだ。

「栄恋…」

霧也は言った。その少女は、哀れな歌姫、五月原栄恋だった。

第1部・8

「栄恋……」

霧也がそう言うと栄恋はびくりと震え上がり、歌うのをやめた。
歌っているところを見られたせいか、相当驚いた様子で栄恋はこちらを振り向いた。
綺麗な金髪といい、透き通った海のような青い目といい、正真正銘、五月原栄恋だ。
栄恋は霧也の姿を見つけると、驚いた様子で目を見開いて、霧也を指差した。
どうやら霧也が栄恋の幼なじみというのは本当だったようだ。
霧也は栄恋が特に怪我もなく、無事であることを確認すると、表情を緩めて言った。

「久しぶり、栄恋。
怪我とかはなさそうだね。よかった。」

霧也がそう言うと、栄恋はおもむろにメモ帳を取り出し、こう書いて霧也に見せた。

『キリヤもここに来てたんだ。』

霧也は少しだけ笑って頷いた。だが、なぜか栄恋の表情は堅かった。
栄恋は視線を霧也からずらすと、奈々と鏡の方を向いた。
そしてメモ帳にこう書いた。

『そこの二人は誰？』

「ああ、僕のクラスメート。川崎さんと遠藤鏡。」

「あ、なんで俺だけフルネームで呼び捨てなんだ。」

鏡が少し不満そうに言ったが霧也はそれを見事にスルーした。
けれど、どうやら栄恋が興味を持ったのは口を挟んだ鏡ではなく、奈々の方のようだった。栄恋は「川崎」という名字を聞くと、奈々の顔から目を放さなくなった。
何だか妙な気分だった。奈々を見る栄恋の表情がなぜか険しいのでなおさらだ。
栄恋が突然メモ帳を取り出し、ものすごい勢いで何かを書き始めた時、花畑の向こう側から声が聞こえた。

「おい、栄恋。急におとなしくなったけど何かあったのか…？」

その時歩いてきた男性を見て奈々は驚きのあまり声をあげることができなかった。
その人は明らかに奈々がよく知っている人物だった。
相手も奈々の顔を見ると凍り付いたような表情をして立ち止まった。
この人が誰かわからないはずがない。もし一瞬でもこの人が誰だかわからなかったとしたら、きっと奈々は自分をぶち殺していただろう。
元の世界にいたころ、誰より奈々のことを気遣ってくれていた人だ。
奈々は思った。この人だけはここにいてほしくはなかったのに。

「お兄ちゃん…どうしてここに…？」

霧也と栄恋が目を丸くしてこちらを向くのがすぐにわかった。
けれどこの人は間違いなく行方不明だった奈々の兄、川崎慎だ。
奈々は驚いたが居所がわからなかった慎と会えたことは嬉しかった。

奈々は慎のところへ走り始めた。慎はきっと以前のように、優しく話してくれるだろうと信じて。
けれど、慎は凍り付いたような表情のまま何も言わなかった。
それどころか慎の表情はさらにかたくなっていくようだった。
あれ？と慎の表情に違和感を覚えた瞬間だった。
慎は右手で奈々を思いきり振り払った。
奈々はその勢いで地面に叩きつけられた。
頬と背中にじわじわと痛みが走る。
それを見た瞬間、霧也と鏡が血相を変えて奈々のところまで駆け寄ってきた。
奈々はゆっくりと起き上がり、絶望したような表情で慎を見た。
何が何だかわからない。どうして慎に叩かれてしまったのか、どうして慎がそんなに冷たい表情をしているのか。
昔は、もとの世界にいたころは、この人はこんな人ではなかったのに。
奈々は悲しくて何も言えずに慎を見上げた。
その時、一瞬だけ慎の視線が動いた。そして、奈々にはその時慎の視線の先にあったものがはっきりわかってしまった。
視線の先にあったものは、奈々の右手の甲にある剣の入れ墨だった。
奈々は氷の刃で突き刺されたような悲しみを覚え、とっさに右手を隠した。
まさか、慎はこれを見つけたから奈々を振り払ったというのだろうか。
奈々が「主人公」であり、殺すべき対象であるから奈々を拒絶したのだろうか。
慎は「主人公」である奈々を殺すつもりなのだろうか。
深い悲しみに押しつぶされそうで、奈々は何も言うことができない。

「川崎さん、大丈夫？」

「おいてめえ、自分の妹、何殴ってんだよ！」
鏡は鋭い視線で慎を睨みつけながら怒鳴った。
慎は何も言わなかった。
慎の冷たい視線はまるで奈々たちを拒絶しているようだった。
奈々はさらに悲しくなった。
そして不意に慎は奈々たちに背を向けるとそのまま歩いて去ってしまおうとした。
奈々が待ってと言おうとしたが声が出ない。
すると、突然鏡が舌打ちして慎めがけて殴りかかった。
だが鏡の拳が慎に当たる直前、何かが間に入り、鏡の拳を止めてしまった。
……栄恋だった。栄恋は右腕でしっかりと鏡の拳を止めていた。
アイドルのくせになかなか力が強いようで鏡は力を抜いている様子はないのに拳はびくとも動かない。
鏡は舌打ちして一歩後ろに下がった。
すると突然栄恋はギラリと光る何かを二本取り出した。
それは間違いなくナイフだった。鋭い光が栄恋の両手の先でギラギラ光っている。

「栄恋！何するんだよ！」

これにはさすがに霧也が怒鳴った。
だが、栄恋はその声に耳を貸さず、鏡にナイフを突きつけた。
そして栄恋はナイフを持ったまま鏡に襲いかかった。
それと同時に霧也も二人のところに走り始めた。
カチンという大きくて鋭い音が鳴り響いた。
栄恋の攻撃を防いだのは鏡ではなかった。
霧也が間に入り、銃でナイフを受け止めていた。
両者とも全く譲る様子はなく競り合っていた。

「栄恋、何でこんなことするんだ。」
霧也がそう言うと、栄恋は一歩下がってナイフを引っ込めて、メモ帳にこう書いた。
『シンにとってキリヤたちは「敵」みたいだから。』
「理由になってない。
川崎さんのお兄さんの敵をどうして栄恋が攻撃する必要があるんだよ。」
霧也は厳しく栄恋にそう言い放った。
すると栄恋はメモ帳にこう書いて霧也に突きつけた。
『シンの敵は私の敵。
キリヤの後ろにいる子、シンを殴ろうとした。
その子はシンの敵であって私の敵でもある。
その子の味方をするなら、キリヤも敵。』
霧也は一瞬言葉に詰まった。
奈々は不思議だった。どうして栄恋はこんなに慎の肩を持つのだろう。
慎と栄恋の間に何があったのだろうか。そして、何が慎と栄恋を変えたのだろう。
奈々は身を乗り出して栄恋に聞いた。
「どうして…お兄ちゃんの味方をするの？」
栄恋はメモ帳にこう書いて奈々に見せた。

ちょっとやそっとのことではこれっぽっちも揺るがなさそうな強い意志をたしかに感じた。

『シンは私の恩人だから。感謝してもしきれないくらいの。』

栄恋は青い目でまっすぐ奈々を見下ろしていた。
奈々は座り込んだまま何も言えなかった。
風が吹き、薄いピンク色の花びらが紅い空に舞い上がる。
辺りは静まり返り、沈黙が流れたがとても落ち着いた雰囲気とは言えなかった。
しばらくして栄恋が再びナイフを取り出し、霧也たちの方を向いた。
すると、栄恋の後ろで立ち止まっていた慎が栄恋に言った。

「そんなに追い回さなくていい。とっとと行くぞ。」

そう言うと慎は栄恋を置いて歩き始めた。
それを見た栄恋はナイフを下ろした。
だが、鏡と霧也はすんなりと栄恋を行かせる気はないようだった。
鏡は竹刀を構えて栄恋を睨みつけた。
霧也も銃をしまう様子はない。
その様子を見た栄恋はため息をついて何かを取り出した。
それは円筒形の物体で小さなピンが刺さっていた。
それを見た霧也は急に真っ青になって銃を引っ込めた。

「まずい。二人共、逃げるよ！」

返事をする前に霧也は鏡と奈々の腕を強引に引っ張り駆け出した。
栄恋は円筒形の物体に刺さっているピンを抜くとそれを霧也たちが駆け出した方向へと投げた。
霧也は奈々たちに返事すらさせない速さで花畑を突っ切っていった。

円筒形の物体は花畑の上空にある程度浮き上がったかと思うと、今度はどんどん下に落ちていく。
すると奈々たちを引っ張りながら走っていた霧也は花畑の片隅に突き出ている岩を見つけた。
霧也はその後ろに滑り込むと同時に二人に叫んだ。

「耳塞げっ！！」

霧也がそう言った瞬間、空さえ裂けそうなくらいの轟音と共に栄恋の投げたスタングレネードが爆発した。
眩しすぎる光と、大きな音が花畑を包んだ。

第1部・9

何分時間が経ったかわからない。
辺りを包み込んでいた光が消えたと気づくまでに少し時間がかかった。
奈々たちは霧也に言われたとおり、岩の影に身を伏せて目をつぶり、耳を塞いでいた。
スタングレネードの爆発音がまだ頭の中で響いていた。

「もう大丈夫みたいだよ。」

霧也がそう言うと、鏡と奈々は起き上がって目を開けた。
あんなに大きな爆発だったのに辺りはやけ焦げていないどころか辺りに咲いている花一つ吹き飛んではいなかった。
奈々が不思議に思って爆発があった場所を凝視していると霧也が言った。

「スタングレネードだからね。
大きな音とすごい光が出るだけで辺りを壊したりはしないんだよ。」

「しっかし、あの栄恋とかいうのなんだよあいつ。
ナイフにスタングレネードとか、武器倉庫か？」

鏡のその言葉を聞いて奈々は辺りをきょろきょろ見回した。
花畑にいるのは奈々たちだけで慎と栄恋の姿はどこにもない。あの光と爆発音に紛れて逃げてしまったようだった。
奈々は地面に座りこんでがっくりと下を向いた。
先ほどの慎の目が奈々の中で蘇ってきた。

冷たく鋭い目。あんな目の慎は見たことがない。
どうしてなのだろう。何があったのだろう。
奈々が『主人公』だからだろうか。生き残るためなら人殺しをしても構わないとでも言うのだろうか。
慎はそんな人だっただろうか。……違ったような気がする。

「……大丈夫か？」
鏡が奈々に心配そうに言った。
すると霧也が鏡に言った。

「相変わらず川崎さんにはベタ甘だねぇ。」

「…なっ、うっ、うるせぇ、そんなんじゃねえよ！」

鏡は顔を赤くしてそう言っていたが奈々は別のことを考えていた。
慎は以前は生き残るためなら人殺しをしても構わないなんて、そんなことを考える人なんかではなかった。
その理由を奈々は知っている。
だったら、慎が変わってしまったのにはこの世界のルール以外の理由が必ずあるはずなのだ。
奈々は慎が変わるきっかけとなったものは何か考え始めた。
…考えつくことは一つしかなかった。

「……五月原栄恋。」

奈々が低い声でぼそりと呟いた。
鏡と霧也が同時にこちらを向いた。

「栄恋がどうかした？」

霧也が奈々に聞いた。
奈々はいつもよりトーンの低い声で静かに言った。
「……あの馬の骨、お兄ちゃんに何しやがったんだろーなあー、あはははは。」
途端に鏡と霧也は硬直して動かなくなった。
鏡が怯えた小さな声で聞く。
「な…なんか…いつもより迫力が…」
「はは…きっと栄恋は何もしてないと…」
「そーかなぁ？じゃあ何であの二人一緒にいたんだろぉ？」
奈々は怪しげにケタケタ笑いながらそう言った。
霧也は真っ青になって何も言わなかった。
鏡が霧也の肩を軽く叩いて言った。
「悪ぃ、こいつブラコンなんだ…
だからこいつのキャラ疑わないでやってくれ。こういうキャラだから。」
「あはは…僕むしろ鏡の趣味を疑うよ。」
苦笑しながらそう言う鏡と霧也を奈々は華麗に無視した。
慎が変わった理由は五月原栄恋にあるのではないだろうか。奈々はそうとしか考えられなかった。
あの二人が一緒に行動しているのはなぜなのだろう。あの二人の間に何があったのだろう。

第一あの五月原栄恋と慎との接点がどこにあったのだろうか。
慎は奈々のたった一人の兄だ。慎のことを放ってはおけなかった。

「ねえ、二人とも。お願いがあるんだけど。」

奈々がそう言うと鏡と霧也は振り向いた。
奈々は真剣な口調で言った。

「元の世界に帰る方法を探す前に、お兄ちゃんともう一度話がしたいんだけど、だめかな？」

奈々がそう言うと鏡と霧也はやっぱりなとでも言うように顔を見合わせた。
そして二人は言った。

「そう言うだろうなと思ってたんだよ。
別にそのくらい構わねえよな？」

「うん、勿論。僕も栄恋のこと、このままじゃ心配だしね。」

奈々は二人がそう言ってくれたことに安心した。
そして右手を強く握りしめて立ち上がった。
もう一度話がしたい。どうしても慎が変わってしまった理由が知りたい。

「んじゃそろそろ行こうか。
栄恋たちたしかあっちの方に行ったよね？」

「んーあー、多分な。」

「曖昧すぎ…。鏡、使えないなあ。」

奈々の言葉に少ししょげている鏡をよそに奈々は再び広い広い遊園地の方向へ歩き始めた。

第1部・10

栄恋と慎は奈々たちのところから離れて再び歩き始めていた。
気がつけば周りの景色は花畑から再び遊園地に変わっていた。
栄恋は慎の後を必死に追いかけていく。慎は栄恋を待ってはくれなかった。
追いかけても慎は栄恋よりかなり背が高く歩幅も広いので全然追いつけない。
それでも栄恋は慎のことを追いかけていった。どうしても何かお礼がしたかった。
慎のために何かをしたい。なぜならこの人がいなければ、栄恋は声を失ってから二度と歌を歌うことなく死んでしまっていたかもしれないから。
そんな時、慎が急に足を止めた。

「ここまで来れば大丈夫だろ…」

栄恋はメモ帳を取り出してこう書き付けて慎に見せた。

『今の子はシンの妹？』

「ああ。」

そう言うと慎は黙り込んだ。
慎に妹がいたなんて知らなかった。まあ、慎は栄恋に自分のことを何も話さないから当たり前といえば当たり前なのだけど。
それにしても、慎は妹と仲が悪いのだろうか。正直言って栄恋は慎が奈々を突き飛ばした時、少し驚いた。
妹がいるとか、そのくらい教えてくれてもいいのにと栄恋は思った。

愚痴でもいいから、何か自分のことを話してくれればいいのにと思った。
そんなことを考えていると、慎が急に栄恋に聞いた。

「…お前、あいつの右手、見たか？」

珍しいなと栄恋は思った。栄恋は慌ててまたメモ帳を取り出した。
あいつとは、きっとあの奈々という妹のことだろう。
けれど、あいにく栄恋は奈々の右手なんてしっかりは見ていなかった。
栄恋は仕方なくこう書いた。

『ごめんなさい、覚えてない。』

「…使えないな。」

栄恋は少し悲しくなって下を向いた。
せっかく慎の役に立てることがあったかもしれないのに自分は何をやっているのだろう。
そして、また慎は栄恋に背を向けて歩き出すのだろうと栄恋は思った。
だが、今日はそうではなかった。慎は話を続けた。

「…あいつの右手に、剣の入れ墨があった。」

栄恋は驚いて、しばらく何か答えるためにペンを動かすことすらできなかった。
あんなおとなしそうな子が趣味で入れ墨を入れることはおそらくない。
そして、剣の入れ墨は「主人公」の証。

つまり主人公は……

「主人公はあいつってことか。」

驚く栄恋とは対照的に慎は冷静な口調で言った。
慎が何を思っているかはよくわからなかった。
慎は自分の左手を服の袖から出して手の甲を見た。
慎の手の甲には、黒い大蛇の入れ墨があった。
そう、慎は「魔王」にあたるのだ。
つまりあの奈々という子が「主人公」なら、あの子を殺すことが、慎にとってこの世界から抜け出す唯一の手段となるのだ。
栄恋は硬直したまま動けなかった。
慎は何を考えているのだろう。「主人公」が誰だかわかった今、慎は何を思っているのだろう。
そして、これからどうするのだろう。そう思った時、聞き覚えのない声が後ろから聞こえた。

「へえ、お前が『魔王』なのか。」

栄恋と慎は驚き素早く後ろを向いた。そして栄恋はすぐにナイフを二本取り出して慎の前に出た。
少し高めの建物の上に少年が一人立っていた。
髪の色が青と紫と白が混ざり合ったような奇妙な色で、目は青と紫のオッドアイで、右手には比較的新しい型の銃を、左手には逆十字と悪魔の羽をかたどったモチーフのついているアンティーク銃を持った不思議な雰囲気の少年だった。
この少年一体何者だろう。髪の毛の色や目の色のこともそうだが、栄恋と慎の背後を取る時点でただ者ではない。
栄恋はナイフを構えて警戒し、目の前の少年を強く睨みつけた。
ひょっとしたら、慎が「魔王」だと知って、慎を殺しに来たのかも

しれない。
少年がもし両手の銃を少しでも慎に向けようとしたら遠慮はしないと栄恋は思った。
少年は栄恋を見下ろしながら鼻で笑って言った。

「おっかねえ女だな。
そんなに睨まなくても『魔王』だから殺すなんてことはしねえよ。」

栄恋は少年を睨むのを止めなかった。そんな言葉、信用できるはずがない。
それにこの少年の人を馬鹿にしたような態度が栄恋はどうにも気に入らなかった。
すると少年は栄恋を無視して慎の方を向いて意地悪く笑って言った。

「妹が『主人公』だなんて大層不運だな。」

それを知っているということは先ほどの栄恋たちの話を聞いていたということか。
栄恋はますます腹が立ってナイフを握りしめた。この少年、相当性格が悪いなと栄恋は思った。
慎は無表情のまま何も言わない。怒っているのかどうかもわからなかった。

「おい、魔王。お前に二つ聞きたいことがある。」

少年は乱暴な口調でそう言った。
その態度が気に入らなかった栄恋は思わず近くの壁を思わず耳を塞ぎたくなるような勢いで蹴った。

「うるせえ、黙れ脇役。俺は今こいつに聞いているんだ。」
黙れはこっちの台詞だと栄恋は思った。
全く、こういう怒鳴りたい時に声が出せないのは本当に困る。
代わりに手持ちの手榴弾でぶっ飛ばしてやろうかと思っていると、
少年が慎に言った。

「まずは一つ目だ。お前ら、あの花畑から来たんだよな。…何もなかったのか？」

「…何もなかったわけではないが…」

「具体的に言うと奇抜なピンク色の髪した趣味の悪い服装の女につきまとわれたりしなかったか？」

少年がそう言うと慎はゆっくりと栄恋の方を見た。
そしてじっと栄恋の方を見た後再び少年の方を向いて言った。

「髪の毛はピンク色ではないな。」

その言葉に栄恋は少ししょんぼりして下を向いた。
少年は少し腑に落ちない表情をした。

「そうか…あいつ、今は出払ってるのか…？
まあいい、二つ目いくぞ。」

すると少年の顔から急に意地悪い笑みが消えて、冷たくどこか寂しげで真剣な表情になった。
少年は青と紫の二つの色の目で慎を見つめながら言った。

「…お前は、これからどうするつもりなんだ…？」

「お前なんかに言う筋合いはない。」

慎は冷たくそう言い放った。

すると、また少年は鼻で笑って言った。

「やっぱりな、そう言うと思った。

まあいい。どうせ俺はお前らに期待はしてないしな。」

そう言うと少年は銃をしまった。

そして未だに少年に対して警戒している栄恋と慎に馬鹿にしたように笑って言った。

「じゃあな、魔王と脇役A。

せいぜいがんばれよ。無駄だろうけどな。」

そうムカつく一言を残して少年はどこかへ歩いていってしまった。

第1部・11

奈々たちは再び遊園地の方に戻ってきた。
赤い月に照らされたメリーゴーランドやゴーカートが不気味に見える。
物陰にケモノや他の人が潜んでいるかもしれないと思うと恐ろしかった。
奈々たちはメリーゴーランドの裏からジェットコースターのレールの下を通り抜け、様々なアトラクションの乗り場の裏の暗い路地へとたどりついた。
奈々たちは周りに誰もいないことを確認すると、立ち止まり、三人ともその場に座り込んだ。

「とりあえず、遊園地の方まで戻ってきたね…」

「あいつらいねぇなあ…」

「そんなに簡単には見つからないと思うよ。
とりあえず、手当たり次第に探してみよう。」

霧也がそう言い、奈々と鏡は頷いた。
奈々は辺りを見回した。周りには様々なアトラクションが立ち並び、視界を妨げていた。
多分これがなかったらもっと広々していて、慎を探しやすくなるのだろう。

「しっかし、広くて入り組んだ遊園地ってのも考えものだな。
これじゃいつまで経っても見つからねえよ。」

「駄目だなあ、鏡は。」

奈々がそう言うと鏡は少ししょぼくれて下を向いたが奈々は気づかなかった。

奈々たちはそこから遊園地の中心部の方へと歩き始めた。

建物や乗り物の影に身を隠し、人やケモノに見つからないようにしながら進んでいく。

先頭に鏡が立ち、奈々が左右に注意しつつ続いていき、最後に霧也が後ろから誰か来ないか見ながら行った。

いつでも応戦できるようにと、三人ともそれぞれの武器を構えながら注意深く歩いていった。

途中で何度も疲れた顔をした人や、獲物を探し回るケモノを見かけた。そのたびに、特に人を見かけた時に奈々は怖くて震え上がりそうになる。

多分、鏡や霧也だったら人よりケモノの方が怖いと言いそうだが、奈々はどうしても人を見るたびに右手の入れ墨のことが気になってしまうのだった。

奈々たちは順調に進んでいった。

だが、途中で曲がり角を曲がろうとした時、突然鏡が止まった。

「しっ、…なんかいる！」

奈々と霧也も立ち止まった。

三人とも曲がり角のところを緊張しながら見た。誰もいない。

だが、耳をすますと誰かの足音が聞こえてきた。

誰かが曲がり角からやってくる。奈々はチェーンソーの持ち手を強く握りしめた。

すると、足音が止まった。向こうも奈々たちに気づいたのかもしれない。

すると霧也がこう言った。

「僕が様子を見てくる。
二人ともここで待ってて。あ、後ろも油断したら駄目だよ。」
そう言って霧也が銃を持ってゆっくりと慎重に曲がり角へと近づいた。
霧也の足音が冷たいコンクリートの路地に響く。向こう側が動く気配はない。
霧也はコンクリートの壁に背中をつけ、曲がり角の端で少し止まり、向こう側が動かないことを確認すると、素早く角から飛び出し、角を曲がったところにいる人物に銃を向けた。
「動かないでください。
何もしなければこちらも危害は加えません。」
霧也が誰かに銃を向けながらそう言っているのが奈々たちの所から見えた。
すると霧也が横目で奈々たちに来るように合図を送ってきた。
奈々たちも恐る恐る霧也の所まで歩いていった。
その間も霧也は相手に銃を突きつけていて、警戒体制を崩さなかった。
二人は霧也のところに辿り着くと、曲がり角のところにいた人物を見た。
目つきの悪い男性二人組だった。片方は背が高くて、もう片方は背は低かった。二人とも奈々たちより年上で大学生くらいに見えた。
背の高い方は銃を、低い方は包丁を手に持っていたが、霧也の方が構えるのが早かったようで二人とも怯えた顔をしながらこちらを見ていた。
背の高い方の男が言った。

「強いな、あんた。」
「乱暴なまねをしてすいませんでした。
ちょっとお聞きしたいことがあるんですが…」
「ああ、何だ？」
背の高い男は落ち着いて武器を下ろしてそう言った。
どうやら攻撃されることはなさそうだし、奈々たちの質問にも答えてくれそうだ。
奈々は少しほっとした。霧也が続けて尋ねた。
「この辺りで背が高くて茶髪の男性を見ませんでしたか？」
「それだけじゃよくわからねえな。背が高くて茶髪の奴なんていくらでもいる。」
「たしかにそうですね、すいません。
アイドルの五月原栄恋と一緒に行動している男です。」
それを聞いた途端、二人は青ざめて顔を見合わせてひそひそ何か話し始めた。
なぜ二人が急に青ざめたのか奈々にはわからなかった。横目で鏡の方を見てみたがどうやら鏡もわからないようだった。
そして、二人は奈々たちにおそるおそるこう言った。
「…なあ、あんたらそれって『メドゥーサ』じゃねえか？
お、お前ら何でそんな奴…」
「…『メドゥーサ』？」

奈々と鏡はきょとんとして首をかしげた。
霧也が男たちに言う。

「何ですか？その『メドゥーサ』って。」

男たちはそれを聞くと不思議そうな顔をした。
そして二人でひそひそ何か話したかと思うと背の低い方が奈々たちにこう言った。

「あんたら『メドゥーサ』知らねえのか？
有名だよ。その五月原栄恋と行動している男のことだ。
非情な奴でさ、邪魔する奴には容赦ねえんだ。
そいつの『能力』が視線の合った奴を石化させる能力で、ケモノも人も邪魔する奴はみんな石にしちまうからそんな異名がついてんだよ。」

「はあ…わかりました。ありがとうございます。
それで、あなたがたはその『メドゥーサ』を…」

「見てねえな。見てたらこんなとこにいねえよ。」

残念だが慎に関する情報は得られなかった。
それにしても、奈々は慎がこの世界でそんなに有名だったなんて全く知らなかった。
慎がこの世界でそんなことをしているなんて信じたくなかった。
だが、先ほどの慎の様子を思い浮かべると奈々は何も言えなかった。

「そうですか…ありがとうございました。」

奈々たちはそう言って二人にお礼をして、曲がり角を曲がって歩いていった。
だが、歩き出して少しした時、急に誰かが後ろから走ってくる音がした。
奈々は急に怖くなった。鏡と霧也は気づいていないようで何も言わない。
だが、その音はどんどん近づいてくる。奈々は嫌な予感がして、今まで片手で持っていたチェーンソーを両手で持ち直した。
そして、足音が奈々の真後ろまで来た時、奈々は素早く振り返ってチェーンソーを大きく振った。

カチンと金属がぶつかり合う音が響いた。
チェーンソーの刃が刃渡り３０センチほどの大きさの包丁を受け止めている。
先ほどの背の低い男が包丁を持って奈々に突っ込んでこようとしたのだった。
先ほどまで二人が攻撃してくる気配なんてまるで無かったものだから奈々はわけがわからず混乱していた。

「へえ、意外と反射神経いいな。」

背の低い男はそう言った。
男が奈々を押す力は強かった。だが奈々は負けじと力いっぱい押して、なんとか男を払いのけた。
だがその途端、奈々のこめかみに冷たい何かが突きつけられた。

「動くな。」

もう一人の背の高い男が奈々に銃を突きつけてそう言った。
奈々の背筋が震え上がった。鏡が荒い口調で言う。

「おい、何だてめ…」

「動くなよ。動いたらこの女撃つぞ。」

鏡は悔しそうに歯を食いしばった。
対して霧也は冷静にその様子を見ていた。
男は二人に向かって、どちらかというと霧也の方を向いて言った。

「二人共、武器を捨てな。あと食料もな。
それと手の甲見せろ。ひょっとしたら『主人公』か『魔王』がいるかもしれねえ。」

鏡が憤慨して刀を振り上げようとしたが霧也が制止した。鏡は仕方なく引き下がる。
鏡はしばらく眉間にしわをよせて男を睨んでいたが銃を突きつけられている奈々を見ると舌打ちして刀を捨てた。
霧也も銃を捨てた。だが、鏡と比べるとかなり冷静だった。

「おい、本当にそれで全部か？
まだ武器、隠し持ってたりしねえだろな？」

「え、全部ですけど。」

男はまだ霧也を睨んでいた。霧也たちよりも優位に立っているにもかかわらず男は慎重だった。
きっと、先ほど霧也が男たちが武器を出すより先に銃を突きつけたのを見て警戒したのだろう。
銃を突きつけている男は霧也の方ばかり警戒していて奈々の方は全く見ていなかった。

奈々はチェーンソーを強く握った。今ならいける、と奈々は思った。
奈々はチェーンソーを力いっぱい振り回した。

「ぎゃあああああ！」

鼓膜を引き裂くような悲痛な叫び声が響き渡った。
男の腕から鮮やかな赤い血がドクドクと流れ出ていた。
奈々はその時になってようやくスイッチを入れてしまっていたことに気がついた。
奈々は心臓の鼓動が急に早くなるのを感じた。そして、怖くなって思わず後ずさりする。
それを見たもう一人の背の低い男が少し怯えたような顔をした後、包丁を奈々に向けて突進してきた。
だがその時、霧也が素早く上着の内ポケットからナイフを取り出し迷わず男に突進して男の腹に突き刺した。
男は腹から溢れんばかりの鮮血を流し、目を一瞬大きく見開いたかと思うとそのまま地面に倒れこんで人形のように動かなくなった。

「う…あ…あぁ…ひいっ」

背の高い男はひどく青い顔をして奈々と霧也の方を見た。
そして銃を捨てて腕から血を流しながら逃げていった。

「大丈夫？」

霧也が奈々にそう言ったが、奈々は血のついたチェーンソーを握ったまま動けなかった。
胸の鼓動が鳴り止まない。手がまだ震えている。
先ほどの叫び声と流れ出る血の鮮やかすぎる赤が脳裏に焼き付いて消えなかった。

自分がやったのだ。自分がこの手で、人の腕を切りつけたのだ。
チェーンソーについた血がその証拠だ。
そんな自分が怖くて、恐ろしくて、許せなくて、奈々は震えて立ち上がれなかった。

第1部・12

「奈々、大丈夫か？」

鏡が心配そうに奈々に言った。
奈々はまだチェーンソーの赤い柄の部分を握ったまま震えていた。
ぴちゃりぴちゃりと血が滴り落ちるたびに奈々は締め付けられるような思いがした。
罪悪感は膨れ上がって奈々の心を埋め尽くしていく。
わざとではなかったし、わざとでなくてもそうするしかなかったとはいえ、自分が他人の腕を斬りつけてしまったことが怖くて仕方がなかった。
これからまた、さっきの二人のように奈々たちに攻撃してくる人が現れるのだろうか。
そして、そのたびに奈々はこうしてこのチェーンソーで人を斬りつけ、時には殺していくしかないのだろうか。
奈々は震える声で言った。

「どうしよう…あの人の腕切っちゃった…どうしよう…」

怖くてチェーンソーの赤い柄を持つ手が震えた。
その時、鏡が奈々の頭を撫でながら、唇をきゅっと噛んで言った。

「悪い…俺がもっと後ろに注意してたら…こんな思いさせなかったのに…」

「注意してなかったのは僕もだよ。…ごめん。」

霧也もうつむいてそう言った。

奈々は首を振った。

「ううん、二人のせいじゃないよ。私も注意が足りなかったし。」

そう言った時、奈々はあることを思い出した。
霧也に刺された人はどうなったのだろう。
奈々はすぐに振り向いてその人の方を見た。
その人は胸にナイフを突き立てられた状態で地面に横たわっていて、刺された箇所からは鮮やかな赤色の血がだらだらと流れ出ていて灰色のコンクリートを染めていた。
奈々はその人の手に触れてみた。
もう手は冷たくて、息もしていなかった。

「…ごめん。」

霧也がそう言った。
男はもう死んでいた。もう喋ることも包丁を振り上げてくることもなく、ただそこに横たわっていた。
奈々は急に悲しくなった。奈々たちに銃を突きつけてきた男とはいえ、辛かった。

「…これからも…こんなことして…そうしないといけないのかな…？」

奈々は静かにそう呟いた。
沈黙が流れた。赤い月がただ奈々たちを見つめていた。
何分経ったかもうわからない。
ようやく霧也が答えた。

「そうするかしないかは、本人の自由じゃないかな。

…けどそうでもしないと生きていけないって僕は思う。」
霧也は悲しそうに、けどはっきりとそう言った。
奈々と鏡は同時に霧也の方を向いた。
複雑な気持ちだったが否定することなんてできなかった。
霧也は急に立ち上がってどこかへ歩き出した。

「行こう。だいぶ歩いたし、どこかで一度休もうよ。」
霧也の言葉に奈々と鏡もうなずいた。
奈々は立ち上がって、一度後ろにいるもう死んでしまった人の顔を見た。
きっと死にたくはなかっただろう。
複雑な気持ちを抱えたまま奈々は歩き出した。鏡も霧也も奈々に続いた。
そしてさびれた遊園地を三人はまた歩き始めた。

◇　◇　◇

奈々たちがたどり着いたのはちょうどお化け屋敷のあたりだった。
建物はもう壁のところがあちこち剥がれ落ちていて、かなり古い建物であることがよくわかった。
建物の中は真っ暗で何が出てくるかわかりそうにもなく、まさにお化け屋敷といった感じだった。
お化け屋敷の建物の裏の方は薄暗くてじめじめしているが、人やケモノから気づかれにくいし誰かが近づいてきてもわかりやすい場所となっていた。
お化け屋敷の中と裏を見比べた後、霧也が言った。

「中と裏、どっちがいい？」

「中と裏ってな…第一何でよりによってお化け屋敷なんだよ…」

「竹内君、お化けなら竹内君が天に召されてから十分見られるから別のところで休もうよ…」

鏡と奈々は不満そうに言った。
霧也は困った様子で言った。

「えー、じゃあコーヒーカップのとこにする？
コーヒーカップだとケモノとか人から見つかりやすいよ？
３６０度全方向警戒しなきゃいけないし。」

奈々と鏡は何も言えなかった。
確かに霧也の言うとおりだ。できる限り危険は避けたいに決まっている。
全方向警戒しないと攻撃される危険があるというのは確かに厄介だ。
二人はしぶしぶ答えた。

「しょうがねえなぁ…」

「不注意で襲われて血まみれスプラッタは嫌だしね…
お化けの方がただの迷信な分だけマシかなぁ…」

「じゃあ中と裏どっちがいい？」

「…お化け屋敷の中で休憩する奇人がいると思う？」

奈々はため息をついた。
三人はお化け屋敷の裏へと歩いていった。
裏は薄暗くて狭い路地になっていて他のアトラクションのところへの近道にもなっていた。
これなら警戒するのは前後の二方向ですむ。
居心地がいいとは言えないけれども今は状況が状況だから仕方がない。
奈々が適当なところに座ろうとした時、靴の先に何かが何かが当たった。
奈々が足下を見ると、そこにはナイフが一本鋭く光っていた。
奈々は危ないなと思ってそれを拾い上げた。
危うく座った時に怪我をするところだった。
すると霧也が言った。

「あ、ナイフ落ちてたんだ。
それ持っておいた方がいいよ。武器は貴重だからさ。
それにナイフは弾数も関係ないし使い捨てでもないしね。」

「ここってこんな危険物がごろごろ転がってるとこなの？」

奈々は不思議に思って霧也に聞いた。
普通なら道端にナイフなんて落ちているわけがない。
霧也は苦笑して言った。

「別にごろごろってほどはないけど…
普通なら落ちてないものが落ちていることはよくあるよ。
ナイフだけじゃなくて銃とか手榴弾も落ちていたりするし。
僕のこの銃も拾い物だしね。」

奈々はナイフの先をハンカチで覆って鞄の中に入れておいた。

こんな物を持ち歩かなくてはいけなくなったのかと思うと悲しかった。
奈々たちはその場に座り込んで少し休憩した。
ここに来てから歩いてばかりいたのでへとへとだった。
けれどここでそう何十分も休憩しているわけにもいかないのだろう。
そうこうしていればまたケモノに見つかるのだろう。
一体何時間歩いたのだろう。空はずっと鮮やかな赤のままで、月が動かないので今が何時だか全くわからない。
いつまで体力がもつかなと奈々は思った。
すると、不意に鏡が言った。

「霧也…お前なんであいつ殺した？」

霧也は表情が曇った。「あいつ」とは多分先ほど奈々に包丁を向けて突進してきた男のことだろう。
霧也は下を向いた。霧也は悲しそうに悔しそうに歯を食いしばっていた。

「ここじゃ、仕方ないことなんだよ…」

「…仕方ないって何だよ。お前な…」

「ああでもしなかったら川崎さんが死んでたよ？」

鏡はぐっと言葉に詰まった。
霧也はため息をついて「鏡は甘いよ。」と呟いた。
奈々は二人の顔を交互に見たが何も言うことができなかった。
しばらくして、霧也がまた口を開いた。

「僕が、栄恋を探して見つからなかった日の帰りにバスに乗ってこ

こに来たってこと言ったよね。
あの時、本当は一人でここに来たわけじゃなかったんだ。栄恋が入院していた病院の看護婦さんが二人僕と一緒にここに来たんだよ。」

「…何で黙ってたの？
その人たちは今どこにいるの？」

奈々がそう言うと、霧也の表情が更に暗くなり、下を向いた。
しばらく霧也は何も言わなかったがやがて低い声で言った。

「死んだよ。」

「どうして？」

「一人はケモノに喉元咬まれて死んだ。
もう一人は……」

霧也はそこから先をなかなか言おうとしなかった。
奈々が言った。

「…もう一人は？」

霧也は奈々から目をそらして言った。

「川崎慎に殺された。…その時に栄恋を見かけたんだよ。」

奈々も鏡も驚いて思わず大声を出した。
ショックだった。霧也の口からそんな言葉が出ると思っていなかったし、慎がそんなことをしたなんて信じたくなかったから。

「その人は食糧も無くてケモノから逃げ続ける日々にうんざりしていたんだ。
そしたら、ある日左手に大蛇の入れ墨がある男を見つけたんだ。
…それが川崎慎だったんだ。
…川崎さん、辛いかもしれないけど、『魔王』は川崎さんのお兄さんだよ。」

奈々の表情が凍り付いた。指先が震えて動かない。
よりによって自分が『主人公』で慎が『魔王』だなんて。
奈々の表情が一気に青ざめた。
深い悲しみと絶望感が奈々を襲った。
霧也は話を続けた。
「その人はその入れ墨を見るなり川崎慎を殺そうとした。
…きっともうこんな生活に耐えられなかったんだろうね。
そしたら返り討ちにされちゃったってわけさ。
…正直あの人を殺した相手を川崎さんが『お兄ちゃん』って呼んだときは驚いたよ。
だから余計に言えなかった。
ごめん…」

奈々は霧也を責めなかった。責めてる場合ではなかった。
まさか慎が『魔王』だったなんて。
奈々はそのことしか頭になかった。
『魔王』がこのゲームを制するには『主人公』を殺すしかない。
つまり奈々を殺さなければならない。
奈々はあの時の慎の冷たい目を思い出した。
やはり慎は奈々を殺すつもりなのだろうか。慎はもう昔とは変わってしまったのだろうか。
不安と悲しみはやがて疑いと恐怖に変わっていった。

第1部・13

「うそ…嘘でしょ…
そんな…」

奈々は思わずそう言った。
だが霧也の表情は変わらなかった。
奈々は悲しくてうつむいた。
どうしてこの世界はこんなに残酷なのだろう。
奈々にとって慎は兄であり、命の恩人であり、唯一の肉親だ。
その慎が『魔王』だなんて。
『魔王』がこの世界から抜け出すには『主人公』を殺し、この世界から抜けられるように頼むしかない。
『主人公』でも同じだ。そうなると『主人公』と『魔王』は否応なく殺し合わなければならない。
奈々はえぐるような心の痛みを感じた。
どうしてこんなことになってしまったのだろう。
どうしてこんな世界に来る羽目になってしまったのだろう。
どうしてこんな残酷なことをさせる人がいるのだろう。
どうして、よりによって奈々が『主人公』で慎が『魔王』なのだろう。
まるで何かの運命のようだった。何か魔女のような恐ろしい者の手で仕組まれたことのように感じた。
その時、鏡の表情が急に険しくなり、きょろきょろ辺りを見回しはじめた。
奈々が鏡に聞いた。

「どうしたの？」

「なあ…なんか音しねえか…？」

奈々は耳をすませた。
かすかにしか聞こえないがたしかにどこからか音がする。
何かの羽音のような音と何かはわからないが高い音が聞こえてくる。
ドクンと心臓の音が響くのがわかった。
場の空気が一気に緊張した。奈々はもうチェーンソーを手に握っていた。
音はどんどん近づいてくる。
羽音も大きくなってきて、先ほどまで何の音だかよくわからなかった高い音ももう何かの鳴き声だということがわかる。
鏡が刀を抜き、霧也も銃を握りしめた。
そして一瞬あらゆる音が消え、まるで時間が止まったかのように辺りが静まり返った。
その途端、霧也の表情が青ざめ、銃を下ろして叫んだ。

「逃げろ！」

霧也がそう叫ぶのと同時に、甲高い鳴き声と共にお化け屋敷の建物の一部が勢いよく砕け散り、そこらの建物よりも大きそうなくらいの巨大な鷲のような形のケモノが姿を現した。
三人ともお化け屋敷の裏側の路地を走り抜け、他のアトラクションへと続く細い道へと急いだ。
だが今回のケモノはそんなことでは懲りなかった。
ケモノは羽を広げると風のように奈々たちの頭の上を飛んで行き、あっという間に先回りされてしまった。
奈々たちは思わず立ち止まった。逃げ場を探したがここはとても狭い一本道なので戻る道なんて今来た道しかない。
だがここから戻ってもすぐ追いつかれてしまうだろう。
ケモノの目が光り、一瞬ニヤリと笑ったような気がした。

そして、ケモノは巨大な翼を広げて奈々たちに攻撃しようとしてきた。

「くそっ…しょうがねえな！」

真っ先に動いたのは意外にも鏡だった。鏡はケモノの羽をかわして後ろに回り込み、羽の付け根のあたりを勢いよく切った。
鼓膜が破裂するかと思うほどの悲痛な叫び声が辺りに響いた。
奈々の心がえぐれるように痛んだが今はそれどころではなかった。
ケモノは今の痛みで怒ったのか、鏡の方へ向きを変えた。
まずいと奈々は思った。相手が大きすぎる。鏡一人でかなうはずがない。
その時銃声が二発聞こえたと同時にケモノの後頭部二カ所から血が吹き出た。
奈々の隣にいたはずの霧也はもう遥か前の方で煙立つ銃を手に握っていた。

「一人狙いはよくないよ。おいで、デカ鳥さん。」

霧也は鋭くケモノを睨みつけながらそう言った。
だがケモノは二発の銃弾を食らったにもかかわらず全く怯む様子がなかった。
まだまだ元気そうだ。このままだと二人ともやられてしまう。
手伝わなくちゃと奈々は思った。だが同時に心の中から「また悲しい思いをするの？」と声が聞こえた。
奈々は一瞬迷った。奈々が腕を切りつけてしまった男性の青ざめた表情が頭に浮かんだ。

「けど…ここで私が何もしなかったら…」

奈々は顔を上げた。そしてチェーンソーのスイッチを入れて勢いよく走り出した。
何もしないで二人を見殺しにするほうがよっぽど悲しいと思った。
ケモノが羽を使ってまた攻撃をしかけてきた。
奈々は素早く体勢を低くしてその攻撃を避け、ケモノの首の後ろをチェーンソーで思い切り斬りつけた。

だがその途端予想外のことが起こった。
斬りつけられたケモノがもがくように勢いよく羽ばたきはじめた。
その時、羽が他の建物に当たり、建物の壁などが剥がれ落ち、奈々たちめがけて落ちてきはじめた。
鏡が急に青くなって叫んだ。

「やべっ！」

「嘘でしょ！？」

奈々は全速力で走り、落ちてくる瓦礫から逃げ始めた。
歩いてきた道を迷わず走っていく。
瓦礫はまるで狩りをする鳥のように奈々を狙って落ちてくるようだった。
一瞬でも止まればすぐさま瓦礫の下敷きになってしまうだろう。
崩れ落ちるような音のせいで何も聞こえない中、奈々は無我夢中で走りつづけた。
その時、紅の強い光が奈々の目に入ってきた。
もう少しで先ほどのお化け屋敷のところに戻れる。奈々は持てる力を振り絞って必死に走った。
光はどんどん強くなっていく。そしてついに奈々は明るくて鮮やかすぎる月の下に飛び出した。
不気味な赤い月の姿が見えた途端、奈々は思わず座り込んでしまっ

た。
考えてみればもう相当な時間歩き続けていたんだ。奈々の足は疲れてしばらく力が入りそうになかった。
奈々は疲れてその場に座りこんだ。そして両端を見てようやくあることに気がついた。

「…やば…鏡たちいない…！」

奈々はその時ようやく鏡たちとはぐれてしまったことに気がついたのだった。
もと来た道の方を見ても誰もいない。ただ瓦礫が積み重なってあるだけだった。
別の方向に逃げたのかもしれない。まさか瓦礫につぶされたりしていないだろうか。
一気に顔が青ざめて一瞬安心した心がまた張り詰めはじめた。
不安が一気に押し寄せ、心細さで震え上がりそうだった。
その時、追い討ちをかけるようにまた何かの鳴き声が聞こえた。
狼のような低い鳴き声だった。奈々はビクリと震えた。
足がすくみ、立ち上がることもできない。
チェーンソーを握って戦う体力はもう残っていなかった。
なのにどうして、どうしてこうみんな残酷なのだろう。
目の前には鋭い牙を光らせた狼のようなケモノが二体、こちらを見つめていた。
二体はじりじりと奈々の方に近づいてきた。
奈々は壁にへばりついて震えることしかできない。
足にも手にも力が入らなかった。
だが容赦なくケモノたちは奈々に近づいてくる。
鏡たちの様子をもっと見ながら行動すればよかったと後悔したがもう遅い。
ここで死ぬしかないのだろうか。奈々は壁にへばりつきながらそん

なことを思った時だった。

上の方からナイフが二本飛んできてケモノの背中に突き刺さった。
ケモノたちは痛々しげに叫びながらもがきはじめた。
そんなとき、すかさずもう４本ほどナイフが上から降ってきてケモノの周囲のあちこちに突き刺さった。
これにはさすがにケモノたちも危険を感じたのか怯えたように後ずさりすると二匹ともさっさとどこかに逃げてしまった。

「誰…？」

奈々は上を見上げながらそう尋ねた。尋ねてから後悔することも知らずに。
相手は答えなかった。一体だれがケモノを追い払ったのだろう。
奈々がナイフが飛び出したあたりを見つめ続けていると、奈々の背中にある建物の屋根から誰かが飛び降りてきて音もたてずに奈々の目の前に着地した。
飛び降りてきた人物を見て奈々は目を丸くした。
そして今鏡と霧也が居ないことを改めて悲しんだ。
美しくて長い金髪の髪の毛が風に揺れ、サファイアのような青い大きな瞳がこちらを見つめていた。
そして、その人物はメモ帳にこう書いて奈々に見せた。

『また会ったね、ナナさん。』

本当に運が悪いと奈々は思った。
目の前にいる五月原栄恋は両手にナイフを持ったまま、まっすぐ奈々の方を見つめていた。

第1部・14

「五月原…栄恋…！」

奈々は思わず後ろに後ずさりした。
けれどすぐに冷たい壁に背中が当たる。
奈々はビクリと震え上がった。
栄恋のナイフの輝きが目に入り、奈々は恐怖感に襲われた。
こんなとき、鏡と霧也がいてくれたらと奈々は思った。
だが栄恋は攻撃してくる様子はまるでなかった。
ただ両手にナイフを持ち、サファイアのような瞳で奈々を見つめている。
けれど奈々は警戒を解かない。
恐怖を感じながらもチェーンソーはしっかり握っていた。
奈々は栄恋に言った。

「…何の用？私を殺しにでも来たの？」

すると栄恋は静かに首を振った。
栄恋はメモ帳にこう書いて奈々に見せた。

『別に。ただ通りかかっただけ。』

奈々は疑わしげに栄恋を見た。
栄恋は無表情でこちらを見ていたので何を考えているのか全くわからない。
奈々はチェーンソーを支えにして、疲れた足になんとか力を入れて立ち上がった。
すると今度は栄恋の方から奈々に聞いた。

『貴女は慎が何を願っているか知ってる？』

栄恋はそう書いて寂しそうな、けれど必死な目で奈々を見た。
奈々は今の慎が何を願っているかなんてわからない。
あの冷たい目になってしまった慎の願い事とは何なのだろう。
栄恋はこんなことを奈々に聞いてどうする気なのだろう。
大体どうして慎はあんな冷たい目をするようになってしまったのだろう。
奈々は少し棘のある口調で言った。

「…今のお兄ちゃんが何を願っているかなんてわからないよ。
あんたの方がお兄ちゃんと一緒にいるんだから何か知ってるんじゃないの？
…前は優しかったのに。あんな冷たい目をする人じゃなかったのに。」

奈々はそう言って俯いた。
信じたくはなかった。けれど何度思い出してもあの時の慎の目は昔と違う。
奈々は顔を上げて目を鋭くして栄恋を睨みつけた。

「何でお兄ちゃんはあんなに冷たくなっちゃったの？
一緒に行動してるなら何か知ってるなずでしょ？」

奈々がそう言うと、栄恋は少し悲しそうに目をそらした。
奈々は栄恋が目をそらしてからも必死に栄恋の目を見て訴えかける。
すると、ついに栄恋はペンをとってメモ帳にこう書いた。

『シンの能力には代償がある。』

「代償？」

奈々が聞き返した。
栄恋は悲しそうに頷いた。
栄恋はメモ帳に事の詳細を書き始めた。

『シンの能力は『メドゥーサ』。
相手を石にする力。けど代償がある。
代償は、優しさ。
シンが冷たくなったのはそのせい。』

栄恋はそこまで書くとメモ帳を持ったまま悲しそうに俯いた。
奈々は言葉が出なかった。
能力の中には代償が必要なものもあるということはチケットに書いてあった説明を読んだので知ってはいたが、まさか慎がそうだったなんて。
生き残るために能力を使い、そのたびに優しさを失うというのは一体どんな気分だろう。
優しさを失っていく慎はもう奈々のことなどどうでもよくて、生き残るために奈々を殺すつもりなのだろうか。
奈々はがっくりとうなだれた。
何か原因となる過去でもあって、そのせいで変わってしまったとでもいうならまだよかった。
説得する手がないわけではなかったから。
けれど、優しさそのものが失われてしまったら、どうしようもないじゃないか。

「なんで…
どうしてこんなこと…」

奈々は絶望したようなか細い声でそうつぶやいた。
『シンが能力を使う度に冷たくなるのは、私も悲しい。』
栄恋は俯きながらそう書いた。
奈々はそれを見ると、ゆっくりと顔を上げて栄恋の顔を見た。
栄恋の澄んだブルーの瞳には一点の曇りもない。
慎の能力の話は奈々にとって相当ショックなことだった。
だが、もう一つ気になることがある。
奈々は栄恋に尋ねた。
「どうしてあなたはお兄ちゃんと一緒に行動しているの？
どうして冷たくされるとわかっているのにお兄ちゃんの願いを叶えてあげたいの？」
栄恋は表情一つ変えなかった。
それくらいに強く、曇りのない思いを感じた。
綺麗で一途で鋭い目だった。
そして、栄恋は迷うことなくこう書いた。
『シンは私の恩人だから。
シンがいなかったら私はもう死んでいる。二度と歌えなかったと思う。
この世界に来たおかげで私はまた歌えた。それはシンのおかげ。
だからシンに恩返しがしたい。何でもいいから役に立ちたい。
おいしいものが食べたいとか些細なことでもいい。
お金でも、家でも、地位でも、欲しいものがあれば何でもあげたい。
もしこの世界で生き残ることがシンの願いなら、私は『主人公』

をとっつかまえてシンに突き出す。
私はシンのためなら何だってやるよ。
殺しでも、自殺でも。
もし私のことが目障りで、私が居なくなることがシンの願いだとするなら、私は笑ってこの喉を切り裂くから。』

奈々は言葉が出なかった。
あまりにも強い栄恋の思いに奈々は圧倒されて動けなかった。
異常とも思えるくらいの執着心だった。
栄恋が慎のために本気で命をかけていることは栄恋の目を見ればすぐわかる。
あんなに真っ直ぐで無垢で鋭い目をした人は他にいない。
奈々はしばらくぽかんと口を開けたまま何も言えなかったが、やがて再び奈々は尋ねた。

「どうして…」

そこまでできるのと聞こうとした時だった。
奈々の後頭部に冷たく固いものが当てられた。
奈々の背筋が震え上がる。
先ほども同じものを当てられたのでそれが銃口だということはすぐわかった。
これからどうしようということすら考えられなかった。
銃口を当ててきた相手が誰か、すぐわかってしまったから。

「よくまたのこのこと出てこれたものだな。」

冷たい声が奈々の心に突き刺さる。
それは間違いなく慎の声だった。
恐怖よりもショックで奈々は動けなかった。

あの慎が、優しかった兄が、今は奈々に銃口を向けている。
すると、慎が栄恋に言った。

「おしゃべりはほどほどにしておけ、栄恋。
余計なことをバラされると厄介だ。」

そう言われた栄恋は少し悲しそうにうつむいた。
そんな栄恋の様子を見た奈々は少しだけ慎に怒りを覚えた。
自分を慕ってくれる人に対してこんな仕打ちをするなんて。
慎がそんな風に変わってしまったことが奈々は悲しくて仕方がない。

「変わっちゃったの…？
もう前のお兄ちゃんじゃないの…？」

「黙れ。右手を出せ。」

奈々が再び何か言おうとすると慎は銃口をさらに強く奈々の頭に押し付けた。
奈々は仕方なく右手を上げた。
そこには間違いなく黒い剣の入れ墨が描かれていた。

「やっぱりな。」

慎は感情のこもってない声でそうつぶやいた。
奈々はぞわりとした恐怖をさらに強く感じた。
足がすくんで動けない。肩が小さく震えるのを感じた。
後ろにいる人がもう奈々には別人のように感じられた。
怖い。怖くて怖くてどうしようもない。
すると、栄恋がメモ帳にこう書いて慎に尋ねた。

『その子、どうするの？』

慎はすぐには答えなかった。
気まずくて緊迫した沈黙が流れる。
そして、慎は引き金に指をかけて言った。

「当たり前だ。殺すに決まってるだろ。」

そう言うと同時に栄恋がメモ帳をしまい、二本のナイフを取り出した。
奈々の心臓が早鐘のように鳴り始めた。

殺される。

そう思った。

第1部・15

奈々の心臓の鼓動はどんどん早くなっていった。
絶望感だけが心を覆っていく。
目の前にはナイフを構えた栄恋がいて、後ろでは慎が銃を構えているとなると逃げることなんてできるわけがない。
冷や汗だけが頬をつたっていく。気味が悪いくらい静かだった。
そして、慎が引き金を引こうとした。

その時、急に栄恋の目が大きく見開いたかと思うと、慎に手で合図を送った。
そして慎がしゃがみこむのと同時に発砲音が三回響き渡った。
慎の真上を三発の銃弾が通り過ぎたかと思うと、同時に誰かが慎に向かって走ってきた。
それを見た栄恋がすかさず駆け出し、その人物に向かっていく。
そして、カチンと冷たい金属音が鳴り響いた。
自由になった奈々はすぐに後ろを向いた。
そこで見たものは、栄恋の二本のナイフを日本刀で受け止めている鏡の姿だった。

「…鏡！」

だが鏡は奈々の声に答える余裕はないようだった。
二人とも一歩も引く様子はない。
日本刀とナイフがぶつかり合い、せめぎ合い、どちらが押し負けるか全く想像がつかなかった。
栄恋は相手は男だというのにこれっぽっちも力負けしている様子はない。
一方鏡も譲る様子はなく、勝負はほぼ互角だった。

その時、慎が立ち上がり、銃で鏡の頭を狙うのが見えた。

「危ないっ！」

奈々はとっさに慎の腕を掴み、銃を奪おうとした。
だがさすがに力で慎には勝てず、慎は奈々の手を振り払うと奈々を突き飛ばし、再び奈々に銃を向けようとする。

それを見た鏡が一歩後ろに引き、栄恋との勝負を放棄して慎に向かって走り出した。
それを栄恋が黙って見過ごすはずもなく、栄恋は鏡の後ろからナイフで切りつけようとした。
その時、再び発砲音が二発鳴った。
銃弾は固い音と共に栄恋の足下のコンクリートをえぐった。
栄恋は動きを止めて足下の銃弾を見ると、顔を上げて銃を撃った人物の顔を見据えた。

「やめな、栄恋。」

霧也は静かな声でそう言った。
右目のスコープアイで栄恋にしっかりと狙いをつけて銃を構えている。
栄恋は静かに霧也を睨んだ。
その目は、慎の邪魔をするなら相手が霧也でも切ると無言で語っていた。

一方、慎に突き飛ばされた奈々はその衝撃で勢いよくコンクリートに叩きつけられた。
擦りむいた腕や膝から血が滲む。
チクチクとした痛みが体中に染み渡った。

奈々はすぐに体勢を立て直して慎の方を見る。
慎は銃を構えてこちらを見ていた。
冷たくて鋭く、感情を感じさせない目だった。
奈々の体がビクリと震える。
怖い。怖くて怖くて仕方がなかった。
けれど、同時に思ったことがある。
死にたくない、と。
そう思った奈々の手にはいつの間にか赤いチェーンソーが握られていた。
奈々は震えながらチェーンソーを構えた。
慎が引き金に手をかける。
だが、すぐに飛び出すことは奈々にはなかった。
怖さと同時に、慎と戦いたくないという思いが奈々を引き止める。
けれど、ここでむざむざ死にたくはなかった。
その時、慎が突然後ろを向いて銃を構えた。
そこには、銀色に輝く日本刀を慎に突きつけている鏡がいた。
鏡は今まで見たこともないくらい怖い顔で慎を睨みつけていた。
慎が冷たい声で言った。

「何だ、そんなに死にたいか？」

「…あんた、見損なったよ。
前はそんな奴じゃなかったのに。」

鏡が怒りの混じった声でそう言うと、慎はため息をついた。

「仕方がないだろ。状況が状況だからな。」

「…どういうことだ？
お前が『魔王』だからか？」

鏡が聞き返すと慎は急に黙って鏡の方を見た。
奈々の肩が急に固くなった。
奈々がまだ鏡に言っていないあることを思い出した。

「お前、まさか知らないのか？」

「…何をだ。」

「だったら想像以上の馬鹿だな。」

すると、慎は銃を下ろし、奈々の方にやってきた。
奈々の心臓の鼓動がまた早くなる。
そして、慎は鏡に言った。

「こいつが『主人公』だからだよ。
そして俺は『魔王』だ。俺が生き残るにはこいつを殺すしかない。
信じられないなら、こいつの右手の入れ墨を確認すればいい。」

そう言って慎は奈々を睨みつけた。
きっとここで入れ墨を鏡に見せなければすぐさま手に持った銃で奈々を撃つだろう。
奈々はおそるおそる右手の袖を捲り、手の甲にある剣の入れ墨を鏡に見せた。
それは間違いなく奈々が『主人公』であり、この世界にいる全ての人々にとっての『標的』である証拠だった。
それを見た鏡の目が一瞬大きく見開き、ぽかんとした表情になった。
それを見た奈々の心がチクリと痛んだ。

「ごめん…黙ってて。」

奈々はそれしか言うことができなかった。
そしてさらに奈々の背筋は震えた。
このことを知った鏡はどうするだろうか。
鏡はここに来てからずっと奈々の味方でいてくれた。
けれど、奈々が殺すべき『主人公』だとしたらどうだろうか。
奈々は不安な表情で鏡を見つめた。
鏡はゆっくりと奈々から慎の方へと視線を向けた。

「だから、殺すのか？」

「ああ。」

慎がそう言うと鏡は下を向いた。
しばらく沈黙が流れた。
奈々は不安になった。
鏡はどうするだろうか。
やがて、鏡は舌打ちして言った。

「チッ…どいつもこいつも狂ってやがる。
『主人公』だから殺す？自分の妹を？
お前らそんなに人殺しになりたいか？」

「仕方のないことだ。
そうでもしなければ他の参加者に殺されるかケモノに喰われる。」

鏡はそれを黙って聞いていたが、やがて大きく舌打ちして慎を睨みつけた。
そして苛立っている様子でこちら側まで歩いてくる。
そして慎と奈々の間に入ると、慎に刀を突きつけた。

「最低だな。
どいつもこいつも、何が仕方がないだ。
諦めたようなこと言うくらいなら誰も殺さずここを抜ける方法を考えやがれ。」

「奇麗事だな。
そんな戯れ言に付き合っていられない。」

そう言うと、慎は銃を鏡に突きつけた。
そして冷たい目で鏡を睨みながら言った。

「退け。」

「誰が退くかよバーカ。
奈々には指一本触れさせねえ。」

そう言って鏡は刀を慎に向かって構えた。
そして不安そうな表情をしている奈々に言った。

「そんな顔すんなよ。
『主人公』だからどうした。
お前が殺される理由なんてどこにもねえよ。俺が保証する。」

嬉しかった。
とてもとても嬉しかった。
それしか奈々には言い表せない。
目の前で刀を構える鏡の姿がなぜかとてもたくましく見えた。

第1部・16

慎と鏡。二人はそれぞれ武器を構えて対峙する。
鏡の後ろにいる奈々も悲しく思いながらも武器を構えた。
やはりこうして戦うしかないのだろうか。
悲しい静寂が辺りを包んだ。

先に動いたのは鏡だった。
鏡は突然走り出し、慎の後ろに回り込もうとする。
同時に何発もの発砲音と銃弾が鏡を追う。
鏡は立ち止まらず走りつづけてなんとかそれをかわしきったが、慎との間合いは狭まらない。
その時、今度は奈々が走り出し、チェーンソーを大きく振り回した。
慎はそれをすべて素早くかわした。

「お兄ちゃんと戦いたくはないよ。
けど、私に味方してくれてる鏡を傷つけるのは見過ごせない。」

奈々はそう慎に言った。
そして、もう一度チェーンソーを振り回した。
だが慎はそれをすぐによけると、奈々の後ろに回り込んだ。
そして奈々の後頭部に銃を突きつけようとした時だった。
慎は急にその場にぺたりとしゃがみこんだ。
その途端、先ほどとは違う発砲音が二回響き渡った。
銃弾は慎の頭の上を通過していった。
奈々は銃弾が飛んできた方向を見た。

「僕もいるってこと忘れちゃ困るな。」

そこには先から煙の出ている銃を構えている霧也がいた。
その時、今度はまた鏡が慎に向かっていった。
慎との距離を縮め、慎に切りかかろうとする。
だがその時、カチンと硬い音が響き渡り、鏡の攻撃が阻まれてしまった。
鏡の表情も険しくなる。間に入った人物が誰だかはわかりきっている。
そこにいたのは2本のナイフで鏡の刀を受け止めている栄恋だった。
二人は互いに力いっぱいせめぎ合い、両者共一歩も譲らない。
だがその時、立ち上がった慎が銃を鏡に向けようとした。
それに気がついた鏡が一歩下がり素早くしゃがむ。
それと同時に発砲音が鳴り響き、鏡の頭の上を通り過ぎる。
だがその時、栄恋が一歩下がって何かを取り出した。
だが後ろからなので栄恋が何を持っているのかよく見えない。
そして、素早くそれについているピンを抜いた。その時、ちらりと栄恋が持っているものが見えた。

「まずいっ…」

奈々はいきなり走り出すと、無茶苦茶に鏡の腕をつかんだ。
それと同時に、栄恋が手に持っているものを投げた。
それは、パイナップル型の手榴弾だった。
鏡の手を離さずに奈々は全速力で走りつづけた。
あの爆発に巻き込まれたらひとたまりもない。奈々と鏡は急いでお化け屋敷の影に隠れ込んだ。
その時、手榴弾が爆発した。
ひどく大きな音と灰色の煙が辺りを包み込む。
二人はなんとかそれをよけきった。幸い怪我は二人ともない。
だが安心してはいられなかった。
すぐに誰かが走ってくる音が聞こえてきた。奈々はチェーンソーを

持って立ち上がる。
その時、煙が晴れると同時に栄恋がナイフで奈々を斬りつけようとした。
奈々はなんとかそれをチェーンソーで受け止める。
油断していた。栄恋は手榴弾の爆発の衝撃でできた土煙の中を通ってきたのだ。
栄恋の力は思っていたよりもずっと強く、奈々はだんだん壁側へと押されはじめた。
正直、鏡と互角というのも納得だ。だがここで追い詰められてはいけない。
奈々は足に力を入れ、チェーンソーで栄恋を強く押した。
その時、再び発砲音が響き渡った。
銃弾は一ミリの狂いもなく栄恋のナイフに当たり、弾き飛ばした。
ナイフはくるくると天高く舞い上がり、やがて冷たい音を立てて地面に落ちた。栄恋は銃を撃った人物の方を見た。
そこには、スコープアイでしっかりと栄恋に狙いをつけている霧也がいる。

「もうやめな。おとなしく言うことを聞いてくれたら撃たないから。」

栄恋は言うことを聞く様子はなく、ポケットから再びナイフを取り出そうとした。
だが誰かが栄恋の腕をつかみ、それを止めた。
栄恋は最初すぐにそれを振り払おうとしたがすぐにやめた。
首のすぐ後ろに日本刀を突きつけられていたからだった。

「武器を捨てて、すぐにどっか行け。
人殺しなんてしたくねえし、見逃してやるから。」

栄恋は前を見た。前にはチェーンソーを構えている奈々がいる。
栄恋の表情が険しくなった。
その時、急に霧也がハッとしたような表情をしたかと思うと、銃をしまって奈々たちの方に走ってきて二人に叫んだ。

「伏せろ！」

理由はわからなかったが、奈々と鏡はすぐにその場に伏せ、霧也もしゃがんだ。
すると、突然パキパキと妙な音が聞こえた。
奈々は不思議に思ってしゃがんだまま後ろを向く。すると、さっきまで木製だった後ろのお化け屋敷の建物が石に変わっていたのだった。
奈々は驚き、慎の方を見た。
奈々は慎の目の色がいつもと違い、赤くなっていることに気がついた。
少しすると、慎の目の色はいつもと同じ色に戻った。そういえば、霧也も能力を使う時に目が赤くなる。
奈々はこれが慎の能力、『メドゥーサ』だと思った。
その時、慎が奈々たちの方を見た。するとまた霧也が叫んだ。

「二人とも、逃げろ！」

奈々と鏡は霧也の声を聞き、すぐに立ち上がって走り出した。
それと同時に慎の目が奈々たちを追ってくる。
慎の視線が通った跡は次々に石になっていった。
鏡が怒鳴った。

「何だよこれ！」

「多分これが『メドゥーサ』なんだと思うよ。」
奈々が走りながらそう言った。
霧也が困った様子でつぶやく。
「視線が合っただけでアウトだね。…まいったなあ。」
奈々も悲しそうにうなずいた。
奈々たちはしばらくの間、逃げ続けているしかなかった。
このままではいけない。そう思った時、急に攻撃が止み、慎の目の色ももとに戻った。
「へえ、どうもあまり長時間は使えないらしいね。」
その様子を見た霧也が言った。
奈々たちは攻撃が止んだのを見て立ち止まった。
攻撃は止まったものの、もう大分息が上がっている。足も痛い。
これを何度も続けられたらきっともたない。
奈々たちが逃げ回っている間に、栄恋は慎の近くまで戻っていたようだった。
慎が栄恋に何か言っているのが見える。
すぐにまた来るなと奈々は思った。
鏡が舌打ちしながら言った。
「くそっ、どうする？
　あの石化の能力だけでもうざいのに、あの女が動き出すとよけるどころじゃなくなるぞ？」
奈々は焦りながら辺りをキョロキョロ見回した。
そして、お化け屋敷の建物の瓦礫を見つけると指差して言った。

「あそこ！あそこに一旦隠れようよ。」

奈々はそう行って素早くその瓦礫の後ろへと向かった。鏡と霧也も続いていく。

それと同時に再び慎の目が赤くなった。

同時に後ろの方のものがどんどん石に変わっていく。

そんな中、三人はなんとか瓦礫の後ろに隠れた。

それと同時に慎の赤い目がその瓦礫を捉えた。

ドクンと心臓の音が一瞬大きくなった。

パキパキという音をたてて何かが石になっていくのがわかった。だがそれは奈々たちではなかった。

石になったのは後ろの瓦礫だけだった。

どうやら石化できるのは目に見えているものだけのようだ。

鏡が言った。

「よしっ、ここに隠れてりゃ石化のほうは安心ってことか！」

「油断は禁物だよ。

もし栄恋に手榴弾を投げられたりしたらここに隠れてはいられないからね。」

霧也は冷静にそう言うと、銃に弾を入れて、瓦礫の後ろから注意深く様子を伺った。

ここなら、栄恋が近づいてきても霧也の銃で牽制できる。

「もし栄恋が近づいてきたら、川崎さんがナイフを受け止めて、鏡が動きを抑えてくれる？

多分栄恋はスタングレネードも持っていると思うからそれを取って、それを使ってとりあえず逃げよう。

川崎さんのお兄さんの方は僕が牽制する。」

奈々は複雑そうな表情でうなずいた。
慎が栄恋に何か言っているのが見える。きっとすぐに二人はこちらに攻撃してくるだろう。
奈々は警戒しながら瓦礫の後ろに身を潜めた。
嵐の前触れのような緊張した沈黙が苦しい。
そして、突然発砲音がいくつも響き渡った。
発砲音がやむとすぐに霧也も銃を撃ち始めた。
発砲音が激しくて後ろの様子を伺うことができないが、一瞬の油断も許されない状況だということはわかる。

「栄恋を止めようとすると川崎さんのお兄さんが撃ってくる。
栄恋が近づいてきてるから気をつけて。」

奈々と鏡がうなずいた。
奈々は少しだけ瓦礫から顔を出した。
霧也が銃を撃っている方向にも瓦礫があり、そこから時折銃弾が飛んでくる。慎はあそこにいるようだ。
一方栄恋は全く別のところの瓦礫に隠れていて、慎が撃ち始めると別の瓦礫に移っていく。
近づかれるのは時間の問題だなと奈々は思った。

「竹内君、しばらく時間稼いでもらえる？
私たちも移動して五月原栄恋からスタングレネード捕ってくる。」

「いいけど、大丈夫？」

「ここでぶつかることになると竹内君がお兄ちゃんに牽制しにくくなるでしょ？」

「よし、わかった。」

霧也は改めて大量の銃弾を銃に装填した。
奈々は鏡に目で合図した。
鏡もしっかりと頷く。
強い恐怖に胸を押しつぶされそうになりながらも、奈々はチェーンソーを握りしめた。

「よし、行くよ！」

霧也がそう言うと同時に、慎のいる瓦礫に向かって何十発もの銃弾が撃ち込まれ始める。
おかげで慎は銃を撃ってこなくなった。
そして、奈々と鏡は栄恋のいる瓦礫へと走り出した。

第1部・17

隙を見て霧也が慎が隠れている瓦礫の方に銃を打ち始めると同時に、奈々と鏡は栄恋の隠れている瓦礫の方へ走り出した。
霧也の銃撃が止むたびに瓦礫に隠れながら少しずつ栄恋に近づいていく。
なんとかして栄恋に近づいて手に持っているナイフを弾き飛ばしてしまえば多分スタングレネードを奪うのも簡単だろう。
けれど頭ではそう考えられても実際やろうとすると恐怖がこみ上げてくるのも事実だった。
そんな気持ちをどうにかして抑えながら二人は少しずつ進んでいった。
霧也も今はどうにか慎を抑えられているようだ。
奈々は瓦礫の影から栄恋のいる方を見た。

「…んー、もう少し背の高い瓦礫ないのかなあ…」

奈々は渋い顔で呟いた。
栄恋の周りにはしゃがめばやっと全身が隠れるくらいの高さの瓦礫しかない。
このまま栄恋に近づくと、弾切れなどで霧也の銃撃が一瞬止まった時に慎に撃たれるかもしれない。
慎のいるところからは相当離れているのでピンポイントで急所を撃たれることはなさそうだが、銃弾がうっかり足に当たったりしたら走るのも辛くなるだろう。
どうにかできないかと奈々は辺りを見回した。
だがその時、栄恋が奈々たちの方に走り出してきた。
奈々のチェーンソーを持つ手に力が入る。
だがここで栄恋と戦うと慎からの銃撃を受ける可能性があるので少

し危ない。
奈々はキョロキョロ辺りを見回し、少し離れたところにあるアイスクリーム屋の屋台らしきワゴン車に目を付けた。

「鏡、ちょっと走るよ。」

「え、どこにだよ？」

「もう、能なしだなあ。あのワゴン車だよ！」

そう言って奈々は鏡を引っ張りながらワゴン車の方まで走った。
すかさず栄恋が追ってくる。
奈々たちは急いでワゴン車のところにたどりつくと、ワゴン車の後ろに回り込んだ。
霧也のいる場所からは大分離れてしまうがここなら慎の銃撃の影響はなさそうだ。
だが安心はできなかった。
誰かが走ってくる音がすると同時に栄恋が奈々たちの目の前に現れた。
やはり栄恋は慎のためには一歩も退く気はないようで、両手にはナイフがキラキラ光っている。
奈々は栄恋に言った。

「…見逃してくれるよう、お兄ちゃんに言ってくれない？」

栄恋は首をふった。
そして走り出して奈々をナイフで斬りつけようとした。
奈々はすぐにそれをチェーンソーで受け止める。
だが先ほども思ったことだが栄恋は相当力が強い。
奈々はすぐに後ろへはねとばされてしまった。

栄恋はそれを見逃さず、ナイフを奈々の方に突き出したが、鏡がすかさず間に入って刀でそれを止めた。
栄恋はそれでも全く退く様子はなく精一杯の力でナイフを押した。
鏡も負けじと刀を押す。

「…ったく、なんだよこの怪力アイドル…！」

二人はお互い全く譲る様子はなかった。
両者は互角で一歩も動く様子はない。
奈々の方もこのチャンスを逃す気は全くなかった。
そしてすぐに体勢を立て直して栄恋の方へと走り出した。
栄恋はそれに気づくとすぐに後ろに退いて奈々と距離をとった。
そして栄恋はポケットから何かを取り出した。それは丸い手榴弾だった。
奈々はピタリと足を止めた。
手榴弾の爆発なんかに巻き込まれたらひとたまりもない。

「やべっ、奈々、逃げるぞ！」

「え、でも…」

奈々は何かおかしいと思った。
ここで手榴弾なんて投げたら下手すれば奈々たちは死ぬかもしれない。
そうすればこのゲームの勝者は栄恋となり、それ以外の人は死ぬだろう。
けれど、栄恋は完全に慎のために行動している。いくら慎の願っていることがわからないとはいえ、栄恋が慎が死ぬように行動するわけがない。
そうなるとこの手榴弾は…

「偽物だっ！」

奈々はすぐさま栄恋の方に駆け出した。
栄恋は奈々が手榴弾に怯えず突っ込んできたことに驚いたのか、対応が普段より遅れた。
その隙に奈々は栄恋の横に回り、素早く栄恋の手榴弾を弾き飛ばした。
手榴弾は硬い音を立ててコンクリートとぶつかりどこかに転がっていった。
栄恋はすぐに今度はナイフを取り出す。手榴弾を拾おうとしない辺り、やはりあれは偽物なのだろう。
だがすぐに鏡がナイフを弾き飛ばし、栄恋に刀を突きつけた。
奈々もすぐに栄恋の後ろにつく。
栄恋は悔しそうな表情でその場に立ち尽くすだけだった。
もう栄恋は抵抗する様子はなかった。
鏡が栄恋に言った。

「スタングレネード持ってるよな？
それ一つよこせ。」

栄恋は首をふった。
栄恋の目は相変わらず鋭かった。
だがその時、突然ワゴン車の反対側のどこかから大きな爆発音が聞こえた。
あまりに急すぎる出来事に奈々は思わず震え上がる。
それから何か重たいものがコンクリートの地面に落ちる音がした。
奇妙なその音を聞いた奈々は嫌な予感がした。あの方向は霧也がいる方向だ。
爆風が消えたのを見るとすぐに奈々はワゴン車の反対側へと走った。

そこには銃が落ちていた。おそるおそる奈々は拾い上げる。
嫌な予感は的中した。紛れもなくそれは霧也の銃だった。
奈々は顔を上げて先ほどまで奈々たちがいた方角を見た。
そこには地面に座り込んでいる霧也と、霧也に銃を突きつけている慎がいた。

「ごめん…」

霧也は小さな声で奈々にそう言った。
慎は冷たい表情のままで、霧也に銃を突きつけたままだ。
先ほどの爆発音はおそらく慎のせいだ。
きっと隙を見て手榴弾を投げ、霧也がその場から逃げようとした隙に一気に近づき、銃を弾き飛ばしたのだろう。
手榴弾は栄恋が渡したのかもしれない。
再び辺りに緊張が走った。
奈々は少し震えながらも再びチェーンソーを強く握った。
慎は霧也に銃を突きつけたまま奈々に言った。

「動くな。動いたらこいつの命はないからな。」

慎は奈々を睨みながらそう言った。
再び悲しさがこみ上げてくる。けれどそんな悲しさに浸る暇さえ今はない。
すると今度は後ろから鏡の声が聞こえた。

「じゃあそっちこそ動くなよ。こっちにも人質はいるからな。」

鏡は栄恋の腕を掴みながら刀の刃の部分を栄恋に向けていた。
栄恋は悔しそうな顔をしているが今はおとなしかった。
だが栄恋が人質にとられているのを見ても慎は表情一つ変えずに言

った。

「栄恋がどうなろうと俺には関係ない。
こっちには銃がある。それに石化の能力もな。
撃たれたくなかったらおとなしくするんだな。」

「こっちにも竹内君の銃があるよ？」

「生憎だな。そいつは弾切れだ。」

奈々は言葉に詰まった。
どうすればこの状況を切り抜けられるだろう。
ただがむしゃらに逃げ回るだけではいかない。
とりあえずこの場から逃げる手段を考えなければならない。
その時、鏡が何かを取り出した。

「じゃあこれならどうだ？
こいつの持っていた手榴弾だ。」

それは先ほど栄恋から弾き飛ばしたダミーの手榴弾だった。
きっと鏡が拾っておいたのだろう。
だが慎はそれがダミーだなんてことは知らない。
ダミーだということに気づかれなければこの場を切り抜けられるかもしれない。
鏡が慎に言った。

「いくら銃を持っててても爆風に巻き込まれたらどうにもならねえよ？」

「けれど手榴弾は銃弾と違って逃げようがあるな。」

「でもそう簡単に逃げられるのかな？」
慎の言葉を聞いた奈々が言った。
そして精一杯の余裕を気取って言った。
「ここにはワゴン車ってものがあるんだよ？
爆発でガソリンに引火したりしたらどうなるだろうね？」
奈々は強気のふりをしてそう言った。
どうかこれで退いてほしい。これ以上戦うのはごめんだ。
慎は鋭い目でこちらを見ながら何も言わない。
奈々は慎に言った。
「ここはお互い退こう？
こっちは栄恋さんを返す。だからそっちも竹内君を返して。
それでお互いこの場から去ろう？
立ち去る間に危害は加えないこと。
…これでどう？」
慎は何も言わなかった。ただ冷たい目だけが奈々を捉えている。
これで応じてくれなかったらどうしよう。奈々は不安で仕方がなかった。
緊張した空気が流れる。返事はまだない。
奈々自身の心臓の音だけがドクンドクン自分の中に響いていた。
やがて、慎は銃を下ろして言った。
「わかった、いいだろう。」
その途端、素振りは見せなかったが奈々はかなりほっとした。

慎が銃を下ろしたのを見て霧也は立ち上がって奈々たちの方へ歩いてきた。
鏡も栄恋を離した。栄恋は鏡を一度睨みつけてから慎の方へと走っていった。
霧也に特に大きな怪我はなさそうだった。
二人が戻ったことを確認してから奈々は慎に言った。

「じゃあ、ここから立ち去る間にお互い危害は加えないこと。いいね？」

「ああ、わかっている。」

慎がそう言ってから、両者共ゆっくり歩き出した。
張り詰めた空気はまだ消えはしない。
どちらもチラチラ後ろを見たりして後ろを警戒しながらゆっくりゆっくり歩いていく。
そして慎たちの姿が見えなくなったことを確認して、奈々たちはようやく「戦場」からまた荒れ果てた遊園地の中に戻っていった。

第1部・18

奈々達は慎達の姿が見えなくなると全速力で走っていった。
恐怖と焦る気持ちが増していく中、ただ隠れられる場所を探していく。
そしてようやくゴーカート乗り場の裏に回り込んでぺたりと座り込んだ。
座り込んだ時にはもう大分息も上がっていた。
疲れ果てた奈々たちは息を切らしながら言った。

「も…もういないよね？逃げ切ったよね？」

「い…いないと思うよ。」

霧也がそう言うと奈々と鏡はほっとしてため息をついた。

「よかったあ…死ぬかと思った。」

「お…俺はもう二度と人質なんてとらねえ…
あのアイドル、力強すぎなんだよ…」

「ほんと、魔神並みの怪力だよね…アイドルじゃなくてプロレスラーになった方がいいと思う…」

奈々と鏡はそう言ってまたため息をついた。
奈々は自分の腕を見た。
栄恋に弾きとばされた時に地面に叩きつけられた衝撃でできたかすり傷がいくつかできている。
次に鏡の方を見た。手首のあたりには引っかき傷が、足首には蹴ら

れた跡がある。
栄恋を人質にとっているときに抵抗されたのかもしれない。
霧也も手足に色々と怪我をしているが、今のところ動けないくらいの怪我をしている人はいないようだった。
だが霧也は怪我をした奈々と鏡を見て気まずそうに言った。

「ごめん、僕のせいで。」

「大丈夫だよ。仕方ねえだろ、相手は銃だけじゃなくて手榴弾も持ってたんだろ？」

「竹内君は鏡より頭脳派のモヤシっぽそうだから多少予想はしてしたしね。」

奈々が笑顔でそう言うと霧也はしょぼんと下を向いた。
鏡もなぜか苦笑していた。
霧也は悲しそうに下を向きながら言った。

「…鏡さあ、これって天然なんだよね？計算じゃないんだよね？」

「…多分天然…天然…のはず…。」

二人の会話を聞いた奈々は首を傾げた。
それから奈々は空を見上げた。
もう相当な時間歩き回ったはずなのに天井にある月は全く動いていない。
ここに来てからどれくらい経ったのだろう。そう思った時、急に奈々は眠くなってしまった。
少しうとうとしている奈々を見た鏡が言った。

「…そういやもう大分歩いたよな。」
すると霧也が携帯電話を開いて時間を見た。
「そうだね、確かに。大分疲れたな。」
奈々も同じだ。もう奈々は疲れ果ててしばらく動けそうになかった。
鏡だってそうだろう。向こうの世界で朝に家を出てから一度もまともに寝ていないのだから。
眠そうな奈々を見て霧也が言った。
「川崎さんと鏡さ、少し寝たら？
全然寝てないんだろ？
僕が見張り番してるよ。」
霧也がそう言うと鏡と奈々はすぐに言った。
「え、でもお前だってずっと歩き回ってたんだから眠いだろ。」
「ほら、竹内君モヤシだし…。」
奈々も心配そうにそう言った。
霧也は苦笑いしながら「大丈夫。」と言ったが顔色はあまりよくはない。
それを見て奈々は少し考えてから言った。
「じゃあ1時間ごとに見張り番交代すれば？」
「お、それいいな。そうしよう。」

鏡がすぐに賛同した。霧也も賛成なようで笑って頷いた。
そして鏡が竹刀を自分の近くに寄せて奈々たちに笑って言った。

「んじゃ最初は俺がやるからお前ら寝てろ。」

「じゃあその次は僕がやるよ。」

霧也が優しく言った。
だが奈々はあまり納得していない表情で鏡を見た。
それを見た鏡が聞く。

「どうした？何か不満か？」

「んー…別に不満じゃないんだけど、鏡は途中で寝そうだなぁ…と。
使えないから。」

「…確かに。」

霧也も納得した様子で首を縦に何度も振って頷いた。
それを聞いた鏡が少し怒って言った。

「わ、悪かったな！仕方ねえだろ！」

すると霧也が少し考えてから言った。

「じゃあ携帯のアラームかけておけば？
　それなら鏡が寝ぼけてても交代の時間わかるよ。」

鏡は不満そうだったが奈々は賛成して頷いた。
携帯のアラームをセットする霧也を見て奈々が言った。

「それにしても、ここって携帯使えるんだね。
てっきり使えないものだと思ってた。」
「元の世界には繋がらないけどね。
時計やアラームは普通に使えるよ。
あとこの世界の中の人となら通話もメールもできるんだよね。」
「へえ…。」
奈々は霧也が言ったことに素直に感心した。
そしてアラームをセットし終えた携帯を鏡に渡した。
「じゃあ鏡、居眠りしたらチェーンソーで斬るからね。おやすみー。」
「んじゃ、よろしくー。」
そう言って奈々と霧也は寝始めた。
なぜ霧也がこの世界の中の人となら携帯で通話できると知っていたのか、少し気になったのだが眠くて聞きそびれてしまった。

◇　◇　◇

それは奈々が本当にまだ幼いころだった。
まだ４人家族だった頃。まだ奈々が小学生だった頃のこと。
その頃にはもう「明るい家族」なんてものは無くなっていた。
帰ってきてドアを開くと見えるのは冷たい沈黙と蛇口から落ちる水

の音だけ。
両親二人揃っているのに部屋は物音ひとつしない。
会話がないからこそ空気は重くて。
ドアを閉める音がよく響くのが悲しかった。
大抵部屋に入ると机はひっくり返されていて、割れた食器が部屋のいたるところに散らばっている。
そして死んだような表情でうなだれている母親と気まずそうな表情の父親が床に座り込んでいた。

そして、この惨事のわけを聞こうとする時、いつも母親が父親に甲高い声で怒鳴るのだ。
怒鳴る内容はいつも同じ。多額の借金をどうするつもりだ、部屋もこんなに荒らされて、いつまでこんな生活を続ければいいの、と。
今にも泣き出しそうな声で怒鳴るのだった。
借金なんて幼い奈々にはわからなかったが、父親のせいで母親が悲しんでいることは子供にもわかった。
そして母が怒鳴る度に父親はもっと稼いでなんとかするだの、いずれ返せるだの言っているがなんとかできた覚えはない。
だが父親の方も責任を感じていないわけではないようで怒鳴られる時の父の顔はいつも悲しそうに歪んでいた。
奈々は何度も母を慰めた。
だがどんなに奈々が慰めても母が泣き止むことはなく、自分の無力さを思い知らされたことをよく覚えている。

そんな時に優しく奈々を元気づけてくれたのが慎だった。
多分その時の家の状況のせいもあるのだろうが、慎だけはいつも優しかった。
だがその優しさだけでは状況はどうにもできなかった。

父親は突然居なくなった。

ある日起きたら普段当たり前にいるはずの父親はもう居ない。
置いていったのは奈々たち3人の家族と多額の借金だけ。
その頃について覚えているのは母が床に突っ伏して泣き叫ぶ声だけだった。
奈々も慎もどうすることもできず、泣き叫ぶ母を見ているだけだった。

「なんとかする」って言ったのに。

裏切り者。

そう強く父を恨んでいた。
父親が居なくなってからの生活は今までより更に過酷だった。
母親だけでは大したお金を稼げるわけでもなく、それでも借金は取り立てられる。
払えなければ暴力を振るわれて部屋の中はめちゃくちゃだ。
母親はいつも泣いていた。
そのたびに「一緒に頑張ろう」と言うことしか奈々にはできなかった。
母親はいつも頷いてくれたがいつか耐えきれなくなる時が来るような気はしていた。

それはある日の夕方だった。
母は家にいて夕食を作っていた。
晩御飯の献立は奈々の好物の天ぷらだった。
天ぷらが楽しみで奈々は母親の周りをそわそわしながら歩き回った。
そして母親の顔を覗き込んだ時、母親は抑揚のない低い声で言った。

もう嫌だ、と。

それと同時に響いたのはひっくり返る鍋の音。
母親は油の入った鍋を壁に叩きつけた。
途端に黄金色の油が部屋中に舞い散る。
もう何が何だかわからなかった。
そしてコンロの火が油にどんどん燃え移っていく。
パチパチという音は鳴り止まない。
そして部屋は一瞬で真っ赤な炎に包まれた。
なんで、どうしてこんなことをするの。
そう尋ねても母は答えない。
ただ虚ろな表情で立ち尽くしているだけだった。
奈々は母の手を引っ張って逃げようとしたが母は動かない。
部屋はどんどん熱くなる。もうどこが出口かさえわからない。
やがて炎は奈々の正面に現れ、母に手が届かなくなってしまった。
引き返せる道なんてもうどこにもない。
もう駄目だ、と思った時だった。

シューという勢いのいい音が響き渡った。
その音に驚いて振り返ろうとした時、突然誰かに手を引かれた。
奈々はその人に手を引かれながら走っていった。
消火器のシューという音が響いていくと同時に正面の炎も消えていく。
手を引いている人が誰かはまだ暗くてよく見えない。
だがその時、正面から夕日が射し込んできた。
そして、奈々の手を引いた人の顔が光に照らされた。

それが慎だった。
大丈夫か、と声をかける慎がとても頼もしくて緊張の糸が切れた奈々はその場に座り込んでしまった。
そして後ろを向いた時、古いアパートはもうなかった。
あるのは天高く燃え盛る真っ赤な炎だけ。

夕焼けよりも強い光を放つ炎から出てくる人はもういない。
母は逃げ切れなかった。
焼け落ちていくアパートを見て奈々は思った。

どうして、なんで。

「一緒に頑張ろう」って言ったのに。

嘘つき。

裏切り者。

奈々は母を恨んだ。
母だけではなく、母のために何も頑張れなかった自分も。
涙をポロポロこぼしながらただひたすら恨んだ。
裏切り者。その一言だけを繰り返していた。
その時慎が言った。

泣くな、もう大丈夫だから、と。

奈々は何度も頷きながらポロポロ泣いた。
悲しかった。辛かった。
けれど慎がそう言うならなんとなく大丈夫かもしれないと思っていた。
大丈夫だと信じていた。

それなのに……

奈々は目を覚ました。
天井には赤い空と不気味な月が浮かんでいる。
吹き抜ける風は少し冷たい。
周りには寂れた遊園地。
間違いなく、ここは燃えるアパートの前などではなくレデストワールドだ。

「…夢、か…」

そう小さく呟いた。

第1部・19

夢から醒めた奈々はしばらくぼんやりと赤い空を眺めていた。
久しぶりに昔の夢を見た。
慎がまだ優しかったころの夢。
慎がいれば大丈夫、信じられる。そう思っていたのに。
奈々はゆっくりと体を起こした。
向こう側には大の字になって寝ている鏡がいる。
そしてその隣には壁に寄りかかりながら何かをいじっている霧也がいた。
奈々は霧也が何をしているのか気になって霧也が手に持っているものを見ようとした。
その時、霧也が奈々に気づいた。

「あれ、起きてたんだ。」

「うん。交代まであとどれくらい？」

「8分くらいだね。」

「微妙…」

奈々はぼそりとそう言った。
たった8分ではまともに寝られない。
それに霧也はまだ少し疲れているようだった。
奈々は霧也に笑って言った。

「ちょっと早いけど私順番変わるよ。」

「え、なんか悪いよ。」
「大丈夫。だから竹内君もう寝ていいよ。」
霧也は少し迷っていたようだがしばらくしてから言った。
「…じゃあごめん、ありがとう。
川崎さんも無理しないでね。」
霧也はそう言って少し離れた場所の壁に寄りかかった。
その時、奈々は霧也がさりげなく携帯電話をポケットに入れるのを見た。
先ほど霧也がいじっていたのは携帯電話かもしれない。
けれどどうしてそんなものをいじっていたのだろう。
聞こうとしたがその時にはもう霧也は寝てしまっていた。

奈々はため息をついて壁に寄りかかった。
そして紅の空を見上げた。
血のような毒々しい紅。この世界に来て慎は変わってしまったのかもしれない。
地獄を見たのかもしれない。
ケモノや人を殺さなければ生き残れないことを思い知らされたのかもしれない。
慎が銃を奈々に突きつけた時に慎は確かに言った。
「殺すに決まっているだろ。」と。
奈々は下を向いた。慎なら大丈夫と。そう信じていたのに。
嘘つき。嘘つき。そう何度も心の中で繰り返した。
その時、急に何かあざ笑うような声が聞こえた。
「よお、主人公。

おにーちゃんにいじめられて泣きべそかいてんのか？」

奈々はすぐにチェーンソーを出して声のした方を向いた。
ゴーカート乗り場の屋根の上に少年が一人立っている。
髪の色は青と紫と白が混じり合ったような奇妙な色、目は青と紫のオッドアイ。
手には二丁の銃を持った少年が奈々を見下ろしていた。
奈々はチェーンソーを強く握りしめて少年を睨んだ。
少年は鼻で笑って言った。

「頭悪ぃな。殺したりなんかしねえよ。」

「…じゃあ何の用？貴方は誰？」

奈々は警戒したまま言った。
この少年、相当性格が悪い。
性格の悪さで判断するのもどうかとは思うけれどやはり殺す気はないなんて言葉は信用できない。
早く失せろ。そう思いながら奈々は少年を睨んだ。
少年は笑いながら言った。

「どうせ死ぬ奴に名前なんて教えてどうするんだ。
俺は暇つぶしに来ただけだよ。」

「他人様のことどうせ死ぬ奴ってあざ笑っておいて暇つぶしかあ。
虫酸の走る暇つぶしもあったもんだね。」

奈々はそう言った後、ちらりと鏡たちの方を見た。
起こした方がいいだろうか。けれどまだ少年の方は攻撃してきてはいない。

変に味方を増やせばあちらが警戒して発砲してくるかもしれない。
奈々は言った。

「暇つぶしって他人をあざ笑うこと？
だったら帰ってくれないかな。」

「いいや、違うな。
ちょっと聞いてみたいことがあっただけだ。」

少年はそう言ってまた笑った。
両手の銃を動かす様子はない。

「…何？」

奈々が聞くと、少年が言った。

「お前はこれからどうする気だ？
むざむざおにーちゃんに殺されるか？」

「…私は死なないよ。
死にたくはない。」

「じゃあ自分の兄を殺すのか？」

「それは嫌…」

奈々は小さな声で言った。
慎を殺したくなんてない。
でも、慎は奈々を殺す気満々だった。
殺さなければこちらが殺される。

けれど殺しなんて死んでもしたくはなかった。
そんな奈々を見た少年は舌打ちして言った。

「ここに来た奴はみんなそう言うんだよ。
殺したくない。けど死にたくない。
そしてみんな結局殺す道を選ぶか、無惨に死ぬかどっちかだ。」

奈々は下を向いた。
殺したくはないけど死にたくない。
正に奈々のことだ。どっちつかずで中途半端。
どちらでもない道はないのだろうか。
誰も殺さず、生きてここを抜け出す道はないのだろうか。
奈々が俯いていると少年は立ち上がって言った。

「殺すか死ぬかは好きにしな。
どうせお前らに期待はしてねえから。」

少年はまたあざ笑うようにそう言うと、その場を立ち去ろうとした。
それを見た奈々は引き止めた。

「待って。」

「何だ。とっとと行ってほしいんじゃないのか？」

少年はそう言って奈々を睨んだ。
奈々は聞いた。

「あなた、名前は？
こんだけ言いたい放題言っておいて名乗りもせずに帰ったりしないよね？」

少年は奈々の方を見ずに言った。
「…黒園斬(コクゾノザン)。」
先ほどまで嫌味ばかり言っていた斬の背中がその時だけ少し悲しげに見えた。
その背中に背負っているものか何かは奈々にはわからない。
斬はまた嫌味たらしく笑って言った。
「満足か、主人公。
じゃあな、せいぜい頑張れよ。無駄だろうけど。」
そう言って斬はどこかへ行ってしまった。
奈々はしばらくぼんやりと斬が去った方向を眺めていた。
殺すか死ぬか。二つに一つ。他はない。
どちらかを選ぶことなんてできなかった。
その時、後ろで何かがもぞもぞ動く音がした。
奈々は急いで振り返った。
そこにいたのはあくびをしながら寝ぼけている鏡だった。
「んー…あー…奈々?」
「ごめん、うるさかった?鏡でも起きるくらい。」
寝ぼけているせいかすぐに反応はなかった。
鏡は目をこすって両手を伸ばした。
しばらくしてようやく起きたようで、鏡は奈々に言った。
「わりぃ、寝ぼけてた。」

鏡はまだあくびをしながら呑気に頭を掻いていた。
つくづく鏡は呑気すぎると思う。奈々はため息をついた。
奈々はまた下を向いた。ぐずぐずはしていられない。
奈々を殺すと言ったからにはしばらくすれば慎たちはまた奈々たちのところに現れるだろう。
けれど、どうしても奈々は慎を殺したくなんてない。殺しなんてしたくない。
悩んでいる奈々を見た鏡が言った。

「何だよ、元気ねえな。」

「…この状況で元気だったら凄いよ…」

奈々は少し呆れた。
つくづく鏡は馬鹿だと思う。
こんな世界に来てしまってもへらへらしてて、『主人公』である奈々に味方して。
奈々に味方しなければ鏡が慎に攻撃されることもなかったのに。
本当に馬鹿だ。呆れるくらいの大馬鹿だ。
馬鹿みたいなお人好しだ。

「…別にさ、わざわざ私なんかの味方しなくていいんだよ？
私を置いて逃げたってよかったんだよ？
そうすれば、危ない目に合うこともなかったんだから…」

奈々は俯きながら呟いた。
悲しそうな顔を見せないようにして。
鏡は『主人公』でも何でもない。鏡がわざわざ危ない目に合う必要なんてない。

そう思っていると鏡が言った。

「馬鹿だな、それじゃ約束守れねえだろ！」

「約束…？」

「何だよ。奈々が言ったんだろ。
絶対に三人でここを抜け出すって。」

そう言って鏡は笑った。
奈々は顔を上げた。
その約束を覚えてくれていたとは思わなかった。
酷い状況の中で忘れてしまっただろうと思っていた。
鏡は馬鹿だ。大馬鹿者だ。
こんな状況でもへらへらしているし、『主人公』に味方しているし、
その上こんな途方もない約束を本気で守ろうとしている。
涙が出そうなくらいうれしかった。
元気づけられた奈々は鏡に笑って言った。

「そうだよね、ありがとう…
あ、寝てていいよ。私はまだ順番変わったばかりだから。」

「おう、無理すんなよ。」

そう言うと鏡は壁に寄りかかってすぐに寝てしまった。
それでも、どうせすぐに先ほどのようにまた地面に大の字になって
寝ているのだろう。
奈々は少しだけ笑って、また空を見上げた。
だがその時奈々は気づいていなかった。
慎との決戦が近いことも。

そして、物語の終焉が近いことも。

第1部・20

それは、レデストワールドに来る前のことだった。
白い病室の中、四角い窓から外を眺めるだけの日々。
毎日が辛かった。
窓から見えるのは楽しそうに話す人々の姿。
暇つぶしにテレビをつけると音楽番組がやっていて、色んなアーティストが歌っているのだった。
そのころは音楽番組を見ると栄恋はいつも思った。
少し前まで、自分もあそこで歌っていたのに、と。
テレビに映る歌手を真似て口を開いても、どんなに願ってももう声は出ない。
喉の奥は痛くて、歌うことなんてできそうになかった。
テレビを見るとライトを浴びながら歌う歌手たちがうらやましくて悲しくて。だからそのうちテレビは見なくなった。
時々霧也や友達がお見舞いに来ることがあったが、気分が晴れることはなかった。
栄恋にとって、人生において一番大切だったものは、歌だったから。
誰が来たって失った声を返してくれるわけではない。
誰がどんな声をかけてくれたとしても慰めになんてならない。そう思っていた。

白い病室の中。いつも思っていた。
明るいライトの下で、観客の前で、いつまでも歌っていたかった。
歌さえあればもう他に何もいらない。
返して。もう一度歌いたい。
もう二度と歌うことができないのに、どうして私はここにいるの？
…と。

ある日、病院を抜け出した。
なんでだかは今でもよくわからない。
どこに行こうとか、何をしようとか、そんなことは何も考えていなかった。
ただあてもなくふらふら歩いた。
どこだかわからない橋にさしかかった時だった。
栄恋と同い年くらいの女子高生二人とすれ違った時だった。

――…ねえ、今の人どっかで見たことない？誰だったっけ？

―あーわかった、五月原栄恋だ。
ほら、少し前にテレビに出てた。

―ああそうだ、病気で声出なくなったとかいう人でしょ。

―かわいそーだよねー。

女子高生たちはそう話しながら去っていった。
栄恋は立ち止まった。辛かった、悲しかった。
栄恋にとって声を失ったことがどんなに辛くても世間一般の人からすればただ「かわいそー」でしかない。
栄恋がどんなに嘆き悲しんでも、今日も世の中は何事もなかったかのように動くだけ。
歌に対する栄恋の思い入れの強さも声を失った悲しみの激しさも誰にも伝わらない。
誰にもわかってもらえない。もう一度歌いたい、誰か解って、と声をあげて泣くことすらできない。

栄恋は橋の上から川をのぞき込んだ。
底が見えない暗く濁った水に沈みきった表情が映る。

歌は栄恋にとってこの世の全てだった。歌えないのに生きている意味なんてない。
歌えたころは幸せだった。
明るいポップス、切ないバラード、激しいロック。
色んな歌を歌う度に違った楽しさが味わえて、悩みや不安なんて簡単に消え去っていった。
けれど、あの頃にはもう戻れない。

じゃあどうしてまだここにいるの？

栄恋は橋から身を乗り出した。
川の水面は深い闇のようだった。
そして栄恋が川に飛び込もうとした時だった。
何かが栄恋の服を掴んだ。
それ以上川に身を乗り出そうとしても、その手が邪魔でそれ以上前には行けない。
そして、栄恋はあっという間に橋の方に引き戻された。
栄恋はすぐに自分の服を引っ張った人物の顔を見た。
背が高い茶髪の男。…それが慎だった。
栄恋は慎を見るなりまず慎の頬をひっぱたいた。
こんなことしなければよかったと今では後悔している。
けれどその時は、自分を引き止めた慎のことが憎らしくて仕方がなかった。
引っ張った後はただひたすら睨みつけた。そして、メモ帳にこう書いて慎に突きつけた。

『なんで止めたの？』

栄恋は強く慎を睨んだ。どうせ自分の苦しみなんてわからないくせに、もうここにいても仕方がないのに、どうして止めたのか不思議

で仕方がなかった。
すると慎は栄恋に尋ねた。
「じゃあどうしてあんたはあんなことしようとしたんだ？」
『もうここにいても仕方がないから。
こんな生活、もう嫌だから。』
栄恋がそう書くと、慎はしばらくその文章を見つめたまま何も言わなかった。
何も言わなかったが、どこか悲しそうだった。
そしてしばらくして慎は言った。
「だから死ぬ…か…
…何だそれ。死にたいんじゃなくて、生きたくないだけだろ。」
それを聞いた栄恋はキッと眉をつり上げて、メモ帳に殴り書いた。
『黙って、何もわからないくせに。
生きたくなくて何が悪い？
もうこれから先に幸せなんてない。
これから先、死ぬまでどん底のまま。
どうせ人間なんて最後は死ぬんだから今死のうが後で死のうが同じでしょ？』
それを見た慎は引きもせず、口ごもりもせず、迷わずに言った。
「これから先に本当に幸せはないのか？　そんなこと誰が決めた？
それはあんたの推測じゃないのか？
自分の勝手な推測を信じ込んでここで死ぬのと、絶望に耐えてで

も不確定な未来を見てから死ぬのは本当に同じことか？」

栄恋の手が止まった。どうしようもないくらいの正論だった。
栄恋は真っ直ぐ慎を見ることができずに下を向いた。
未来は不確定。吉か凶かはわからない。
そんなことはわかっている。
けれど今が苦しければ苦しいほど思考がネガティブになってしまう。
この先もどうせ一生このままだと思ってしまう。
未来に期待して、結局その期待が裏切られるのが怖いから。
栄恋はだらんと両手を下ろしてその場に立ち尽くすことしかできなかった。
すると慎が車道を走るタクシーに向かって手を振った。
タクシーは栄恋たちの目の前で止まった。

「あんたどこから来た？」

栄恋は驚いて目を見開いたまま、すぐに返答できなかった。
慎は栄恋に言った。

「放っておいてまた自殺されても困るから送っていくよ。」

この人は本当に優しい人なんだと思った。
見ず知らずの栄恋の自殺を止め、病院まで送ってくれようとしている。
何故だかはわからないが少しだけ嬉しかった。
その時は、その先の未来に期待できる心の余裕なんてなかったけれど。
栄恋は少し戸惑ったが病院の名前と場所を教えてタクシーに乗り込んだ。
運転手は黒髪で右目に眼帯をしている青年で、二人が乗り込むとに

こりと笑った。
…それがレデストワールドの案内人の洸。
そして、結局タクシーは病院には行かず、二人はレデストワールドに来る羽目になったのだ。

ここに来た直後は、さすがに栄恋も怖かった。
出口のない世界と残酷なゲーム。地獄だと思った。
多分それが普通の感覚なのだろう。
けれど、自分の『能力』を知った時、恐怖は喜びに変わった。
栄恋の能力は『歌姫』。能力を発動している間は喉の病気と関係なく歌が歌えるのだ。
初めてその能力を使った時の感動を言葉になんて表せない。
発動したとたん喉の痛みが軽くなり、昔に戻ったような心地がして、いくらでも好きなように声が出せる。
嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。
もう二度と歌えないと思って絶望していたから喜びは一層強かった。
そして一度でも自殺しようとしたことを心の底から後悔した。
あの時川に飛び込んでいたらもう二度と歌えずに死んでいただろう。
栄恋にとって、この未来は吉だった。
そして自分を止めてくれた慎にも言葉で表せないくらいに感謝した。
声にならない声でありがとう、ありがとうと何度も呟いた。
その瞬間から栄恋にとって慎は、最愛の恩人であり、栄恋にとっての神だった。

そして栄恋は決心した。
慎に恩返しをしようと。
ほんの少しでもいい、慎の役に立ちたい。
いてもたってもいられなかった。
止めてもらえて良かったという思いをわかってほしいと。
たとえ誰を傷つけても。何を犠牲にしても。

たとえその願いがどんなに残酷な願いだったとしても。
叶えてあげたいと思った。

◇　◇　◇

「…おい、聞いているのか、栄恋。」
栄恋は顔を上げた。
昔のことを思い出していたらついぼーっとしてしまったらしい。
慎は冷たい目で栄恋を見ている。
栄恋はごめんなさいとメモに書いて謝った。
慎は栄恋に言った。

「…足を引っ張るなと言った筈だ。
あまり足手まといになるようなら置いていくからな。」

そう言って慎はまた背を向けて行ってしまおうとする。
それを見て栄恋は慌ててメモ帳に何かを書いた。
そして走って慎を追いかけた。
歩幅の広い慎に追いつくのは大変だったが、栄恋は必死に走った。
そして、慎の上着を掴み、慎にメモ帳を見せた。
まるですがりつくように。

「お願い、私に何かできることはない？
そのためなら何でもするから。
何を犠牲にしても構わないから。」

第1部・21

栄恋は慎の前から動こうとしなかった。
今にも泣き出しそうな表情で慎を見ている。
けれど突きつけたメモ帳を持つ手が引っ込む気配は全く無かった。
慎はため息をついて言った。

「…言っただろ。お前に頼ることなんて何もない。さっさと退け。」

それでも栄恋は退かなかった。ただじっと慎の目を見ている。
慎の前に立ったまま動かない。
慎の表情が険しくなった。そして、何か黒光りするものを取り出した。

「邪魔だ。これ以上目障りな真似をするならお前も殺す。」

慎が取り出したのは奈々たちを脅し、追い詰めた時に使った銃だった。
そしてそれを栄恋の額に突きつけた。
けれど栄恋は冷静だった。そして慌てる様子もなくメモ帳にこう書いた。

『それが慎の願いだというなら、どうぞ、撃って。』

栄恋は真っ直ぐな目で慎を見ながらそのメモ帳を見せた。
慎は引き金に指をかけた。それでも栄恋は動かない。
たとえ銃弾が栄恋の頭部を貫いたとしても、栄恋は自分の意志を曲げるつもりはなかった。
慎に殺されるなら本望だとすら思った。

「さよなら、栄恋。」

慎が静かに言った。

栄恋も声にならない声で「さよなら」と言った。

そして、紅い空に冷たい銃声が響いた。

…どのくらいの時間が経ったのだろう。

ひょっとするとほんの数分しか経っていないのかもしれない。
風の音はまだ切なく聞こえていた。
そして、栄恋は目を開けた。
栄恋は額に手を当てた。
銃はもう突きつけられていない。
血も流れていないし体のどこも痛くない。
栄恋はぽかんと口を開けたまま何もついていない自分の手を見た。
目の前には煙の上がっている銃を持つ慎がいる。
栄恋は不思議に思って後ろを見た。
後ろにあった瓦礫に、まだ新しい銃弾の跡がある。
慎はわざと銃弾を外したらしかった。
栄恋は驚いて慎を見た。
慎はまだ冷たい目で栄恋を見ている。

「…どんな願いでも、聞く気はあるか？」

栄恋は何度も大きく頷いた。
慎は更に尋ねる。

「どんなに残酷な願いだったとしてもか？」

栄恋は迷わず頷いた。
その願いのせいで自分がどうなったとしても、何が起こったとしても、それが慎の願いならば受け入れられる。
栄恋は慎に助けられた。今度は栄恋が慎を助けてあげたい。
そのためなら何だってしてみせる。
栄恋は慎を見た。慎はしばらく栄恋の目を見つめた後、ため息をついて銃をしまった。

「…後悔しても知らないからな。」

それはＯＫのサインだった。
栄恋はさらにコクコク頷いた。
今にも舞い上がりそうな気分だった。
他人には理解してもらえないかもしれない。けれど栄恋はしあわせだった。
そして、慎は自分の「願い」を話し始めた。

◇　◇　◇

「…おい奈々、起きろ。」

奈々の久々の眠りは鏡の一言であっけなく消え去った。
もう少し寝かせてくれてもよかったのにと思いながら奈々は体を起こした。
まだ眠いのでぼーっと座り込んでいると、鏡が奈々に言った。

「おい、ぼやーっとしてる場合じゃねえぞ！」

「んー…なんかあったの？」

そう言って奈々は鏡の手元を見た。
大抵鏡の手元にあるのは竹刀なのに今日は銀色に光る刀だった。
奈々は身震いして一歩後ろに退いた。
鏡が言った。

「馬鹿、お前をぶっ殺そうとかじゃねえよ。
…あっちにケモノがいるんだ。中くらいのが三体。

霧也が見つけたんだよ。」

「竹内君が…？」

奈々はちらりと鏡の向こう側を見た。
霧也が銃を持ちながら辺りの様子を伺っているのが見える。
奈々は少し下を向いた。
奈々が見張りを変わる直前、どうして霧也は携帯を見ていたのだろう。
まさか別の誰かと連絡をとっていたのではないだろうか。
奈々はキュッと心が締め付けられるような気がした。
悪い予感がするのだ。
予想といえば予想にすぎないのだが、霧也が連絡をとるような相手といえば、栄恋しかいないような気がする。
奈々の心臓の鼓動が早くなっていく。
その時、鏡が奈々の手を差し伸べた。

「ほら、立てるか。
こんなとこで死にたくないだろ？」

奈々は頷いて立ち上がった。
そして、能力でチェーンソーを取り出して霧也のところまで走った。
三人共警戒しながら辺りを見回す。
奈々が霧也に尋ねた。

「そっちはどう？」

「狼っぽい奴が三体くらい。…こっちに来る。」

その時、反対側からガサガサと物音が聞こえた。

「おい、こっちにもいるっぽいぞ。」
鏡が言った。
すると、建物の影からケモノが二体現れた。
三人の表情が堅くなった。
ここで戦うのはまずい。挟み撃ちされている状態じゃ圧倒的に不利だ。

「竹内君、あっちの二体の足を撃って。
動けなくなった隙に移動しよう。ここじゃ圧倒的に不利だよ。」

「わかった。」

そう言うと霧也は銃を二発ケモノの足に撃ち込んだ。
ケモノたちはひるんでその場にうずくまった。

「よしっ、行くよ！」

そして奈々たちはその場を立ち去った。
後ろから残りの三体が追ってくる。
まずは戦える広い場所を探さなくてはならないなと思いながら奈々は走った。

◇　◇　◇

慎から「願い」を聞き終わると、栄恋は何も言わずに俯いた。
確かにそれはとても残酷な願いだった。

俯く栄恋を見た慎は冷たく言った。

「後悔しても知らないと言っておいたはずだ。」

そう言った途端、栄恋はメモ帳を慎に突きつけた。
メモ帳にはこう書かれていた。

『願いって、たったそれだけ？』

慎はその言葉を見つめたまま何も言わなかった。
栄恋の目は真剣だった。もう決意は揺るがない。
そんなちっぽけな願いでいいのなら、叶えてみせると栄恋は思った。
それで慎に恩が返せるのなら。
そしてメモ帳に再び言葉を書いて慎に見せた。
そして栄恋はにっこりと笑った。

『いいよ。
その願い、私が必ず叶えてみせる。』

それを見た慎は少し下を向いた。
けれどすぐに顔を上げると栄恋に言った。

「…わかった。
じゃあまずはしばらく休憩だ。さすがに疲れたし。
少ししたら出発するからな。」

栄恋はにこにこしながら頷くと、座り込んで空を見上げながら歌い始めた。
それは不謹慎に思えるほど明るく、喜びに溢れた歌だった。
紅く残酷な空に澄んだ声が響き渡る。

栄恋は楽園にでもいるかのように笑顔で歌っている。
まるで、最後の晩餐を楽しんでいるようだった。
青い空でも見上げているかのようなすがすがしい笑顔だった。
慎はそんな栄恋を何も言わずに見つめていた。栄恋はそのことに全く気づいていない。
慎は後ろを向くと、ぽつりと呟いた。

「…ごめん。」

栄恋の声が止まった。
目をまんまるに見開いて慎を見た。
後ろを向いているので表情が見えない。
しばらく沈黙が続いた。
しばらくして、慎がちらりと栄恋の方を見た。
大丈夫だよ、と言うように栄恋は笑った。

「……ありがとう。」

そう言って慎は再び背中を向けた。
栄恋はもともと大きな目を更に大きく見開いて慎を見つめた。
そんなこと、初めて言われたから。
嬉しくて嬉しくてしかたなかった。
そして栄恋は再び歌い出した。
先ほどよりも明るく、綺麗な声だった。
満面の笑みで栄恋は歌った。喜びに満ちた祝福の歌を。絶望の紅い空に。
慎は気まずそうにそっぽを向くと、いつもの冷たい口調で言った。

「歌うなとは言わないがうるさくしすぎるなよ。
ケモノが寄ってくると面倒だからな。」

栄恋は笑顔で頷いた。
慎はため息をついて続けて言った。
「あと、竹内霧也にもちゃんと連絡しておけよ。」
すっかり忘れていた。そう思って栄恋は携帯を取り出し、霧也にメールを打ち始めた。
メールを打ち終わり、送信し終わると、栄恋は再び歌い始めた。
そして、最後の戦いは幕を上げた。

第1部・22

奈々達は遊園地の中を走り回った。
コーヒーカップやジェットコースターなど様々なアトラクションが並んだ入り組んだ構造の場所を走っていく。
紅い空がせき立てるように奈々を見つめる。
これで上手く捲ければいいと思ったのだがなかなかそううまくはいかないようでケモノたちは容赦なく追いかけてきた。
チラリと後ろを見る。
3体のケモノが後ろから追いかけてくる。
やっぱり迎え撃たないと駄目だ。
奈々は建物の角を指差して鏡と霧也に言った。

「二人共、やっぱり応戦しなきゃ駄目かも。
そこ曲がったら迎え討つよ！」

「くそっ、しょうがねえな！」

「わかった、急ごう！」

奈々たちはその角を曲がるとピタリと止まって振り返ってそれぞれの武器を構えた。
落ち着く暇もなくケモノたちの足音が近づいてくる。
そしてケモノたちが姿を現した。
途端に銃声が響き渡る。霧也は一ミリの誤差もなく先頭のケモノの頭を撃ち抜いた。
先頭のケモノは崩れ落ちるようにその場に倒れ込んだ。
頭に空いた穴から血が流れていく。
それを見た後ろの二体の動きが怯んだ。

迷わず奈々は走り出した。チェーンソーののスイッチを入れ、赤い柄をしっかり握りしめ、ケモノたちに正面から突っ込む。
そして力いっぱいチェーンソーを振り回した。
空を裂くような痛々しい悲鳴が響き渡る。
二体のケモノは首から血を流して倒れ込んだ。
まだ油断はできない。チェーンソーの音を止めずに奈々は倒れたケモノを見つめた。
気味の悪い沈黙の中、チェーンソーの音だけが響き渡る。
張り詰めた空気はまだ消えない。
もう立ち上がってこないだろう。そう思った時だった。
急にケモノの目がギラリと見開き立ち上がり、奈々に飛びかかった。
一瞬奈々は恐怖を感じた。殺されると。
けれどそう思った時にはもう奈々の手はチェーンソーを振っていた。
鮮やかな鮮血が舞い、ケモノは張り詰めた糸が切れたように動かなくなった。
奈々は息を切らしながらケモノの亡骸を見つめた。まだこの光景は怖い。
けれどそれ以上に怖いのは自分がもうあまり迷いなくチェーンソーを振れること、そしてケモノが血を流して倒れている光景を見た時の恐怖が初めてここに来た時より薄れていることだった。
その時今度は後ろからケモノの声が聞こえた。
奈々が後ろを向こうとした途端銃声が響いた。
ケモノが悲鳴を上げて倒れる音が聞こえた。
奈々は霧也を見た。銃口から煙が上っているのが見える。霧也の目に迷いは全くなかった。
霧也は銃を下ろしてにこりと笑って言った。

「大丈夫だった？」

奈々は無表情で頷いた。笑っていられる霧也が少しだけ怖かった。

奈々はティッシュでチェーンソーについた血を拭き取って霧也と鏡のところに戻った。
霧也たちにも怪我はなさそうだった。
ただ、鏡はなぜか複雑そうに俯いていた。
奈々は少し心配になって鏡に言った。

「どうしたの？」

鏡は答えない。少し不安だった。
何もついていない綺麗な刀を握りしめたままただ俯いている。
奈々が再び鏡に声をかけようとした時、鏡は小さな声で言った。

「…何でお前らそんなに平然としていられるんだ。」

奈々はびくりと震え上がった。
だって怖かったから。死にたくなかったから。
何か言おうとしても言葉が出ない。何を言っても言い訳にしかならないと自覚しているから。
何も言えない奈々の代わりに霧也が言った。

「…鏡、仕方ないんだよ。
そうしなきゃ死ぬしかない。この世界に善も悪もないんだ。
必ず三人で脱出するって約束しただろ？」

「確かに約束した…
けど、そのためなら何をしてもいいのかよ。」

「…じゃあ今の状況、鏡ならどうしたんだよ。」

霧也の口調が少しだけ荒くなる。

鏡は少し言葉に詰まったがすぐに言った。

「死なない程度に攻撃して動きが鈍くなった辺りで逃げるとか…」

「川崎さんが一度倒したケモノがすぐにまた襲いかかってきたの見なかったのか？」

奈々は霧也の表情をチラリと見た。
いつも穏やかで冷静な霧也の表情が今は険しかった。
奈々はどちらに加勢することもできなかった。
どちらの言い分も奈々はわかってしまうから。
殺したくない。けど死にたくもない。
どちらかを選ぶことなんてしたくなかった。
険悪な雰囲気の二人をただ見ているしかない。
何て言えばいいのかわからない。
どちらかに味方した方がいいのか。それとも中立者面して二人をなだめればいいのか。
そうこうしているうちに霧也が俯いて小さく呟いた。

「そりゃ、お前の言うことは理想だよ…
けどそんなの…綺麗事でしかないんだよ…」

霧也は俯いたままどこかへ歩き出した。
どこかへ歩いていく霧也の背中はどこか寂しげだった。
奈々は霧也に声をかけられなかった。霧也はどんどん離れていく。
鏡は俯いて呟いた。

「くそっ…何なんだよ…」

「…竹内君にもきっと色々あったんだよ。

一概に責められないことだと私は思うよ。
…ほら、行こう。」

奈々は鏡にそう言って霧也に追いつこうと走り出した。
鏡はしばらく立ち止まっていたが渋々歩き出した。
霧也の後を追って二人は走った。
物音一つしない世界に足音だけがただ響く。
霧也が曲がり角を曲がった。

「おい、霧也、待てよ！」

そう言って鏡は霧也の後を追って曲がり角を曲がった。
奈々も続けて角を曲がろうとした。
その時、奈々の足は急に動かなくなった。
何かが震える音が聞こえた。それはとても小さい音だけど奈々には確かに聞こえた。
ケモノや武器などの恐ろしい音じゃない。もとの世界でもよく聞いた身近な音。
携帯のバイブの音だ。
先ほど休んでいた時に霧也が携帯らしきものをポケットに入れていたのを思い出した。
心臓が急に早鐘のように鳴りだした。バイブが鳴ったということは三人のうち誰かの携帯にメールか電話が来たということ。
不安がみるみるうちに広がり、奈々は動けなかった。

「…おい、奈々、どうした？」

鏡の声が聞こえる。

「…あ、なんでもない。」

そう言って奈々は慌てて角を曲がり、二人のところへ走った。
二人は立ち止まって奈々を待っていた。
霧也は表情一つ変えずにこちらを見ている。
霧也は奈々に言った。

「遊園地の南側にある城の方に行ってみようよ。
あっちの方はまだ行ってないから何かわかるかもしれない。」

「う、うん。」

奈々は無理に笑って頷いた。
そして三人は南方の城へ歩き出した。
けど奈々の不安は消えなかった。
今の音はたしかに携帯のバイブだった。
この中に三人以外の誰かと連絡をとっている人がいる。
もう疑いようもない事実だ。
疑いと不安は渦巻いていつまでも消えない。
もし連絡をとっている相手が慎か栄恋だったらどうしよう。
怖い。もうどこかに逃げてしまいたいくらい怖かった。
奈々は思った。

また、誰かに裏切られるかもしれない…と。

第1部・23

奈々たちが遊園地の南方についたのは再び歩き出してからもう10時間以上経ってからだった。
何度も道に迷ったのと、ケモノの邪魔が何度も入ったからだ。
遊園地の南方は今までのアトラクションが並んでいる風景とは一味違った。
そこはごちゃごちゃしたアトラクションはわずかしかない。
遠くに見えるものはピンク色の花が咲き誇る広い庭園。赤いレンガが敷き詰められた道。
そしてには中世風の古く寂れた城が立っていた。
そしてここはケモノたちの絶好の住処のようで城の周辺にはケモノがうようよしていた。

「すごいな…城の周りはケモノだらけだ。
迂闊に近寄れないな…」

霧也が呟くと鏡が続けて言う。

「たしかに…」

奈々だけは何も言わなかった。疑いを消せないままただ俯いた。
頭の中を駆け巡るのは先ほどのバイブの音ばかり。
ケモノがいるとかそんなこと全く気にならないくらいぼんやりしている。
鏡と霧也の声すらまともに聞いていなかった。

「…おい、おい奈々。」

「……あ、え？どうしたの？」
奈々はようやく鏡の声に気がついた。
「どうかしたか？大丈夫か？」
「うん、大丈夫だよ。」
奈々は笑って嘘をついた。案の定それ以上鏡は何も言わない。
…本当に鏡は馬鹿だ。大馬鹿だ。奈々は何度も心の中で繰り返したことをまた思った。
その時霧也が奈々に言った。
「ちょっと疲れたな…少し休んでもいいかな？」
「なんだよ、ひ弱だな。もうちょいいけるって。」
奈々はチラリと霧也を見た。バイブの音が鳴った後から霧也の様子が妙だった。
何か考え込んでいるような表情で俯いている。やはり先ほどメールが来たのは霧也の携帯のような気がする。
目の前に大きな城があるというのにそれを無視して休憩を提案するのは妙だ。
…何か霧也は企んでいるのかもしれないと奈々は思った。
けれど確証はまだない。そんなことはないと願いたい。
願いたいが、願っているだけでは生き延びれない。
奈々は敢えて言った。
「いいよ、休憩しよう。
私疲れて眠くなっちゃったよ。」

そして奈々たちは人目につかない比較的安全そうな場所に移動した。
鏡はあまり納得がいかないようだったが奈々と霧也はお構いなしだった。
そこは何かの瓦礫の裏。とりあえずケモノに見つかる可能性は低そうだ。
奈々は座り込んで言った。

「眠いなあ…」

「確かに…あんまり寝てねえしな。」

鏡がそう言うと、霧也が優しく笑って言った。

「じゃあ僕が見張り番してるよ。一時間ごとに交代でいいかな。」

「おう、悪いな。」

奈々は黙って頷いた。
もし霧也が奈々たちを裏切っているのなら、奈々たちが寝ている間に何か行動しだすはずだ。
もしかしたら奈々たちを射殺するということもあるかもしれない。
奈々はもう先ほどからかなり霧也を疑っていた。
あの優しそうな表情の裏で、栄恋たちと手を組んでいるかもしれないと思うと怖かった。
鏡は霧也を全く疑いもしていない様子で言った。

「んじゃ、見張りよろしくな。おやすみー」

鏡はそう言うと瓦礫に寄りかかってすぐ寝てしまった。

奈々はため息をついた。

「もう…馬鹿なんだから…
じゃあ竹内君おやすみ。」

奈々もそう言って瓦礫に寄りかかって目をつぶった。
だが寝る気なんて全くない。
耳をすまし、神経を集中させる。耳で物音を聞き分け、霧也の行動を探る。
疑いたくない。けど疑わざるおえない。
だって死にたくない。それは人間にとって当たり前の生存欲。
もう二度と裏切られるのなんて見たくないのに。奈々は悲しく思った。

◇　◇　◇

紅い空に沈む遊園地は寂しげだった。
ここは遊園地の南方の寂れた城。
栄恋と慎はここに移動してきた。
窓際で歌いながら栄恋は空を眺める。
紅い空。輝く月。まるでささやいているようだ。
終わりは近いと。
そのささやきに答えるように栄恋は歌う。
その時後ろから慎の声がした。

「竹内霧也と連絡はついたのか？」

栄恋は歌うのを止めてメモ帳にこう書いた。

『うん、今この城の近くにいるみたいよ。』

「そうか、じゃあここに来るように伝えてくれ。」

栄恋は頷いてメールを打ち始めた。
栄恋の表情はこれ以上ないくらいに幸せそうだった。
メールを打つ音だけが響く。慎は黙り込んだまま何も言わない。
メールを打ち終わり、送信した後、栄恋は慎に聞いた。

『ナナさんどう思うかな？』

「恨むだろうな。俺のことも。お前のことも。竹内霧也のことも。」

栄恋は黙り込んだ。
静かに携帯をしまい、また窓の外の空を見ながら歌い出す。
澄んだ声が響き渡る。今日はなぜか慎が五月蝿いと言わない。
栄恋はここぞとばかりに大きな声で歌う。
城の中には栄恋たち以外にケモノも人もいない。
綺麗な歌声は城を包み込むように響く。
『歌姫』は歌い続けた。いつまでも、いつまでも。
『主人公』を呼び寄せるかのように。
そして、これが『歌姫』の最後の唄となるのだった。

◇　◇　◇

霧也が見張りを始めてから２０分が経った。
今のところ変わった様子はない。

ケモノが近づいてくる様子もないし、うるさい音も聞こえない。
風の音が聞こえるだけ。異質な物音はない。
奈々は寝たふりを続けたまま耳を澄ました。
どうしてもあのバイブ音が頭から離れない。疑わずにはいられない。
その時、またバイブ音が響き渡った。
奈々は震え上がりそうなのを必死でこらえる。
霧也が何かを取り出すような音が聞こえた。
おそらく携帯だろう。
心臓が高鳴る。話し声が聞こえてこないので多分来たのはメールだろう。
誰からなのか。何と書いてあったのか。
不安で不安でいてもたってもいられない。
携帯を閉じてしまう音が聞こえた。
奈々は不安に気をとられて次の音を予測できなかった。
霧也のため息が聞こえたかと思うと、急に誰かが走り去るような音が聞こえたのだ。
奈々は思わず目を開けて起き上がった。
だがそこには誰もいない。
奈々と鏡、二人だけ。霧也の姿はない。
霧也は二人に何も言わず姿をくらましたのだ。
奈々の不安は確信になった。霧也は奈々たちを裏切った。
そうでなければメールが来るはずがない。何も言わず姿をくらますはずがない。
不安は悲しみと怒りに変わる。
まだ霧也が去ってから時間は経っていない。今なら追いつくかもしれない。
奈々はチェーンソーを取り出して立ち上がった。
霧也がどこに行ったのか突き止めてやろうと。
奈々は走り出そうとしたが、まだ眠っている鏡のことが気にかかり立ち止まった。

鏡は未だにアホ面で寝ている。
一瞬起こそうかと思った。だが奈々は起こさなかった。
万が一霧也が慎たちの所へ行ったとしたら？
鏡を連れて行くと、鏡を危険な目に合わせることになるのでは？
そんな思いが浮かんだから。
今となっては鏡は奈々にとって世界中で唯一信用できる人。だから
……

「……ごめん。」

奈々は小さな声で呟いた。
そして鏡を置いて走り出した。
かすかに聞こえる足音を追って。
裏切り者を追って。
最後の戦いへ。決戦の場へ。

第1部・24

なるべく息を止め、物音を立てないよう気をつけながら奈々は霧也を追った。
霧也の姿はもう見えなくなっていたが行った場所に心当たりがないわけではなかった。
先ほど霧也は目の前に大きな城があるというのに休憩しようなどと言い出した。
城に入られるとまずい理由でもあったのかもしれない。
奈々は先ほどの城へと向かった。
レデストワールドに来てから一人で行動するのは初めて。
不安で足が震える。けれど立ち去った霧也をそのままにしておくわけにはいかなかった。
奈々は物陰から城の様子を伺った。
城の前に広がる庭園にケモノが沢山蠢いているのが見える。
奈々は身震いした。来た時よりは慣れたがやはり恐怖は消えない。
そんな時、ケモノ達の鳴き声が急に激しくなった。
奈々は静かに様子を伺う。
その時、銃声が三発、空に響いた。
奈々はその様子を見た途端、自分の予感が正しかったことを知った。
ケモノを撃ちつつ、城に向かって走る霧也を奈々はその目で見た。
絶望感が走る。その城に誰がいるというのだろう。
霧也は必死の形相で城を目指す。
そんなに霧也が必死になる相手なんて一人しかいないのではないのか？
その時、霧也の前方に二匹のケモノが立ちはだかった。
さすがに霧也も立ち止まる。
このまま食いちぎられるのか。その時だった。
どこかから聞き覚えのある歌声が聞こえてきた。

天使のような澄んだ美しい歌声。
純白の声が響き渡る。
だが今の奈々にとってはそれは悪魔の歌でしかない。
間違いなく栄恋の声だ。
そして栄恋の声に応えるように銃声が響く。
霧也の目の前にいた二匹のケモノは首から血を流して息絶えた。
そして霧也は重たい戸を開き城内へと入っていった。
それを確認してから奈々は飛び出す。
庭園を走り、城へと向かう。
たくさん蠢いていたケモノ達は霧也がかなり倒してしまっていたので襲ってくるものは少ない。
だがそれでも奈々目掛けて走ってくるものが何体かいた。
奈々はとにかく走る。チェーンソーを振る回数なんて少ない方がいい。
だがそれを許さないかのようにケモノが立ちはだかる。
やはり、戦うしかないらしい。
奈々はチェーンソーを取り出してスイッチを入れる。
残酷な機械音。そして奈々はケモノに向かって突っ込んでいった。
そしてケモノに向かって切りかかる。
だがケモノは奈々の攻撃を巧みに避ける。
けれど奈々も負けてはいない。
ケモノが横に避けた隙に奈々はケモノを無視して城へ走り出した。
それを見たケモノが後ろから奈々に襲いかかる。
だが奈々の狙いはそこだった。逃げようとすればケモノは必ず後ろから奈々を襲うに決まっている。
くるりと振り向いて奈々は襲いかかってくるケモノの頭を切り裂いた。
飛びかかってくる勢いのおかげで血がきれいに舞う。
そしてケモノは地面に倒れ込み、息絶えた。
奈々は急いでいたのにすぐそこを離れられなかった。

ケモノの亡骸はもう動かない。
今度は人の亡骸を見る羽目になるのだろうか。それとも自分が亡骸になるのだろうか。
本音を言うとどちらも嫌だった。
だが感傷に浸っている暇はない。他のケモノ達の鳴き声が聞こえてくる。

「…急がなきゃ。」

そう呟いて奈々は城の入り口へと走った。
近くで見るとその城は見たこともないくらい大きい。周りの遊園地に似合わないくらいに。
栄恋の歌声はまだ聴こえてくる。
奈々は上を見上げ、声がしてくる階の窓を睨みつけた。
そして重い扉を開けて奈々は中へと入った。
中は薄暗く、とても広かった。
石造りの床のせいで足音がよく響く。
奈々は恐る恐る奥へと進んだ。
脇には鎧の騎士が何体も立っている。
天井のシャンデリアはとても上品なデザインなのに今は錆びて汚れていた。
やがてたどり着いた大広間。
奥にはステンドグラスがあって外からの光が射し込んでいて明るい。
大広間は目眩がするくらいに広く、いくつも廊下が伸びていた。
これでは霧也がどちらに行ったのかわからない。
大広間の真ん中で奈々は困って辺りを見回す。
行き先に迷っていた時だった。
階段を上がっていくような音が聞こえた。…右だ。
奈々は右に向かって走り出す。
たしかに足音が聞こえる。そう遠くない。

廊下には部屋への扉はたくさんあったが階段はなかなか見つからない。
でもあの足音は確かに階段を登る音だ。
途中曲がり角がいくつもあって困ったが奈々はとりあえず真っ直ぐ進む。
そしてもうすぐ突き当たりという時、見えてきたものは石造りの螺旋階段だった。
奈々は螺旋階段の前で立ち止まって耳をすます。
上の方からかすかに足音が聞こえる。
間違いなくこの階段の上からだ。
奈々も急いで階段を駆け上がる。
両端を石の壁で覆われているので螺旋の終わりは全く見えない。
薄暗い階段をただ登っていく。
どうしてこんなことになったのだろう。
本当に霧也は奈々たちを裏切ったのだろうか。
いつから裏切ったというのだろう。
まさか最初から奈々たちを裏切っていたのだろうか。
そういえば霧也は以前にも栄恋たちに会ったことがあると言っていた。
その時霧也と一緒にいた人を殺されたと。
ならどうしてその人だけ殺されて霧也は助かったのだろうか。
その時に慎達と手を組んでいたとしたらありえるのではないだろうか。
ただの考えすぎということもあるかもしれないがその恐ろしい推測は妙に奈々の中に残る。
絶望感が消えない。
また裏切られたのか？どうしてみんな人を裏切るのだろう？
悲しみと同時に沸いてきたのは強大な怒りだった。
階段を登る足が速くなる。
疲れなんてもう気にならない。

裏切り者への怒りが奈々を駆り立てる。
上へ上へ、階段を登り続ける。
登れば登るほど怒りがこみ上げてくる。
チェーンソーを持つ手が強くなる。
もういつでも応戦できる。
上から光が射し込んできた。
そしてついに階段を登りきった時だった。
奈々は急にチェーンソ刃を盾のように自分の顔の前に構えた。
その時、銃声が響き渡った。
銃弾は奈々の顔めがけて飛んできたがチェーンソーの刃がそれを受け止めて弾いた。
手首に衝撃が走るが怪我はない。
奈々はチェーンソーを下ろし、その先にいる人物を見つめる。
手に煙立つ銃を握り、こちらを見つめている。
右目のスコープアイが奈々を捉える。
それは今まで仲間だったはずの人物……竹内霧也。
そして後ろには五月原栄恋がいた。
霧也は銃を構えたまま、驚いた表情で奈々を見た。

「川崎さん…」

奈々は自分のチェーンソーを見た。
銃弾が当たった部分の刃がへこんでいる。
もしチェーンソーで受け止めていなかったら奈々は銃弾に頭をえぐられて死んでいただろう。
奈々は確信した。この人は敵だと。
奈々は霧也を睨みつけた。

「…やっと会えたね、裏切り者。」

確信は怒りに変わる。
斬り殺せそうなくらいの鋭い目つきで霧也を睨みつけた。

第1部・25

冷たい静寂が辺りを包む。
空気が肌寒い。目の前の霧也は銃口を真っ直ぐ奈々の顔に向けていた。
霧也の裏切り。それはもう紛れもない事実。
奈々は敵を見る目で霧也を見つめた。
低い声で尋ねる。

「竹内君どうして私達に何も言わずに立ち去ったの？
…そして、どうして五月原栄恋のところにいるのかなぁ。ねぇ、裏切り者さん？」

「川崎さん…これは…その…」

「私と鏡を騙してほっぽりだし、私達を襲撃した五月原栄恋の所に行き、挙げ句の果てに私を撃とうとしたくせに今更言い訳？」

霧也は口をつぐんだ。
言い返せないということか。
それを霧也の後ろで見ていた栄恋がフッと鼻で笑った。
奈々が栄恋を睨む。
栄恋はメモ帳にこう書いた。

『私が呼んだの。』

栄恋は右手にメモ帳を、左手は後ろに隠していた。
奈々は見逃さなかった。隠している左手に手榴弾が握られているのを。

栄恋の目が言っている。「あなたをおびき出すために。」と。
奈々はチェーンソーを強く握って栄恋の方へ駆け出す。
栄恋が握っている手榴弾を弾き飛ばそうとした時だった。
霧也が奈々の前に立ちはだかった。そして銃口を奈々に突きつける。
その動作はあまりに早く、奈々はチェーンソで防ぐ体勢を取れなかった。
奈々は霧也を睨んだ。怒りだけが奈々の中で燃える。

「ごめん…。」

霧也が呟く。怒鳴ってやりたい。殴ってやりたい。
約束したくせに。三人でここを抜け出すと約束したくせに。
嘘つき。裏切り者。そんな言葉だけが奈々の頭を駆け巡る。
だがもう奈々は抵抗できない。銃口は奈々の目の前にある。一瞬でも動けば殺されるだろう。
奈々は泣き出したかった。こんなことでこんな所で死ななければならないのだろうか。
霧也の後ろにいる栄恋の口元がニッと上がる。
栄恋の唇が動いた。声のない声が言う。「さよなら、ナナさん。」と。
その時、誰かが歩いて階段を降りてくる音が聞こえた。栄恋のはるか後ろにある階段からだ。
足音はどんどん近づいてくる。
そしてその姿が現れた。川崎慎の冷たい瞳が奈々を見ていた。
その途端栄恋の表情が嬉しそうに変わる。
慎は手に黒光りする銃を握りながらこちらに一歩一歩歩いてくる。
もう駄目だ。全ての希望が消えた気がした。
栄恋が慎の所に駆け出す。
そして栄恋が慎の前にたどり着いた時だった。
奈々も、おそらく霧也も予想しなかった事態だった。

強烈な発砲音。鮮血の飛び散る音。二つが同時に響き渡る。
何かが倒れ込み、床に叩きつけられる。鮮やかな朱が床を浸食する。
それは血にまみれた歌姫。先ほどまで笑っていたあの栄恋の姿だった。
栄恋の左肩から流れ出す血、開かない瞼。
床に横たわる栄恋は全く動かない。
そしてその足元には煙をあげる銃を右手に、冷たい瞳で血まみれの仲間を見下ろす慎がいた。

「栄恋っ！嘘だろ…栄恋！」

霧也が狂ったように叫ぶ。
霧也のこんな姿、初めてだった。
栄恋のもとに霧也が駆け寄ろうとした時だった。
慎の目が霧也を捉えて赤く輝いた。
その途端、パキパキと冷たい音が鳴りだした。
そして目の前でそれは起こった。
霧也の足が灰色に変わる。そして、霧也が抵抗する間もなく全身が灰色に。
動かなくなる霧也。もうそれは人ではなく、霧也の形をした石像だった。
奈々は思い知った。これが『メドゥーサ』の能力の恐ろしさだと。
ショックが抜けない。たった数十秒。この城は惨劇の場へと変わり果てた。
栄恋も霧也ももう動かない。
動けるのは奈々と、慎だけ。『主人公』と『魔王』だけ。
遠くにいる慎の目は鋭い。
霧也と栄恋には目もくれない。冷たい眼孔が奈々を貫く。

そして、慎は銃を奈々に向けた。

「馬鹿ばかりだな。自分が騙されていたことにも気づかないとは。お前も、こいつらも。
　おかげで俺はやっとお前を殺せる。」

慎の冷たい声が奈々を突き刺す。
やっとのことで声が出た。

「…竹内君はいつから…」

慎は鼻で笑って言った。

「本当に間抜けだな。
　最初からだよ。お前たちが竹内霧也と会った時からずっと、あいつはお前を裏切っていた。
　おかげでお前たちの居場所がわかったし、お前を誘き出すことができた。」

奈々は俯く。一言で言って悲しい。
チェーンソーを握りしめ、更に尋ねる。

「どうして五月原栄恋まで撃ったの？」

「あいつは竹内霧也を利用するための餌だ。
　あいつを利用する理由はもう無い。
　用が済んだものは早く片付けた方がいい。放っておくと何をしでかすかわからないしな。」

奈々は更にうつむく。今にも泣き出しそうだった。

こんな人ではなかったのに。昔はとても優しかったのに。
失望と怒りが渦巻く。泣きたいのか怒鳴りたいのかわからなかった。
慎は容赦なく銃を突きつける。

「…終わりだな。」

だが慎が銃を撃つ前に奈々は駆け出した。
同時に銃声が響き、奈々が居た場所の後ろの壁にひびが入った。
慎は奈々を追いかけた。奈々は追いつかれないように逃げる。
そして横たわる栄恋の後ろに見える階段を駆け上がり始めた。
涙をこらえてただ駆ける。
そして、『主人公』と『魔王』の決戦が始まった。

◇　◇　◇

最悪の目覚めだった。今日の目覚まし音はどきつい銃声だった。
コンクリートの上で大の字になって寝ていた鏡は飛び起きた。
幸い怪我はどこにもない。安心してため息をつく。
夢かとおもったが残念ながら夢ではないらしく、鏡が寝ていた場所のすぐ近くに銃弾がめり込んでいるのを見つけた。
鏡の背筋に緊張が走る。
立ち上がり、竹刀を刀に変えて構えた。
その時聞こえたのは嘲笑うような冷たい声だった。

「とんだ間抜けな脇役だ。
　置いてきぼりにされたくせに呑気に寝てるとはな。」

鏡は声がした方を見た。

そこに居たのは鏡と同じくらいの歳の少年だった。
髪の色が奇妙で、青と紫と白をグラデーションさせたような不思議な色。
目は青と紫のオッドアイという変な少年だった。
連射型の銃とアンティーク銃、二丁の銃を握りしめ、建物の上から鏡を見下ろしていた。
その時になってようやく奈々と霧也がいないことに気づいた鏡は少年を睨みつけた。

「…おい、奈々たちどこだ。」

少年は大笑いしながら馬鹿にしたように言う。

「マジかよ、置いてきぼりにされたことにも気づいてなかったのか？
どうしようもない馬鹿の為に教えてやるよ。
二人はあの城にいる。」

少年は庭園の向こうに見える廃墟と化した城を指差した。
鏡は眉を潜めた。二人が鏡を置いてあの城に行くような理由が思い当たらない。
それを見た少年が言う。

「ついでに教えてやる。あの城には、『魔王』と『歌姫』がいるよ。」

鏡の表情が豹変した。だとしたら奈々達が危ない。
心臓が早鐘のように鳴る。
どうして呑気に寝ていたのだろう。どうして気づけなかったのだろう。
焦る鏡を見て少年は笑う。

「『スコープアイ』がお前達を置いて立ち去ったんだ。
それを『主人公』が追ったってわけさ。」
「…奈々は無事なのか？」
「さあな。」
鏡は舌打ちして、少年に背を向けて走り出す。
そんな鏡に容赦なく少年は言った。
「行ってお前に何ができる？
人どころかケモノすら殺せないお前に。」
「どうして殺さなきゃならないんだよ。
そんなこと俺は望まない。
誰も殺さずに俺は奈々を助ける。
そして、この世界を抜け出してみせる。」
鏡は後ろを見ず、真っ直ぐそう言った。
それこそが揺るぐことのない鏡の願い。
だが少年には届かない。
少年はそれを笑い飛ばして言った。
「アハハハ…！馬鹿馬鹿しいな！
誰も殺さず…そんなことは誰だって願うことだ。
けれど皆それをしない。…何故だかわかるか？
それがただの理想でしかないからだ。」
「けれどそれこそが理想だ。そう在るべきだ。誰もの願いだ。

それを実現させようとするのがいけないことかよ？」

「いけないとは言わないな。
…けどよ、お前に実現させる手段なんてお前にあるか？」

少年は静かに尋ねた。
先ほどとは違う。あざ笑ってなどいない静かな声。
鏡は言い返せず黙り込んだ。
やっぱりな、とでも言うように少年は鏡を冷たい目で見下ろす。

「…お前の信念がどうして『奇麗事』と言われるのかわかるか？」

鏡は黙って少年を睨みつける。
少年も鏡を睨みつけた。

「現実味がないからだよ。
理想はあっても手段がない、実現する術がない。
だからただの妄想でしかない。現実には絶対にならない。」

鏡は俯いた。反論はできない。
実際鏡に手段なんて無いのだから。
鏡の願いがただの妄想でしかないこともわかっていた。
それでも、それが奈々の願いでもあるのなら、鏡はその妄想を追い続けたかった。
鏡は歩き出す。あの城へと向かって。

「どいつもこいつも…本当に愚かだな。」

少年が呟く。鏡は止まらない。

「馬鹿で構わねえ。
誰も殺さずに脱出手段なんて思いつかねえ。
けど、奈々を誰かに殺されないようにする手段なら…馬鹿な俺でも思いつくんだよ！」

鏡は城へと駆け出した。周りの物は目まぐるしく後ろへ後ろへ。
そして城はどんどん近づく。
そこまでして奈々を守りたいなら自分が盾になればいい。
自分の体が動く限り、全てが終わるまで、奈々が笑えるようになるまでずっと奈々の前に立っていればいい。
倒れても倒れても立ち上がればいい。
手段はそれだけだ。

「馬鹿だな全く…」

少年は呟いた。
静かな声。全てを把握しつくしたような声。
もう遠すぎて鏡には聞こえなかった。

「どうせ…みんな死ぬのに。
『主人公』も『魔王』もみんな。
誰も生き残れなんてしないのにな。」

第1部・26

駆ける駆ける。耳に入るのは風を切る音だけ。
身を隠しながら進むことも忘れて、堂々と走り抜ける。
鏡が目指すのはただ一つ。遠くにそびえ立つ廃墟の城。
そこが奈々のいる場所。
城の前に広がる庭園。そこは紅の世界を引き立たせる場所であり、
城への侵入者を拒む城壁でもある。
城を守るかのようにこちらを睨むケモノ達。
その目は間違いなく獲物を見る目だった。
だが鏡も退くわけにはいかない。
竹刀を刀に変え、構える。

「来いよ、化け物共…！」

鏡がそう言った途端、一体のケモノが鏡目掛けて飛びかかった。
鏡はそれをうまく避けて後ろに回り込む。そして鏡は刀でケモノの足を斬りつけた。
ケモノは力が抜けたように地面にへばりついた。
立ち上がれないようだが死んでもいない。けれど、それでよかった。
何も殺さない。それこそが鏡の信念なのだから。
残りのケモノが鏡に襲いかかる。
鏡は深呼吸をした。いくつもの牙が鏡に迫る。
だが鏡はそれを全て避けきった。
昔から剣道をやっていた。だからもう判っている。
どう避ければいいか、どう攻撃に持ち込むか。
ケモノ相手だと多少感覚は違うがそれは僅かな差でしかない。
鏡はケモノの攻撃を避けては回り込んで足を斬りつける。
大抵のケモノはこれで攻撃してこなくなった。

鏡はケモノたちを避けては斬りつけつつ城へと向かう。
そしてようやく城門へとたどり着いた。そびえ立つ城門は堅く冷たい。
鏡はゆっくりと門を押して中へ足を踏み入れた。

中は薄暗く、鎧兵士が立ち並んでいて気味が悪かった。
硬い石造りの廊下を一歩一歩進んでいった。
傷や汚れでまみれた白い壁。割れたシャンデリア。
寂れていなければきっとととても可愛らしい城だったのだろう。
まるで童話のお城かすたれてしまったかのようだった。
鏡は刀を持つ手を少しも緩めず、警戒しながら先に進む。
その時、遠くから一筋の光が見えてきた。
たどり着いたのは広間らしき場所だった。
ステンドグラスから射し込む光が美しい。
鏡はぐるっと一周して辺りを見回す。

「くそっ…どっち行けばいいかわからねぇ…」

広間からは何本もの道が四方八方に伸びていた。
間違えた道を選びたくはない。今危険かもしれない奈々を救うには一刻も早くたどり着かなければならない。
鏡はもう一度辺りを見回す。やはりどれが正しいのかわからない。
鏡は舌打ちする。急げと心が叫ぶのに動けない。それがどんなに辛いことか。
とりあえず適当に進むわけにもいかない。
道に迷っている時間はないのだから。
どうにかしてわかれば。誰か教えてくれればいいのに。
そう思った時だった。

『教えてあげましょうか？』

鏡はすぐさま後ろを向いた。けれどそこには誰もいない。
確かに誰かの声が聞こえたはずなのに。
不気味な沈黙の中、鏡は動けなかった。
その時だった。再び声が聞こえた。

『立ち止まっている場合じゃないわよ、この豚が。』

鏡はその一言に少しカチンときた。
大広間中に聞こえる声で言った。

「おい、誰だ！出てこい！」

すると高笑いと共にその声が再び言う。

『アハハハ！どうしたのぉ、怒ったのぉ？
だって本当でしょお？
動かない奴は亀以下。学ばない奴は猿以下。
なら学ばなくて動かない奴は豚未満。文句があるならどうぞぉ？』

皮肉混じりの嘲り笑うような声が響く。
間違いなく女の高笑い。だがその姿はどこにもない。
実体のない誰かの声が嫌でも耳に入ってくる。
その声の話し方は、どこか先ほどの奇妙な髪色の少年を思い出させるところがあった。
その声は言った。

『哀れな豚の為に教えるわ。…右よ。』

「本当かよ？」

疑わしげに鏡は言う。
声はクスクス笑いながら答えた。

『ええ、あたくし無能な豚じゃないもの。』

鏡は辺りを見回し、居もしない声の主を探す。
信用できるわけがなかった。
するとまた高笑いが聞こえた。

『これは驚いたわ！本当に無能ねぇ！豚を越えて石以下かしらぁ！
道がわかったのにまだ動かないなんて。
愛しのあの子が惨殺死体になってもいいのぉ？』

クスクスという笑いが消えない。
まるで鏡をせきたてるように。
勘にさわる笑い声。腹が立った。
鏡はついに舌打ちした。
刀をしっかり握りしめて怒鳴る。

「ああくそっ！行きゃいいんだろ！」

鏡は迷わず右へと駆け出した。
入り込んだのは長い長い廊下。
終わりは遠すぎて見えない。
迷わず奥まで駆け抜ける。進めば進むほど辺りは薄暗くなる。
これで行き止まりだったら承知しないぞ、と鏡は半ばやけくそで走っていた。
その時、今まで闇でしかなかった突き当たりに何かが見えた。
それは上へと続く階段だった。石造りの階段。中は真っ暗で何も見

えない。
鏡は少し迷ったが、すぐに階段を登りだした。
目指すは頂上。奈々のいる場所。
深く長い暗闇の階段に鏡は飛び込んでいった。

◇　◇　◇

ひっきりなしに響く銃声。息切れしつつも上へと駆け上がる。
螺旋階段の終わりはまだ見えない。
上から差し込む光に向かって伸びていく階段を奈々はただ登る。
慎の銃撃は止まない。時折メドゥーサの能力まで使ってくる。
そんなに奈々を殺したいのだろうか。自分が生き延びるためなら誰を殺しても構わないのだろうか。
どうしてそんな人になってしまったのだろう。
銃撃だけでなく、絶望感と悲しみも奈々を襲う。
黒く底のない感情が奈々を浸食する。
それでも奈々は必死に力を振り絞って走った。
奈々だって死にたくはないのだから。
走って走って、上を目指す。その先がどうか光であるようにと願いながら。
息切れしてきて、走る体力も無くなってきたその時、階段の終わりが見えた。

「そんな…」

奈々の目の前が真っ暗になったような気がした。
目の前にはだだっ広い部屋が一つあるだけ。障害物となりそうな置物などはあるが、逃げ道は一つもない。

運命の行き止まり。固く閉じた窓ガラスが嘲笑うかのように光る。
死ぬのか、こんなところで。たった一人孤独に。
お兄ちゃんはこんなことをして幸せなのだろうか。
霧也は奈々たちのことなどどうとも思っていなかったのだろうか。
栄恋は慎に裏切られてどう思っただろう。
そして、城の外に置いていった鏡は無事だろうか。
ケモノに見つかることもなく、今もアホ面で寝ているだろうか。
死を予感した奈々の中に様々な思いが駆け巡る。
悲しい、辛い、悔しい、許せない。…死にたくない。
だが慎の視線は揺るがない。銃を構え、こちらを見つめる。
引き金を引けば、あっという間に奈々は紅いモノになるのだろう。
一歩一歩慎が近づく音が響く。奈々は怯えて後ずさりするが、もう後ろには壁しかない。
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない。
どうすればいい？どうすれば生き延びられる？
もう話し合いも逃げることもできない。次々と塞がれる選択肢。
そして奈々が見つけた道は一つしかなかった。

「川崎慎…覚悟！」

奈々はチェーンソーの刃を向けて駆け出した。
銃声が立て続けに響く。
それを奈々はしゃがんでかわし、再び走り出し、慎を斬りつけた。
だが慎はそれを一歩下がってかわす。だが更に奈々が斬る。
それも慎はかわした。だが一瞬だけピッと微かに音がした。

「…やってくれたな。」

慎は言った。慎の頬から僅かだが血が出ていた。小さなかすり傷だった。

奈々は泣きそうな目で慎を見る。どうしてこんな選択をしなければならないのだろう。
どうしてこんな運命を辿らなければならないのだろう。
答えを出せないまま、奈々はまたチェーンソーを握り駆け出した。

第1部・27

奈々とは小学生の頃からの友人だった。奈々の母親と鏡の母親の仲が良かったせいで、必然的に話す機会も多かったのだ。
昔の奈々は今よりももっと活発な子だった気がする。どちらかというとお転婆な方で、下手すると鏡よりもよく叱られていた。
…父親が失踪するまでは。
傍から見ているとそんなにわからないことだったかもしれない。けれど話してみるとわかる。以前よりも声に感情の起伏がなくなっていた。
中学や高校から奈々と知り合った人は、単に大人しいだけだと思ったみたいだったが、鏡はそうではないことを知っていた。やはり辛かったのだろう。壊れていく家族を見ることは。

鏡はずっと何か奈々の力になりたいと思っていた。どん底の奈々を少しでもいいから引き上げる力になりたいと思っていた。
けれど駄目だった。所詮他人の鏡がよその家の問題を丸ごと解決なんてできるわけがない。
その時の奈々の様子から、日に日に状況が悪化していることはすぐにわかった。
ずっと力になりたかった。けれどできなかった。自分の無力さに腹が立つ。
ずっとずっとそう思ってきたのに、また何もできていない。

「くそ…ダメだな、俺…。」

そう呟きながら階段を駆け上がる。とにかく奈々が心配だった。あの子はきっとみんなが思っているよりずっと脆いから。
母親が自殺した直後の奈々なんてとても見れたものではなかった。

人間不信に陥っていて、鏡のことまで拒絶した。敵を見るような目で鏡を睨みつけて言っていた。
『どうせあんたも裏切るんでしょ。』と。
そう考えると、今の奈々は大分落ち着いた方だ。そして、奈々が落ち着いた一番の理由は慎だった。
鏡にできなかったことを慎は全てできていた。どう足掻いても当時の奈々を鏡は笑わせられなかったのに慎はいとも容易くやってのける。
鏡はずっと慎がうらやましかった。

「頂上…もうすぐだな…。」

鏡は必死で階段を登る。微かに光が見えた。
慎はずっと奈々を支えてきた優しいお兄さんだった。だからこそ確かめたい。どうして慎が変わってしまったのか。
メドゥーサの能力のせい？…いや、その割に慎はあまりあの能力を使ってこない気がする。どちらかというと銃で攻撃する方が多い。
この世界の残酷さに失望したから？…それでも、唯一の肉親にあんなに迷いなく銃を向けられるものだろうか。
どうしてかわからない。だから確かめたい。鏡は冷たい石の階段を駆ける。そして頂上の光見えた。
そして見えた光景は鏡の想像を絶するものだった。
そこはまた石造りの広めな部屋だった。赤茶けた何かで床が汚れているのが気になり、部屋の中央に目を向ける。
そこには血で汚れて横たわる栄恋の姿が。そしてその隣には鏡がよく知る友人とそっくりな石像があった。

「霧也！」

鏡は霧也の石像に駆け寄った。まるで生きているかのような表情の

石像だった。どう見ても霧也だ。
そして、こんなことをできる人物は一人しかいない。川崎慎しか。
鏡は自分の後ろ側を見る。そこにいるのは血まみれの歌姫。雪のような白い肌に鮮やかな赤が散っていた。
閉ざされた瞼は全く開かない。冷たい石の霧也と血まみれの栄恋。
何が起こったのかわからない。だが一つだけわかることがあった。
…この分だと、奈々の身も本当に危ないかもしれない。奈々はここを通っただろうか。慎は何をしたのだろうか。
知っているのはこの二人だけ。鏡は栄恋の方へ行った。まだ死んでいるとは限らない。
手をとり、脈を確認する。手も血もまだ温かい。事が起こってからまだ間もないらしかった。

「生きてる…！」

まだ脈があった。鏡は安心した。たとえ敵だとしても人が死ぬのを見たくはないから。
鏡は栄恋の背中を揺さぶった。

「おいお前、起きろ起きろ！」

しばらくして、栄恋の瞼が微かに動いた。鏡は揺さぶるのを止めた。
指先も少しだけ動いた。
そして瞼が開き、栄恋が目を覚ました。
栄恋は肩を庇いながらゆっくり起き上がる。だがやはり傷は深いし痛そうだった。

「大丈夫か？」

その時に栄恋は初めて鏡と目が合った。途端に鏡は栄恋に右手で殴

られた。

「痛ぇよ怪力女！」

栄恋は鏡を睨みつけて口をパクパク動かすが声は出ない。右手でメモ帳を探すが見つからないようだった。

鏡は自分の足元にメモ帳があることに気づいた。栄恋が気絶した騒ぎの時に落としたのだろうか。

鏡はメモ帳を拾って栄恋に渡した。

「一体何があったんだ？」

だが栄恋は頑なに答えようとしなかった。どうしようもなく途方にくれそうになっていた時だった。

後ろから物音が聞こえた。鏡が振り返ると霧也の石像の様子が先ほどと違った。

パキパキと音をたてていた。すると足の先から石だった部分がもとの人間に戻り始めた。

そして頭まで元に戻ると、霧也はつらそうにしゃがみこんだ。

「おい、大丈夫か！」

「鏡…？大丈夫、怪我はないから。」

鏡は霧也がどうして元に戻れたのかわからなかった。特別なことは何もしていないのだけれど。

霧也に特に異常もない。鏡は栄恋を見た。

『別に『メドゥーサ』の力で石になったら永久に石のままなんて言ってない。

一定時間で元に戻る。それだけ。』

鏡はホッとしてため息をついた。そしてすぐに霧也に聞いた。

「何があったんだ？」

「川崎さんのお兄さんが栄恋を撃ったんだ。それで俺も『メドゥーサ』の能力で…」

「そもそもどうしてこんなとこに来たんだよ？」

「……。」

霧也はすぐには答えなかった。

鏡は首を傾げた。すると疑いのない目を向ける鏡を見て霧也が言った。

「栄恋がメールで話があるからここに来てくれって言ってきたんだ。」

「それで俺たちに黙って来たのか？」

「ごめん…。『慎に脅されているから助けて。』って言われたから…」

鏡はため息をついた。こいつ、鏡のことなんて言えないと思う。

「前から思ってたけど、お前…あのアイドルにベタ惚れだよな…。それで、奈々はどこに居るんだ？」

その時だった。鏡の首筋に冷たい物が当てられた。
見なくてもわかる。栄恋が後ろでナイフの刃を鏡の首筋にあてている。
まるで『行かせない。』と言っているようだった。
殺す気だ。鏡は思った。上を見る。栄恋の蒼い目が鏡を見下ろしていた。
左肩からは未だに血が流れていたが右手には鋭いナイフが。
逃げようとした途端、栄恋が膝で鏡を抑えつけた。そして一瞬だけ栄恋が不気味に笑った。
栄恋がナイフを鏡の目を目掛けて突き落とそうした時だった。
発砲音が響き、栄恋のナイフが弾かれた。
地面に落ちる硬い音が響く。鏡は急いでその場を離れた。

「助かったよ、霧也。」

霧也の銃からは白い煙が出ていた。
霧也は複雑そうに銃を下ろして栄恋に言った。

「栄恋、どうして今更こんなことをするんだ？
君は川崎慎に裏切られたのに…」

だが栄恋は睨むのを止めなかった。
そしてメモ帳に書いたことは鏡も霧也も全く予想していなかった言葉だった。

『裏切られた？何のこと。全て予定通りだけど。』

「栄恋を撃つことが予定通りだったって言うのか…？」

『そういうこと。慎も甘いけど。撃たれて死んでくれって言ってたのに結局わざと急所を外すなんて。
慎は私に願い事してくれたの。とっても酷いお願い。でも慎のためなら私は協力する。』

「…ひょっとして、僕を呼び出したのは…川崎さんに僕が裏切り者だと勘違いさせるため？」

「どういうことだよ？」

鏡が霧也に聞く。霧也はチラリと鏡を見た後に銃を再び握り直した。

「鏡、川崎さんを追って。ここは僕がくい止めるから。」

「おい！」

「ごめん…僕がここで話をしてる途中に誰かが階段を登ってくる音が聞こえて…。
川崎慎だと思いこんで反射的に銃を撃った。…そしたら川崎さんの方だったんだ。
そのせいで川崎さんは僕が裏切り者…川崎慎側の人間だと思ってる…。
川崎さんに会ったら謝っといて。僕は裏切ってなんかいない。
…裏切ったと思われてもおかしくない行動をとったことは謝るよ。」

鏡は黙り込んで霧也を見る。
霧也が嘘をついているとは思えなかった。それに、奈々の方が勘違いをしていることは十分ありえる。
奈々は少しだけ人間不信気味なところがあるから。

「…信用していいんだな？」

「うん。」

「五月原栄恋が相手でも、食い止められるんだな。」

「……うん。」

霧也は辛そうに呟くと銃を上げた。霧也の幼なじみ、そして誰よりも好きな人である五月原栄恋に。
一人で霧也を置いていくことは勿論不安だった。けれどここで行かなければ霧也の思いが無駄になることもわかっていた。
鏡はついに言った。

「…わかった。証明してみせろ、お前が俺たちの味方だって。」

「…了解。」

鏡は部屋の反対側の螺旋階段へ駆けだした。
同時に後ろから銃声と爆発音が聞こえた。
振り返りたい思いを振り切って、鏡は階段を登りだした。

第1部・28

轟く銃声。同時に響く爆発音。石造りの床が吹き飛んだ。物陰に隠れて伏せ、その場をやり過ごす。
爆発音も石が散る音も止んだ時、最愛の少女がナイフを片手に駆けてくる姿が目に入る。
霧也はそれを避けると部屋の反対側へと逃げる。栄恋の蒼い瞳が『逃がさない。』と言っているのが見えた。
その蒼い瞳とは対照的に左肩からは未だに血が流れている。急所ではないが出血量が少ないとはとても言えなかった。

「止めろよ！そんな状態で戦えるわけない！」

だが霧也の声に応じることなく栄恋は再びナイフ片手に走ってくる。
銃を持った相手に少しも怯むことなく。
肩に傷を負っている上に相手は一人。普通なら特に手こずる相手ではない。
鏡達と会うまで、霧也は一人でこの世界を生き延びてきたのだから。
時には容赦なく相手を撃ち抜いて。
でもどうしても非情になりきれない。今までケモノも人も何回も殺してきたのに。それはやはり相手が栄恋だからかもしれない。
奈々がチェーンソーを栄恋に向けた時も、思わず栄恋を庇ってしまったし。そのせいで事態が悪化したのだろうけど。

「どうしてそこまでするんだよ…」

霧也は呟いた。栄恋の唇が動いた。声なんて出てこなくてもわかる。
何を言いたいのか。

『だって慎は私の恩人だもの。』

栄恋は手榴弾を取り出し、ピンを抜いて投げた。霧也は再び物陰に隠れて伏せる。響く爆発音。
それが止むとすぐに少しだけ顔を上げて栄恋に狙いをつけた。
だが引き金を引く瞬間、少しだけ手がブレた。おかげで銃弾は栄恋の耳元数センチの所を通り過ぎた。
普段の霧也なら有り得ないミスだった。微動だにせず冷たい目で栄恋はこちらを見る。
栄恋の唇がまた動いた。

『甘い。』

途端に栄恋は手榴弾を三つ立て続けに投げた。霧也は再び逃げる。
同時に後ろで爆音が。
再び狙いをつけようとした時更にもう一つ手榴弾が来た。後ろには壁が。逃げ場がない。
だが霧也もそれでやられるほど雑魚ではなかった。とっさに霧也は空中の手榴弾に狙いを定めて銃を撃った。
手榴弾は弾き飛ばされ、部屋の反対側で爆発した。
ホッとした瞬間、栄恋はもう霧也の目の前にいた。ナイフの刃が迫る。それを霧也は銃で受け止めると一歩下がって距離を置く。
だが栄恋はその瞬間にすかさずナイフを霧也の腹目掛けて打ち込む。
霧也は間一髪、なんとか避けきることができた。

「やるじゃん…ちょっとヒヤリとしたよ。」

霧也は少しだけ笑って栄恋を見た。迷ってはいられない。霧也は奈々と鏡の味方でいると決めたのだから。
栄恋を食い止めること。それこそが味方であることの証明。深呼吸

をして目をつぶる。
そして目を開き、駆け出した。栄恋もナイフを手にこちらに向かってくる。
鋭い刃が霧也を狙う。だが霧也はその程度でやられはしない。うまくそれを避けて後ろに回り込む。
そして振り返ろうとした栄恋のナイフを弾き飛ばし、額に銃を突きつけた。
途端に静まり返る戦場。傷を負った女一人の動きを止めることくらいそう難しいことではない。
難しいのは、引き金を引く勇気。

「どうして川崎慎の味方をするんだよ…
どう見たって栄恋を利用してるだけなのに…」

『別にそれで構わない。利用されるだけでも、慎の役に立てるのなら。』

栄恋は唇だけ動かして霧也にそう伝えた。ズキンと何かが痛んだ気がした。
俯きつつも銃を突きつけ続ける。沈黙することもう数分。
間違いなく栄恋は霧也が引き金を引くことをためらっていることに気づいているだろうなと思った。

「生き残ろうとは思わないのか？
元の世界に帰りたいとは思わないのか？」

『嫌。元の世界じゃ能力使えない。
あんな地獄に戻るくらいならここで死ぬ方がまし。』

霧也達が必死になって探す世界を『地獄』と言う栄恋の気持ちは霧

也にはわからなかった。そんな風に言ってほしくはなかった。
元の世界に居た頃は気づかなかった。どちらかというとあの世界にいても不満ばかりだった。
けれどここに来て初めて気づいた。元の世界がどんなに素晴らしかったか。
退屈で面倒くさいだなんて感じられる世界がどれほど平和で幸せな世界だったのか。

『あんな所、嫌…』

その瞬間、栄恋がぐらりとよろけた。思わず銃ではなく手が出た…
その時だった。
ズシンと激痛が走る。今まで一度も感じたことがないような、貫かれるような痛み。
痛みを感じる部分を見ると、銀色のナイフが霧也の腹に突き刺さっていた。
栄恋がナイフが抜くのと同時に思わず下にしゃがみ込む。腹の辺りに手をやった時、手が濡れたのを感じた。
腹の辺りから大量の血が流れ出していた。ぽたりぽたりと次々流れ出て小さな水たまりを作っていく。
痛みが強すぎて立つこともままならない。霧也はかがんだまま栄恋を見上げた。
赤く染まったナイフを握り、栄恋は霧也を見下ろしていた。
左肩から流れ出ている血はまだ止んでいない。顔が先ほどよりも青白い。
もう栄恋も相当苦しいのだろう。すぐに追い討ちをかけてはこなかった。
お互い血を流しながら睨み合う。やがて栄恋が口を開く。

『私が歌を亡くした時、「栄恋」はもう死んだの。

霧也が好きな「栄恋」はもういない。』

霧也は何も言い返せなかった。脳裏に元の世界のことが浮かぶ。
白い病院の中、光のない目でそとをぼんやり見る栄恋の姿を。
楽しそうに舞台に立って歌う、アイドルだった頃の面影はどこにもなかった。
霧也はよくお見舞いに行っていた。だが誰が来ても栄恋は窓の外を向いたまま。
ゼンマイの切れた人形のように、見向きすらしてくれなかった。
栄恋が言ったことに違いはない。アイドルだった時の栄恋と今の栄恋は全く違う。
昔の栄恋はもっと自由だった。今のように川崎慎の存在に縛られてなんていなかった。
声を失った時点で、もう栄恋の中の何かが歪んでいたのだろう。
それでも、そうだとわかっていても霧也は引き金を引くのをためらっていた。

『悪いけど、私は慎に手を貸すと決めたの。
霧也の味方にはつけない。私を救ったのはあなたじゃないから。』

栄恋はナイフを握り直した。そして鋭い刃の先を霧也の目に突き刺そうとした。
カチンと音が響く。霧也はなんとか銃を盾にしてそれを防ぐ。だが栄恋は引かなかった。
ナイフを押す力が強くなる。強い痛みのせいで思うように力が入らない。左肩に傷があるというのに栄恋の力は強かった。
このままでは押し負ける。霧也は精一杯力を入れているつもりだったが少しずつ押し負けてきているのがわかった。
栄恋を止め切れなかったら奈々と鏡はどう思うだろう。霧也のことは味方と思うだろうか、敵だと思うだろうか。

…きっと、「ああ、やっぱりあいつは裏切り者だったんだ。」と思うのだろう。
きっと、霧也は栄恋を引き止めずに行かせたと思うのだろう。
栄恋と敵対しなければならないのは辛い。けれど、止めなければならない。今が、無断でここに来たことの責任を取るときだ。
たとえ叶わなくても霧也は元の世界に戻りたかったから。澄んだ青空の世界が好きだったから。そのことを鏡と奈々には知っていてほしいから。
霧也は力を込めた。痛みをこらえてナイフの刃を押し返す。
そしてついに栄恋は押し返されてナイフを引っ込めた。そして少し驚いた様子で霧也を見る。
霧也はよろよろと立ち上がった。激痛が走る。だが倒れるわけにはいかない。
痛みに耐えながら銃を栄恋に向ける。

「もう迷わない…
僕も、栄恋の味方はできない。
栄恋が僕を殺すというのなら、僕も栄恋を殺すよ。」

そしてその瞬間、霧也の右目が紅くなった。『スコープアイ』の能力が発動した。
栄恋の目が鋭くなる。その目に霧也は照準を合わせた。

『…そう、ならこれで最後にしようか。』

栄恋の唇がそう動く。そして栄恋は手榴弾を二つ取り出した。
そして霧也を強く睨みつけるとこちらへ真正面から突っ込んできた。
相打ち覚悟だ。そうわかった霧也も駆け出す。接近戦に持ち込み、栄恋を狙い銃を撃つ。
だが栄恋の動きが素早くうまく照準が合わない。栄恋は後ろに回り

込み一つ目の手榴弾のピンを外す。
霧也は冷静に手榴弾を打ち抜き、部屋の反対側へ飛ばす。爆音と同時に栄恋が後ろへ回り込みナイフを突き出す。
振り返ってからでは間に合わない。霧也は足で栄恋を蹴飛ばしてそれを防ぐ。
振り返って地面に叩きつけられた栄恋に銃を向けた。栄恋は地面に座り込んだまま霧也を見つめていた。
その時、霧也は栄恋の唇が微かに動いているのがわかった。

『5…4…3…』

何のことだかはすぐに察しがついた。
だが栄恋は手にはナイフしか持っていない。
前、後ろ、右、左。部屋の隅々を探すが何もない。なら…

『2…1…』

上を向いた。ピンの抜けた手榴弾が落ちてくる。
霧也は素早く銃を向ける。そして…

『…0。』

銃声と爆発音が同時に響いた。

第1部・29

砂煙が舞い上がる。石が砕け散る音がした。そして、沈黙が訪れた。長く苦しく、音一つしない。誰もいないかのようだった。
そして、砂煙が晴れた。

「…勝負あったね。」

霧也はようやく口を開いた。地面に倒れ込んだままの栄恋に銃を向ける。
栄恋が投げた手榴弾は銃弾で弾き飛ばされ、壁を砕き飛ばしていた。
ナイフとメモ帳は栄恋の手の届かない所に落ちてしまっていた。
栄恋はすぐにナイフへ手を伸ばす。だが容赦なく霧也は引き金を引いた。
銃声が響き、栄恋の顔が苦しそうに歪む。栄恋の脚に穴が空き、そこから血が流れ出した。
すぐにもう一発…そんなことはできなかった。
本当は今すぐ銃を捨ててしまいたかった。けれどそれは許されない。
自分で決めたことだ、破るつもりはなかった。痛む心を必死でこらえ、霧也は銃を突きつけ続ける。

「…ごめん、何もできなくて。
苦しくて、辛くて…そんな時の栄恋を僕は痛いくらい…知っていたのに。」

震える声で霧也は言った。
声だけじゃない。足が震える。手が震える。指が震える。
落ち着こうとすればするほど、元の世界の栄恋のことを思い出す。
空耳が消えない。栄恋の歌声が今も聞こえる気がした。けれど退け

ない。震えながらも両手で狙いを定める。
栄恋の蒼い眼はずっと霧也の眼を見ていた。真っ直ぐで綺麗で怖かった。
引き金を引けば、その眼が紅に染まると思うと余計に。

「…さよなら、栄恋。」

あくまで平然を装ったつもりだった。けれどきっと無理だったのだろう。
ため息をついた後、栄恋の唇が動いた。

『…泣きそうな顔。やっぱ臆病ね、情けないモヤシ。』

仕方ないだろ。言い返してやりたかったが声が出ない。声に出したら、もう銃を向けられない気がした。
代わりに頬を何かが伝って落ちるのがわかった。落ちた水滴は思いの外温かかった。
迷いと悲しみをかき消すように引き金に指をかける。銃口を栄恋の額に向けた。
その時だった。栄恋の唇が動いた。

『……ごめんなさい。けど、もう戻れないの。』

栄恋がナイフを掴んだ。
同時に引き金が引かれた。

十分、二十分…もっと経ったような気がしていた。華奢な体はあっけなく地面へ叩きつけられた。
地面に横たわる栄恋の『遺体』。壊れた人形のように、もう瞼を閉じて動かない。もう二度と動かない。
額の潰れた部分からまだ温かい血が次々流れ出て白い顔を覆っていく。
あれほど迷ったのに終わる時は一瞬。
けれどあの銃声の余韻はいつまで経っても消えなかった。
霧也はその場を動けなかった。銃を下ろすことさえしなかった。
下ろしてしまったら、栄恋の死を認めてしまうようで怖かった。
時間が止まったかのような静寂の中、ついに霧也は銃を下ろした。
そして血で穢れた栄恋を見下ろす。
またひとつ、涙がこぼれた。そしてまたひとつ、次々と。
抑えられるわけがない。涙で目の前が見えなかった。
震えて、かすれて、よく聞こえない声で呟いた。

「どうして…どうして…こんな結末になったんだろう。
……馬鹿…馬鹿だよ…お前も、……僕も…」

途端に、ぐらりとバランスを崩して倒れ込んだ。
力が入らない。もう手も足も動かない。霧也は二本目のナイフが自分の腹に刺さっているのを見た。
とめどなく血が流れ出る。撃つのが一歩遅かったのだろう。
やっぱり甘かったな、ぼんやりと霧也は思った。

紅が増える度に、手足、そして自分の意識の感覚が薄れていくのがわかる。天井を見つめたままぼんやりと時間だけが流れる。
ああ、そうか、死ぬのか。他人事のように心の中で呟いた。
不思議と悲しくなかった。ただ、少しだけ怖い。
薄れていく意識の中、思い出したのは鏡と奈々のことだった。
最後に呟いた。

「……ごめん…約束……守れなくて。」

三人でこの世界を抜け出そう。必ず。
もう一度、こだましてなくなっていく。
そして、目の前の光景と感覚は静かに消えていった。

◇　◇　◇

階段を登る音だけが響く。息を切らしながらただ登る。
石造りの階段の終わりは見えない。それでも登るしかなかった。何かにせき立てられるように鏡は進んでいく。
鏡は納得がいかなかった。どうして慎と栄恋は奈々に霧也が裏切り者だと思わせようとしたのだろう。
奈々をおびき出したかったのだろうか。鏡は舌打ちした。
どこまでも非情だ。奈々を容赦なく殺そうとし、霧也に濡れ衣を着せ、栄恋に撃たれて死ねと要求した。
眉間にしわがよる。ふつふつと怒りが湧き上がってきた。だが、同時に強い悲しみも湧き上がってきた。

「くそっ……畜生！」

鏡はそう怒鳴ると急に立ち止まってしまった。俯いてうなだれる。
情けなくて吐き気がしそうだ。
どうしてこんなことになったのだろう。この世界に初めて来た時の
洸の台詞を思い出した。
「残念ですが、逃げることはできませんよ。」……あの時殴りかかっ
った自分はなんて幼稚だったのだろう。
どうしてこんな世界に来てしまったのだろう。
どうしてこんなことになったのだろう。
どうして慎は変わってしまったのだろう。

どうして……

「畜生ッ…！…どいつもこいつも…狂ってやがる…！
なんで…なんでこんなゲームに…なんで乗っちまうんだよ…！」
怒鳴った。喉が枯れそうなくらいの精いっぱいの怒鳴り声だった。
少し響いてまた静寂が。泣いても喚いても状況は変わらない。
そんなこと知っている。それでも辛い。それでも怒鳴りたい。それ
でも諦めきれなかった。
自分が生き残るためにこのゲームに乗り、奈々を殺そうとする慎の
気持ちは鏡にはわからなかった。
何もできない鏡がこんなにも奈々を守りたいと思っているというの
に、奈々の力になれる慎がどうしてそれをしないのだろう。
そんなにも生き残りたいのか。川崎慎はそんなに浅ましい人物だっ
たのか。生き残ることが慎の願いだったのだろうか。
そんな時、鏡は栄恋の言葉を思い出した。

『慎は私にお願いしたの。…とっても残酷なお願い。』

…慎が栄恋にしたお願い。それは何だろう。

撃たれて死ねと言ったことだろうか。だが栄恋を撃ったところで何の意味があるだろう。
鏡が奈々を守りたいように栄恋は慎を守りたいはずだ。
なら、味方となってくれる栄恋を撃つことは慎にとって損のはずだ。
慎は栄恋に何を頼んだのだろう。慎の目的は本当に生き延びることなのか。鏡は首を振った。
鏡に慎のことなんて慎の考えることなんてわかるはずがない。
なら、栄恋のことはどうだろう。考えろ。考えろ。絶対にわかるはずだ。

「まさか…！」

鏡は思わず駆け出した。今までよりもずっと速く階段を登っていく。
先ほどよりもずっと焦っていた。疲れも悲しみも忘れてただ駆け上がる。
もしかしたら、奈々はずっと騙されていたのではないだろうか。栄恋が霧也にメールを送るよりもずっとずっと前から。
奈々だけではない、鏡も、霧也も、そして栄恋も。
騙していたことを慎は栄恋に明かしたのでは？
そして鏡の予想が当たっているとすると、明るい結末は待っていそうにない。
急げ。鏡はさらに速く駆け上がる。

「畜生…そんなこと…させてたまるかよ！」

最後の舞台を、物語の結末を、鏡は目指して駆け上がっていった。
物語の真の結末をまだ知らないままで。

第1部・30

風が吹いていた。冷たくて寒い。
紅い空の中にそびえ立つ廃墟の城が目に入る。
窓は割れ放題、壁は苔と蔓で覆われていた。きっと、元は素敵で可愛らしい城だったのだろう。今は見る影もないけれど。
突然内部から爆発音が聞こえた。ゲームの終わりは近い。どうせ結末は決まっている。見る価値もない。
黒園斬は城に背を向け歩き出した。その時だった。殺気を感じ、斬は振り返って『ヘンゼル』で撃った。
カチンと冷たい音と共に弾が弾かれる。斬の表情が険しくなる。
並の殺気ではなかった。ゲーム参加者たちの怯え混じりの殺気なんかではない。
誰のものかはもうわかりきっていた。こんな意志を、ここまではっきり斬を殺す意志を持っている人なんて、斬の知る限りではたった二人。
その内表舞台に出てくるのは片方だけ。斬は目の前に立つ黒髪の青年を見た。
手には巨大な黒い鎌。まるでこの世界の番人のようだった。

「何の用だ…洸。」

洸はにこりと微笑む。不愉快な笑みだ。鎌を持つ手は全く緩む気配がない。

「こんにちは。もう行ってしまうのですか？」

斬の表情が険しくなる。

「…だったらどうした。」

「いえ、なら別れの挨拶をと思いまして。」

いつか帰ってくる獲物として見送られる…これ以上あってほしくない挨拶はない。

斬は洸を睨みつけ、洸は薄い笑みを浮かべた。そして、洸は言った。

「それでは、親愛なる『読者』様、今回の物語はいかがでしたか？」

「何が物語だ。…こんないかれたゲーム。

兄妹が殺し合う…お前ら好みの残酷で血なまぐさい話だよなぁ？

…ただの狂った殺し合い。イカれてる。」

斬は洸を睨みつけた。

洸は全く表情を変えずに微笑んでいた。まるで感情のない、ある人のためにただ尽くす人形か何かの用だった。

洸は鎌を構えた。そして言った。

「…やはりこうするしかないようですね。

理解する気がないのであれば、あなたはただの邪魔者。物語を乱す害虫。

生かしておく理由はありません。」

さすが速かった。その時洸がいたのは既に斬の背後。そして巨大な鎌を斬に振るう。

斬は素早く避けると二丁目の銃、『グレーテル』を取り出す。

だが洸はすかさずもう一度振るう。撃たせる気がなかった。

なんとかそれを避けた斬は鎌の刃のすぐ横に入り込むとそのまま洸の背後に回る。

あまりに大きな鎌なので隙はあった。
懐に入り込むとまず『ヘンゼル』を一発……だが、洸の鎌によってすぐに弾かれてしまった。
やはり『グレーテル』を使わなければならないらしい。本当はあまり使いたくないが相手が洸となると仕方がない。
斬は洸の攻撃を避けつつ再び撃つチャンスを伺った。超人的な速さで大鎌を振るう洸には攻撃することさえ難しい。
だが斬も伊達に場数を踏んではいない。うまく避けつつ今度は後ろへ回り込んだ。
そして『グレーテル』の照準を合わせて…撃った。
銃弾は洸へと一直線に飛ぶ。だが洸の周りにはこの世界の主の守りがあった。
グレーテルの弾と洸の盾がぶつかり合う。紅の盾と蒼の弾がせめぎ合い、激しく火花と閃光が飛び散る。
眩しい輝きが消えない。二つの意志がぶつかり合う。だが、盾は硬かった。

「この程度で…永遠様のお力に勝てるとでも？」

途端に銃弾の勢いが消えてポロリと下に落ちた。
洸はまだ余裕綽々といった表情で斬に笑いかける。斬は少しだけ思う。ああ、まただ…と。
洸は一歩前に出て、斬は一歩後ずさりした。この世界を支配する『魔女』の力はあまりに強大だった。
目の前の洸がニヤリと笑う。

「可哀想に。せっかくの『グレーテル』…魔女殺しの銃の力が台無しですね。
…どうやら貴方の限界もそう遠くないようです。」

斬は舌打ちして洸を睨みつける。
洸はただ鎌を手にこちらを見つめる。その姿はまるで罪人を地獄に落とす死神のようだった。
ここは退くべきだ。直感で斬はそう感じた。そして自分の能力を発動させた。
斬の周囲が青く輝き始める。それを見た洸が少し嘲笑うように言った。

「また、逃げるのですね。哀れな方だ。
ここはレデストワールド。魔女がヘンゼルの為に作り上げた永遠の牢獄。
さあ、貴方はいつまでもつでしょうね？」

洸の薄気味悪い笑いが消えない。斬はそれをはねつけるように洸を睨みつける。
光の勢いはもう十分強くなった。

「いつまで？それはお前らのこの世界が崩れ落ちる時までだな。」

「逃げ惑う臆病者の台詞とは思えませんね。」

「…もう終わる物語に用はない。次の物語へと進む。それだけだ。」

洸の次の言葉が発せられる前に斬は頭の中で言う。「この世界から離脱しろ。」…と。
その途端に青い光が斬を包み込み、レデストワールドの紅い空は姿を消す。
あの憎らしい洸の姿も光の向こうへ消えた。そして一足先に次の『物語』へと向かう。

「醜い方だ。貴方の体も精神ももうボロボロだってことくらい、こちらも気づいているのですよ。
さあ…あともう一息ですね。」
洸の最後の言葉は斬には届かなかった。

◇　◇　◇

張り詰めた空気を裂くように銃声が響く。壁を片っ端からえぐりながら銃弾が奈々を狙う。
奈々は逃げ惑うだけで精一杯だった。だが慎は容赦なく次の弾を銃に入れる。
けれど奈々もそれを見逃さなかった。すかさず駆け出してチェーンソーを振るった。
慎はすぐにそれを避けた。

「ごめん…お兄ちゃん…あなたを殺します。」

奈々は俯きながら小さく呟く。だって死にたくなかった。
浅ましいことだとわかっている。愚かなことだとわかっている。それでもまだ死にたくない。
慎が奈々を殺して慎の命を守り通すというのなら、奈々ももう同じことをするしかなかった。
できることならもう一度あの澄み渡った青空を見たい。もう一度。
だがそのために自分の兄を殺さなければならないかと思うと胸が痛む。迷いなく突き進むことはできなかった。
だが慎は止まってはくれなかった。銃を真っ直ぐこちらに向けるだけ。

「逃げても無駄だ。何のためにここに誘き出したと思っている？」
慎の冷たい声が胸に刺さる。
冷たい声を聞くたびに「…どうしてこうなったんだろう。」と諦めたように思うのだった。

「そんなに…生き残りたいの？そのためなら誰を犠牲にしても構わないの？」
霧也を陥れ、栄恋を撃ち、奈々を殺してまで。
そこまでして生き残ったところで何が残るというの？

「構わない。何を犠牲にしたって関係ない。」

「どうして…どうしてそんな人になっちゃったの！？
昔はそんな人じゃなかったのに…信じてたのに…！
『メドゥーサ』の能力の代償のせい？ねえ…どうして！」

奈々は泣きそうになりながら叫んだ。感情の塊のような声がただ響く。
慎には届かない。どんなに叫んでも嘆いても。
感情のない目は揺らがず、冷たい機械のように奈々を見る。
そして言う。まるで奈々を突き落とすように。

「哀れなもんだな。単純だ。お前が邪魔だったんだよ。
…信じてた、か。馬鹿にも程がある。　この状況なら誰だってこうせざるおえない。信じたら負けなんだよ。」

信じたら負け。鐘の音のようにその言葉が何度も心の中でこだます

る。

そして慎は残酷なくらいに静かに迷いなく、銃口を奈々に向けた。

第1部：31

「ここで終わらせてやるよ。これでようやく、この世界から出られる。」

嘘つき。嘘つき。信じていたのに。
どうして人は裏切るのだろう。最初は優しいふりして最後には酷い結末で自分のことを見捨てていく。
それでも何度でも信じることを忘れないようにしてきた。
けれどもう…限界。

「嘘つき。裏切り者。もう…容赦しない！」

奈々はチェーンソーのスイッチを叩いて駆け出した。
慎の銃声と奈々のチェーンソーの音が激しく重なり合う。
銃弾を部屋の置物などに隠れて避けながらじりじり距離を縮めていく。もう後戻りできない。話し合いなんて通用しない。
銃弾が頭を貫くか、チェーンソーが首を抉るか、結末はどちらかしか有り得ない。
和解も救済も不可能。死以外のあらゆる結末を許さない…それがレデストワールドという世界なのだから。
どうして…どうしてこうなったんだろう？
心の嘆きがこだまして消えた。
その時、慎の銃撃がやんだ。奈々がすかさず走り出す。大きな鏡の裏に来た辺りでまた銃撃が始まった。
こうして近づき、相手が弾切れした時を狙って一気に勝負を決める…飛び道具がない奈々にとってはそれが最善の手だ。
死にたくない。その言葉が頭の中で何度も何度も響いた。
銃撃が止まらない。耳を塞ぎ、しゃがみ込んで丸くなり、恐怖と悲

しみに耐えながら激しい音をやり過ごす。
だが、急に銃撃が止んだ。奈々は様子を伺うとすぐにチェーンソーを握って駆け出す。この時を待っていた…弾切れだ。
一気に慎に近づき斬りかかる。だが慎は一回目はすぐに避けた。
銃弾を銃に込めようとするのを防ぐように再び斬りかかる。
慎はまた後ろへ避けてかわす。だが三回目は違った。何かが切れる不愉快な音とぽたぽたと液体が落ちる音。
三回目も慎はかわそうとしたがかわしきれずに左腕から血が流れ出した。
一瞬奈々は反応が遅れた。慎はそれを見逃さない。
慎が『メドゥーサ』の力を使った。
奈々は思わず目をつぶって一歩下がる。だがその標的は奈々ではなかった。赤い閃光は奈々のはるか上を通過した。おそるおそる目を開ける。何も起きなかった。
目の前の慎は左腕から血を流しながら無表情のままこちらを見つめる。
その時だった。上から大きな音がする。見上げた時だった。
更に大きな音に驚いて奈々は思わず一歩後ろに避けた。
その途端、突然重たい音と共に石のシャンデリアが落下する。そして奈々の目の前の床にそれは叩きつけられた。
危うかった。判断が少しでも遅れたらもう生きていなかっただろう。
慎は先ほどの『メドゥーサ』で奈々の頭上のシャンデリアを石化し、石になった重さでシャンデリアが落下するのを狙ったのだろう。

だが、シャンデリアに気を取られたのは失敗だった。
土煙が晴れて、シャンデリアの向こうが見えた時だった。
突然何か嫌な予感がして、奈々は右へ避けた。

銃声だった。一発、二発。大気を貫くような音。
そして引き裂かれるような痛み。どろりと赤いものが左太ももから

流れ出しているのがわかった。
崩れ落ちるようにしゃがみこむ。足を庇い、うずくまるが痛みは一向に引かない。
命を落とす程の致命的な怪我ではない。だが、痛みを無視して戦うのは到底無理だった。
怪我をしたのは足だけのはずだがそのショックは全身を駆け巡る。
足の痛みが邪魔してこれ以上動けない。
左足を動かす度に激痛が走る。
痛みに抗うのが精いっぱいで、奈々は後ろから近づく慎の影にも気づかなかった。
じわりじわり、その距離は縮まっていく。
そして、奈々は頬を殴られて地面に叩きつけられた。
起き上がることもままならない奈々の額に慎は銃口をねじ込む。
どうやらシャンデリアが落ちた時にもう弾を入れ終えていたようだった。

「手間かけさせやがって…。まあいい。どうせこれで最後だ。」

心臓の音が大きくなる。
もうどう足掻いても逃げられない。助けも来ない。
もう本当にこれが最後。奈々は恐怖で眼をつぶる。
銃の冷たさだけが伝わってくる。ああ、ここで死ぬんだ。
もう諦めかけていた。だから気づかなかった。
階段を登ってくる音。誰かがやってくる音に。
慎が引き金に指をかける。もう逃げる気さえ起きなかった。
目の前の景色がぼうっとして見える。
終焉の沈黙。奈々は目をつぶった。そして引き金が引かれる…その時だった。

「奈々っ！」

誰かの声。駆けてくる音が聞こえた。
それに気づいた瞬間、何か強い力が奈々を押しのけ、視線の先に一つ影が見えて…。

発砲音がした。一回…二回三回。終わりを告げる鐘のようにその音は響いた。
さようなら。静かに心の中で呟いた。
だが、銃声と共に感じるはずの感覚がない。

何分経っただろう。銃声はもうしない。あるのは凍り付きそうなくらいに冷たい静寂だけ。
奈々は顔を上げた。
痛みがなかったのだ。確かに発砲音はしたはずなのに。
混乱しながら体を起こして辺りを見回す。
そして奈々は正面に慎がいないことに気がついた。
慎がいたのは奈々から少し離れたところ。撃たれる直前に奈々は何者かに突き飛ばされたのだ。
一体誰が…。奈々がもといた場所を見た。

「鏡！嘘でしょ…鏡！」

奈々を庇った人が、一番大切な人が血まみれで倒れていた。

「鏡！馬鹿、何で私なんか…！
ねえ起きてよ返事してよ…！鏡！
約束したじゃん…この世界を抜ける方法見つけるんじゃなかったの！？
ねえやだよ…やだよやだよ死なないで！

鏡が死んだら私どうすればいいの？誰を信じればいいの？
鏡！やだ…嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌あぁぁ！
…鏡！鏡！やだ…やだ…死なないで！」

狂ったように奈々は叫ぶ。溢れ出る涙を拭くことも忘れて叫んだ。
喉が枯れるかと思うくらいの声。冷静さなんて保っていられない。
けれどどんなに揺さぶっても叫んでも鏡は目を開かなかった。
更に涙が溢れてくる。あのまま、鏡がアホ面で寝ていてくれればよかったのに。
巻き込みたくなかったのに。そんな我が儘はこの世界では通用しない。
わかっていても涙を止めることはできなかった。次々溢れ出て止まらない。
嘘だと思いたかった。目の前の光景もレデストワールドの存在もみんな夢だと思いたかった。
けれど無理だった。奈々の涙も鏡の血も暖かかった。紛れもない現実だ。
鏡はずっと奈々の味方でいてくれた。今の奈々にとって鏡以上に信頼できる人なんて世界中のどこにもいない。その人が今目の前で血まみれで倒れている。
奈々はがっくりと俯きうなだれた。涙は枯れ果ててもう出なかった。
絶望感とぽっかり穴が空いたような空虚な感じ。そしてそれを押しのけて湧き上がってきたのは強い怒りだった。
奈々は自分に問いかけた。鏡をこんな目にあわせたのは、鏡を撃った人は一体誰だった？
ふつふつと湧き上がってくる。強い感情が湧き上がってくる。柄を握りつぶしそうな勢いで奈々はチェーンソーを掴むと鏡を撃った人を睨みつけた。
慎は無表情のまま。悪いと思ってる様子すらなかった。
奈々の眼が裂けそうなくらいに大きく見開き、叫んだ。

「許さない…！もう許さない！
泣いて土下座しても二度と許してやるものか！裏切り者裏切り者裏切り者！
鏡の痛み…思い知れ！死ね！死ね！みんな死ねえぇぇぇぇ！」

足の痛みも忘れて奈々は慎の方へ駆け出す。
チェーンソーの激しい音が鳴り出した。同時に慎も銃を構える。奈々は迷わず正面から突っ込んでいく。
撃たれても構わない。どこを撃たれようが何度撃たれようが構わない。何度でも立ち上がってみせる。
この血が一滴残らず流れ尽くしても、鏡の仇を伐つためなら立ち上がってみせる。
奈々は慎に切りかかった。そして、慎は奈々の額に狙いを定めて引き金を…

引かなかった。

チェーンソーの刃はあっさりと慎の首筋に食い込み、斬り裂いた。
鮮やかな朱色が勢いよく吹き出す。重たい銃が床に落ちる。
ぐらりと目の前の慎がよろめく。そしてあっけなく慎は倒れ、紅い血がタイルを汚していった。
奈々ははっと我に返った。今起こった現実が信じられなかった。
振り返り、朱色にまみれて倒れている慎を見る。首筋から血が吹き出している。
どう見ても助かる見込みのある出血量ではない。
でも…

「…なんで…？」

奈々は呟いた。慎は防げたはずなのだ。
引き金を引いていればこんなことにはならなかったはずなのだ。それなのになぜ引かなかった？
怒りは疑問符に変わった。なぜ？なぜ？あれほど奈々を殺したがっていたのに。

その時、慎の目が奈々を見た。もう光を失いかけた目だった。
そしてかすかに唇が動いた。

重たい音がした。奈々のチェーンソーが落ちる音だった。
棒立ちのまま、チェーンソーを拾うこともできなかった。
指も手も動かせない。足に力が入らずにその場に座り込んでしまった。
そして涙だけが音もなく流れた。
慎の今の言葉が蘇った。

「…ごめん。」

第1部・32

淀んだ曇り空。重たい灰色。あの頃の青空なんてもう記憶にない。
暗く冷たい、あの頃の自分たちの家の雰囲気のような悲しい空しかもう覚えていなかった。
母親の金切り声。俯く父親。あの頃の両親の様子は今も頭に焼き付いていた。
多額の借金を背負った父、泣き叫ぶ母。
どうにかしたい。仲直りしてほしい。いつも思っていた。
多分奈々も同じだったのだろう。両親が喧嘩する度にいつも狭い部屋の片隅で泣きそうな顔でうずくまっていた。
けれど慎も奈々もまだ幼かった。この家に入った大きな亀裂を埋めるにはあまりに幼すぎた。
追い詰められた母の気持ち、どうすることもできない父の気持ち。
どちらも正しく理解することはまだできなかった。
この冷たい空気の原因は父親だと慎は思った。母が泣いて怒鳴るのも、奈々が悲しそうに部屋の隅でうずくまらなければならないのも、全部借金を作った父親が悪いのだと思っていた。父が諸悪の根源だと思っていた。
実際何も間違っていないし、借金が無ければこんなことにはならなかっただろう。だが、自分は幼稚だった。
ある日のことだった。また怒鳴り声が飛び交う。耳を突き刺すような罵声の後、嘘のような沈黙が流れ、また罵声が。
もう夜中2時近い。先ほどまですすり泣く声がしていたが、奈々は既に布団を頭からかぶって丸くなって眠っていた。
だが慎はまだ眠れずに襖に寄りかかり罵声が飛び交う家の隅でぼんやり天井を眺めていた。
いつまで続くんだろう。そう思った時、急に怒鳴り声が止み、代わりに陶器が砕け散るような音が響いた。

慎が震え上がった時、誰かの足音と別の部屋の戸が開いて閉まる音が聞こえた。
どうやら母が居間から出ていったらしい。
その後の静寂は長かった。この世から音がなくなったのではと思うくらいに静かで無声。
慎はおそるおそる襖を開けた。床に散らばる食器の欠片。床に座り込みうなだれる父。死んだような目をして石のように動かない。
欠片を踏まないように気をつけながら慎は父の前に行った。
父の光のない目がこちらを見る。

「まだ寝てなかったのか…」

「…またか。」

思わず慎はそう言った。
憎くて仕方がなかった。
父はうなだれて独り言のように言った。

「…ごめん。」

「じゃあ借金返せよ。いつも口だけだろ。」

「…ごめん。」

感情のない声だった。慎はその態度に腹が立った。
父のその声の理由なんて全く気づかなかった。
あの時の自分はなんて幼稚だったんだろう。立ち上がり怒鳴って攻め立てた。

「あんたが作った借金だろ!?あんた何とかしろよ!こっちもなん

とかしたいけどできないんだよ！
誰のせいでこんなことになったと思ってるんだ！あんたのせいだろ！？あんたが悪いんだろ！？責任取れよ！
あんたが居なければこんなことにはならなかったんだろ！？」

敵意を剥き出しにして怒りをぶつけた。
そしてまた沈黙が訪れる。父親の目が再びこちらを見た。
光がない。喜んでいるのか悲しんでいるのか怒っているのかすらわからない無表情。そして問いかけた。

「悪いのは…俺か？」

慎は敵意と憎しみをを込めて言った。

「そうだろ。あんた以外に誰がいるんだよ。」

そう言って慎は部屋に戻った。
父が呟いた。

「…だよな。」

そして翌日、父はいなくなった。
母親が食器を壁にぶつけ、泣き叫ぶ中、慎は床に紙切れが落ちているのを見つけて拾った。
紙切れにはこう書いてあった。「ごめん。全部俺のせいだ。俺がよくわからない連中に騙されなければこんなことにはならなかった。許して貰えないだろうけど…ごめん。」と。
その時慎は初めて借金ができた原因を知った。父がいなくなったきっかけが何かということも。
そして父が今どうしているかもなんとなく想像がついた。

父がいなくなってからの生活はそれまで以上に厳しかった。母の収入では生きていくのがやっと。借金を返すのに費やすお金なんて入ってこない。
母は毎日仕事から帰ると呟いていた。「あいつが私たちを見捨てなければ…」
間違ってはいない。けど正しくもない。母が呟くのを聞くたびに慎にはそれが自分を責めているように聞こえた。
違う。あの人を追い詰めたのは俺なんだ。そう言うことはできなかった。
「あんたが居なければ…」…あの言葉は父には死刑宣告のように聞こえたのかもしれない。あの時あんなことを言わなければ四人でやり直すチャンスはまだあったかもしれない。
それを壊したのはお前だよな？母が悲しむ度に、奈々が俯く度に黒い声が囁いた。

そして、ある日急に母が自殺した。油を撒いて火をつけて。警察には火の不始末で片付けられたが慎も奈々も自殺だと確信していた。
そして奈々は心を閉ざした。
お前のせいだよな？お前のあの一言のせいだよな？黒い声はさらに強くなる。
そんなある日、突然見たこともない額の金が送られてきた。死亡保険のお金らしい。母と…父の。山の中で崖から落ちて亡くなっているのが見つかったらしかった。死亡してからもう相当経った時になって見つかったらしかった。
慎の悲しい予想は当たっていた。死亡保険のお金で、今まであんなに自分たちに重くのしかかっていた借金は嘘のようになくなった。
だが、黒い声は消えなかった。皮肉だね。二人殺して、お前は借金返したわけだ。
俯く奈々を見る度に黒い声が囁いた。そして罪悪感が奈々に優しく

しろと言った。
少しずつ奈々は以前の明るさを取り戻していった。そんな時だった。
レデストワールドに来ることになったのは。

栄恋と出会い、タクシーで送っていこうとした時、ここに来ることになった。
ここに来て一番苦しかったことはゲームの概要よりも自分の能力の代償のことだった。
能力を使う度に自分が自分でなくなっていくように感じた。
同情とか憐れみとか、当たり前だった感情が少しずつ消えていく。
人を殺しても何も感じなかったし、栄恋に酷いことも何度も言った。
そのことを悲しいと思うことさえなくなっていった。
少しずつ少しずつ自分が自分でなくなっていく。そんな自分が嫌で、見られたくなくて、栄恋を何度も突き放した。
けど何度突き放しても栄恋はついてきた。キラキラ瞳を輝かせてこちらを見てくる。まるで神様でも見ているようだった。
それが慎は苦しかった。自分はそんな良い人じゃない。その証拠に、慎は栄恋が人殺しの世界に来るきっかけを作ったのだ。
苦しい。でも今思うとそう思う時だけは、失った『優しさ』が戻ってきていた気がする。
でもそんな僅かな『優しさ』もどうせすぐ消える。この先の未来のことなんて想像しようとも思えなかった。
奈々と再会したのはそんな時だった。

怖かった。変わり果てた自分を見られることが。いや、最初から変わってなんていなかったのかもしれない。今まで隠れていた冷酷さが表に出ただけかも。
慎は奈々から両親を奪ったのだから。あの丘で奈々を突き飛ばした時、絶望したような目を見た時に思った。自分は人の人生をどれだ

けめちゃめちゃにしてきたのだろう。
両親が死ぬきっかけを作り、栄恋をこの世界に連れてきて、何人もの人を殺し、奈々を何度も苦しめた。
特に奈々は一番の被害者だ。今まで何人殺し、何度奈々を苦しめただろう？
父がいなくなった時、母が死んだ時、奈々はどんな顔をしていた？
このままだとあと何人殺すことになるかわからない。いつ自分が自分でなくなるかわからない。無限の屍を越えて生き残ったところで何になるだろう。

だから決めました。
今まで優しい人だと思わせてきた。騙してきた。
もう大丈夫だから。そう優しく言っておきながら全てを壊した原因を作っていた。裏切り、騙していた。

なら最後まで騙し通そう。
そして償おう。

川崎奈々の願いを一つだけ叶えよう。
自分が自分でなくなる前に。

生き残った者は一つだけ願いを叶えることができる。それがこのゲームのルールだろう？

それから慎はわざと奈々達の前で冷たく振る舞った。奈々を殺そうとするふりをした。
人が人を殺すのは、極限まで追い詰められた時だとこの世界で学んだからだ。
栄恋に冷たく当たり、霧也を利用し、そして鏡を撃った。全ての憎しみを自分に向ける為に。

ごめんなさい。
許されないことはわかっています。いくつ命を賭けても、亡くなった命は戻ってこないこともわかっています。
けれど謝らせてください。自分で自分を許すなんてできません。

ごめんなさい。川崎奈々。
両親を奪ってごめんなさい。
何度も苦しめてごめんなさい。

そして、何人もの人を利用してごめんなさい。
竹内霧也。利用してごめんなさい。栄恋をここに連れて来て、利用したことで一番苦しんだのはこの人だろう。
遠藤鏡。最善の未来を、夢を壊してごめんなさい。自分を奈々に殺させるように仕向けておきながらこう思うのはおかしいかもしれないが、この人には出来れば生き残ってほしい。
この人が奈々の一番の支えだと思う。
そして五月原栄恋。一番謝るべきなのは本当はもしかしたらこの人に対してかもしれない。
最後まで利用しつくしてごめん。あんなに尽くしてくれたのに、あんなことを頼んでごめん。
奈々に自分を殺させるように仕向けてくれだなんて。
そしてありがとう。こんな人の残酷な願いに応えてくれてありがとう。
本当にありがとう。栄恋の歌、良かったよ。

川崎慎は残酷な裏切り者。そう思ってくれて構わない。
実際、ずっと騙して裏切ってきたのだから。
本当にごめんなさい。

そして一つだけ願わせてください。
不可能だとわかっています。
でも、願わくば、みんなが幸せになれますように。

第1部・33

奈々はがっくりと膝を折ってしゃがみ込んだ。今までの慎の冷たくて辛辣な言葉、そして今の暖かくて悲しげな声の両方が蘇った。
二つの言葉が奈々の心をかき乱し、混乱した。慎が倒れた時のあの表情、あの言葉。間違いなくレデストワールドに来る前の兄だった。
時間が止まったかのようだった。奈々も鏡も慎も、動ける人は一人もいない。
意味がわからない。「ごめん。」って何？今まであれだけの人を傷つけておきながら、奈々を裏切って銃をつきつけておきながら今更謝るなんてどういうつもりだろう。
苛立ちは消えるどころか更に強くなる。だが、憎みきれなかった。
…あの言葉がまた蘇る。優しい声。
立ち上がることも声をあげることもできない。自分だけは今動けるはずなのに。その言葉が奈々を縛り付けるかのようだった。
唇が震えた。動けなかったが、動かずにはいられなかった。
ようやく足を引きずり、慎の側まで行くと、震える声で言った。

「…どう…して？…なんで…なんで今更そんなこと言うの？」

慎は答えなかった。もう目をつぶっている。腕もだらりと下がって動かない。一秒一秒経つごとに体が冷たくなっていくのがわかった。
目から涙がこぼれた。何故だかわからない。もう許さないと決めた相手なのに。
その時、慎の向こうから物音が聞こえた。
奈々はすぐにそちらへ駆け出した。足の痛みなんて気にならなかった。鏡が今少しだけ動いたのだ。
生きているかもしれない。手を握るとまだ暖かかった。すると瞼が少しだけ動いた。

奈々の表情が明るくなる。また少し瞼が動いたかと思うと、ゆっくりと鏡が目を開けた。
奈々はほっとして声をかけた。
「鏡！よかった…よかった…！」
「奈々……痛っ！」
傷口を抑えて鏡がうずくまる。生きて板とはいえいえ、傷は決して浅くはない。
肩、脚、腕、計三箇所から血が流れ出していた。最初、奈々は何の疑いも持たずに鏡の治療をし始めようとした。だが、ふと気づいた。肩も脚も腕も打ち抜いて一発で相手を殺せる箇所ではない。どうして慎はそんな所を打ち抜いたのか。
鏡の生存に安心して少し冷静さを取り戻した時に気づいた。ぞわりとした感覚が襲ってきた。何か重大な過ちに気づいたような気がした。
その時、鏡が呟いた。
「くそ…しっかり急所は外してやがる…。」
奈々の手が止まった。鏡も同じことを思ったらしかった。
認めたくなくて目を逸らそうとした。けれど、無視できない考えだった。
慎はわざと急所を外したのでは？
また手が動かなくなった。その時、鏡が何か思い出したように急に奈々に言った。
「そうだ、お前の兄貴は？川崎慎はどうなった！？」

奈々は急に喉に何かつまったかのように何も言えなくなった。言えるわけなかった。奈々が殺したなんて。
表情が暗くなり俯く。恐怖のような、よくわからない感情。殺したのは自分なのに。
それを見た鏡の表情が青くなった。何があったのかは察したようだった。

「まさか…殺したのか？」

心臓を打ち抜かれたような気分だった。しばらくの沈黙の後、奈々は震えながら頷いた。
鏡の目が絶望に変わるのがわかった。奈々はそれが何より悲しかった。
唇が震えた。自分が何をしたのか、今になってやっと自覚しだした。
自分は兄を人からモノに変えた。
ずっとずっと、自分の面倒を見てきてくれた兄を。急に目から涙がこぼれ落ちた。怖くて仕方がなかった。
震える声で奈々が言った。

「あいつが鏡を撃った時…カッとなって思わず……でもあいつ…防がなかったの…銃を向けてきたのに…撃たなかった…
そしたらあっけなく…なんで…なんで…？」

鏡はその様子を見て無理して笑った。無理しているのがバレバレなのが鏡らしかった。
そして、奈々の頭を少し撫でると哀しげに言った。

「それが…あの人の優しさだったんだよ。」

思いがけない言葉だった。だが心のどこかで本当はそうなのではと

疑っていたような気もする。
倒れた時のあの目は嘘じゃなかった。
なぜか腹立たしくて、認めたくなくて思わず怒鳴った。
「でも、あいつは私を殺そうとした！竹内君を使って私を騙そうともした！
優しさ！？どこが！？なんでそんなこと…」
「落ち着けよ…」
「だって…！」
「落ち着け！」
震え上がるような迫力の怒鳴り声だった。奈々は冷たい水でもかけられたように大人しくなった。
それを見てようやく鏡はまた優しい表情に戻った。冷静さを取り戻した奈々は俯く。
なぜだろう。涙が止まらない。
「お前は勘違いをたくさんしてる。まず霧也は川崎慎の手先なんかじゃない。」
奈々は驚いて顔を上げる。信じられなかった。そうじゃなかったら奈々に銃を向ける訳がない。
「でも竹内君は私に銃を…それに、明らかに五月原栄恋の味方をした。」
「後ろから物音がしただけで奈々かどうかなんてわかるか？この世

界じゃ誰でも物音がしたら警戒するだろ。
それにあいつは五月原栄恋が心配だったから俺達についてきたんだ。そいつに危険が迫っていたら思わず庇ったって不思議じゃない。
霧也は…川崎慎に利用されたんだ。」

奈々は鏡の目を見つめた。強い確信と悲しさが入り混じった目だった。
戸惑いながら奈々は言う。

「でも、何でそんなこと…」

わからなかった。奈々には慎がそうしなければいけない理由が思いつかなかった。
だが、鏡はピタリと正解を言い当てた。訴えかけるように奈々から目をそらさなかった。

「お前を生き残らせるためだよ！
霧也を利用しただけじゃない…あいつは五月原栄恋にわざと撃たれるように指示してた。
よく考えてみろよ、あいつがお前を殺せるタイミングはいくらでもあったはずだ。
そもそも、本気であいつがお前を殺す気なら、あの花畑でお前に会った瞬間に撃ち殺してたはずだろ？
でも殺さなかった…全部お前があいつを憎むように仕向けるためだったんだよ！そうすれば…あいつは敵だってお前思うだろ？もう優しい兄ちゃんじゃないってそう思っただろ？
違ったんだよ…。」

ぽたりと涙がこぼれ落ちた。一粒、また一粒と。落ちては白いタイルを濡らしていく。

声もあげず、拭うこともせず、ただ涙が落ちていく。真っ赤な世界が今なら真っ白に見える気がした。
なんて馬鹿だったんだろう。どうして気づかなかったんだろう。優しさが無い？もう昔のお兄ちゃんじゃない？一体どこが？
倒れているあの人はこんなにも優しかったのに。『メドゥーサ』の代償なんかじゃ消し尽くせないくらい、優しい人だったのに。
また涙が溢れ出す。両手で目を覆って止めようとしても止めきれない。タイルが次々濡れていく。
敵だと思いこんでいた。裏切り者だと思いこんでいた。
この世界は冷たくて恐ろしい世界。だから誰も信用できないといつしか思いこんでいた。

「お兄ちゃん…みんな……ごめん…ごめ…ん……ありがとう…！」

声にならない声で言う。涙が言葉さえ邪魔する。
なんて愚かだったんだろう。奈々の周りの人々はみんなこんなに優しい人ばかりだったのに。
後悔と悲しみが溢れ出した。裏切り者なんて一人もいなかったのに。…けれどみんな死んでしまった。これじゃまるで…

その時、女の人のとても澄んだ声がした。

「まるで貴女が裏切ったみたいね？」

その時だった。急に鏡の顔色が悪くなり苦しそうにうずくまった。
真っ青な顔で咳込み始める。奈々は慌てて声をかけた。

「鏡！どうしたの、鏡！？」

返事がない。ますます苦しそうに口に手を当てて咳き込むだけ。

異常だ、何かおかしい。先ほどの怪我のせいならまだしも急に返事もできないくらいに体調が悪くなるなんて。
次の瞬間、奈々は息が詰まったように声が出なくなった。突然鏡が倒れた。
何度も声をかけたが返事はない。目を開けたまま動かない。唇の周りと、咳き込んだ時にあてていた手に異常な量の血がついている。
その時奈々はやっと思い出した。このゲームのルールを。

『魔王』、あるいは『主人公』を殺した人以外の参加者は皆殺しだと。

「鏡ッ！鏡！いやあああああああああああああああ！」

喉が枯れるくらいの勢いで叫ぶが返事はない。揺さぶっても瞼一つ動かない。
見てすぐもうわかった。これはもうモノだと。生きた人ではないと。
でも叫ばずには揺さぶらずにはいられなかった。
手放したくなかった。けれどそんな意志と無関係に手も体もどんど冷たくなっていく。
目の前が再び真っ暗になる。もう涙は枯れ果てて出なかった。
その時、また綺麗な声がした。

「お疲れ様、『主人公』さん。ゲームクリアおめでとう。」

その声と同時に不吉なカラスの声が響き渡った。普通のカラスよりも何十倍も大きな声。
奈々はまだ泣きじゃくりながら振り返る。窓の向こうには紅い空。
巨大なカラスのケモノが紅い月の前を通り過ぎて飛んでいくのが見える。
そして、そんな景色を背景にして一人の女性が立っていた。

髪の毛は白、青、紫の順にグラデーションさせたような奇妙な色。
目は青と紫のオッドアイ。気味が悪いくらい美しい女性だった。

「ごめんなさい、ロゼットが少しやりすぎたみたい。」

優しげに微笑みながらその人は言った。
奈々は尋ねた。

「…貴女は誰？」

どこか冷たくて恐ろしかった。
その人は人差し指を口の前で立てて、内緒話でもするかのように言った。

「はじめまして、私は永遠（トワ）。
こんにちは、主人公さん。」

第1部・34

その人は微笑んだ。首に抉られたような跡を残して血まみれで死んでいる慎と、血を吐いて目を開けたまま死んでいる鏡を目の前にして優しく微笑んでいる。
背筋が冷たくなった。永遠は逆光の中で微笑む。綺麗な髪が揺れて舞う。
永遠の表情と対照的な背景の紅い空が嘲笑うかのようにこちらを見つめていた。
奈々は手も足も出なかった。何か尋ねることすらできなかった。
永遠は首から血を流してる慎を見つめ、奈々に言った。

「優しいお兄さんね。うらやましいわ、私もそんなお兄さん欲しかった。」

口が動かない。手も動かない。
この人は何者だろう。何なのだろう。血まみれの死体を見て微笑むあたり、まっとうな感覚の人ではなさそうだった。
ようやく口を開いて奈々は尋ねた。

「貴女は…何？」

「…私？」

永遠が聞き返す。奈々が頷く。
永遠は古くて分厚い本を抱えたまま、秘密の話でもするように人差し指を目の前に立てて言った。

「私はね…魔女。『永遠の魔女』。けど『著者』でもある。貴女に

とっては…私は、この世界の支配者と言っておくのが一番わかりやすいかしら。」

奈々にはその意味がよくわからなかった。
ただ一つ、この人がこの世界を支配し、イカれたゲームを主催し、奈々たちを巻き込んだ張本人だということはわかった。
少しの間忘れていた感情が蘇る。だが、立ち上がる力もチェーンソーを振るう気力ももう奈々にはなかった。もう動かない鏡からまだ手を離せないまま、人形のようにぼんやりと永遠を見つめている。
その時、後ろから聞き覚えのある声がした。

「永遠様、ゲームの勝者には商品を差し上げないといけませんよ。」

その人はいつのまにか奈々の真後ろに立っていた。ビクリと震えて振り返る。
奈々達を連れてきた案内人…洸の姿だった。
洸を見た永遠は先ほどより更に笑顔になり、楽しそうに言った。

「あら、確かにそうね。
　では主人公さん。貴女のお願いは何かしら？」

微笑む永遠の目を見られずに奈々は俯いた。何も思い浮かばなかった。
俯いた先に見えたのは鏡の顔。そして離れたところに慎の姿がある。
できることなら、みんなを生き返らせてほしい。鏡も慎もついでに霧也と栄恋も…みんな。
そう頼みたかった。けれど頼めない。たとえみんなが生き返っても、それではこの世界からでられない。
奈々が欲しいのは『あたりまえの日常』。あたりまえのように学校に行き、話し、笑い……鏡たちの存在とあの青空の世界。どちらか

が欠けていたら決して成り立たない。
この世界に来て少しした頃、鏡と霧也とした約束が蘇った。

『三人でこの世界から抜け出そう。…必ず。』

夢となり泡となり、もう絶対に現実にはならない。そうなった原因は誰だった？
慎？本当に？確かに慎は奈々が自分を殺すように仕組んだかもしれない。
けれど、もし奈々が慎の優しさに気づいていたなら？慎を最後まで信用できていたら？
そう思った時、奈々はもう一人責めるべき人物がいることに気がついた。

「私だ…」

奈々はぽつりと呟いた。約束を果たすには慎を殺してはいけなかった。けれど奈々は慎を殺した。
これが約束が果たされなかった原因じゃないとしたら一体何？
慎を信じきれなかった。奈々を裏切ったと思いこんでいた。栄恋を信じられなかった。慎を変えた原因だと勘違いしていた。
霧也のことも信じきれなかった。あんなに奈々たちに味方してくれたのに、たかが携帯のバイブ一つでどうして疑ったりしたのだろう。
どうして冷静になれなかったのだろう。この城で会った時、ちゃんと話を聞けばよかった。
そして鏡のことも。
霧也を疑った時、相談すればよかった。鏡なら違う見方をできたかもしれない。心配かけたくなくて、少しだけ遠ざけていた。話すべきことを話さなかった。
ああ、一番誰のことも信用する気が無かったのは奈々自身じゃない

か。
後悔と悲しみが溢れ出して止まらない。両手で目を多う。真っ暗な感情が溢れて覆い尽くす。
約束を破ったのは誰？川崎奈々以外に誰がいる？
みんなを生き返らせても意味がないのなら、せめて奈々だけでも……そう願うことを慎と鏡は望むかもしれない。

できないよ。

奈々は心の底で呟いた。約束を破ったのは奈々自身。
絶対にこの世界から抜け出そう…そう言っておきながら、裏切ったのは奈々自身。だって奈々は川崎慎を殺した。そして、遠藤鏡も殺した。
『魔王』を殺したら皆殺し…わかっていたはずなのに。
約束を破り、慎を殺し、鏡を裏切って殺した挙げ句、自分だけ元の世界に帰るなんて。

「そんなこと…できない…」

奈々はそうつぶやいて立ち上がった。血まみれの足が悲鳴をあげるがかまわなかった。
奈々はしっかりとチェーンソーを握り締めて永遠の方へと歩き出す。
足を引きずりながら一歩ずつ。
洸の声が聞こえた。

「永遠様…！」

「大丈夫、平気よ。」

そう言って永遠は洸を止めた。

奈々はチェーンソーを握ったまま、永遠の正面まで来ると、光のない目で永遠を睨みつけた。
そしてそのまま隣を通り過ぎた。先にあるのは紅い空を映す窓。
痛みに耐えながらようやく奈々は窓際へとたどり着いた。
冷たい窓ガラスに手をあてる。手の周りのガラスが少しだけ曇った。
そして奈々は再び両手でチェーンソーを握ると行く手を塞ぐ窓ガラスを叩き割った。
冷えた音とともにガラスが煌めいて落ちる。パキパキという音がよく聞こえた。
奈々は振り向いて永遠と洸を見た。
あの髪、あの目、あの表情。憎らしいけど奈々にあの二人を叩き潰す術はない。
奈々はチェーンソーを地面に置いた。そして、窓の縁によじ登った。
ガラスの縁で手が切れたが、この心の痛みに比べればなんてことない。
冷たい風が顔をかすめた。地面が遠い。ここからなら、遊園地全体が見渡せる。

一人でこの世界を出るなんてできない。

鏡たちの命を犠牲にして手に入れた青空なんて何の価値があるというの？

青空を取り戻しても、ひとりぼっちじゃ虚しいだけなの。そうなるくらいなら…

「ごめん…ごめんなさい…！」

はろー　はろー　そしてさようなら。

奈々は窓から飛び出した。
前のめりに崩れ落ちた奈々の体は圧倒的な流れに巻き込まれて落ちていく。
紅い月の下、一人の少女のシルエットがはっきり浮かび上がる。
紅い空、観覧車、メリーゴーランド…壮大な景色が一気に通り過ぎて真っ暗になった。

◇　◇　◇

窓から冷たい風が吹き込む。
地面に置かれたチェーンソー。砕け散って煌めくガラス。
『主人公』の姿はもう見えない。
笑顔のまま窓の外を見つめる永遠に、洸が自分の上着をかけた。
「寒くはありませんか？ここは冷えます。早く戻りましょう。」
永遠は嬉しそうに洸に笑いかけた。
それから、もう一度あの窓を見て言った。
「ねえ、本当に『裏切った』のは誰だと思う？」
洸は少し驚いたようだった。
そして、少し考えこんでから言った。
「…川崎慎…あるいは川崎奈々では？」
永遠はつまらなさそうに口をとがらせてふてくされた。
洸はいつもそう。いつも優しくて側にいてくれるけど、私を傷つけ

るかもしれないことは決して言ってはくれないの。
永遠は分厚い本を握りしめながら言った。
「私は…本当の裏切り者は私だと思うわ。」
「何故ですか？」
「最後の最後…『著者』は少なくとも二回は彼らを裏切った…違う？」
洸はなんと答えていいかわからないようだった。
永遠は満足げに笑った。
「これっぽっちも悪いとは思っていないけどね。」
洸も笑い返して永遠の頭を撫でた。まるで小さな女の子を慰めるような撫で方だった。
少し険しい顔をして、洸は言った。
「黒園斬は、もう既に去ったようですよ。」
「そう…、見てくれなかったのね。」
永遠は悲しそうに俯いた。
つまらない。物語を途中で放り出す『読者』なんて。
本を持つ手に力が入る。少し俯いたが、すぐにまた笑って顔を上げた。
「まあいいわ。次は『黒の姫君』も巻き込むから。そう簡単には逃げないはずよ。

あの人には、最後まで見てもらわなきゃね…。さあ、戻りましょう。」

「かしこまいりました。」

二人は割れた窓に背を向けると歩き出した。
過ぎたことにもう用は無いと言うかのように。
だが、永遠は急に立ち止まると、もう動かない遠藤鏡の姿を見て言った。

「悪いわね。こういうお話なのよ。」

そして、二人は暗闇のどこかへ消えていった。

from 1 to 2

白い　白い　…ここはどこだ？
『俺』は『何』だ？どうして『ここ』にいる？
白くて何も見えない。いや、『視えて』いるのかすらわからない。
自分の存在があるかないのかすら…
その時、どこかで聞いたことのある声が囁いた。

『聞こえる？遠藤鏡。
返事なさい、この豚が。』

ああ、そうだ思い出した。膨大な記憶という情報が一気に戻ってきた。
俺は「遠藤鏡」で、レデストワールドに連れてこられて、おかしなゲームに巻き込まれて…死んだんだ。
そしてこの声は、あの城の大広間で聞いた…生意気な女の声。
何だよ。そう言おうとしたが声が出ない。
当たり前だ。死んだんだから。だが相手は理解したようだった。

『ようやく気づいたみたいね。もう舞台から去って当然の奴に出番を与えたのだから感謝なさい。
…貴方に問うわ。貴方は、今回の物語の結末に満足してる？
川崎慎の思いは報われず、最悪の結末を迎えたこんなお話…』
…満足できるわけないだろ。
『やっぱりね。よかったわ、貴方が馬鹿で。』

…うぜぇ奴。

『あら、川崎奈々が川崎慎を殺すきっかけとして利用されただけの間抜けな奴に言われたくないわね。
まあ、あたくし優しいから我慢してあげるわ。』

……。で、何の用だよ。

『確かに、本題がまだだったわね。
間抜けな貴方にチャンスをあげるわ…あたくしと取引しない？』

取引？

『そう、取引。
あたくしが貴方と川崎奈々にもう一度チャンスをあげるわ。』

そんなことできるのか？

『できるかどうかじゃないわ、するのよ。
そのかわり…』

そのかわり？

『あたくしに名前をつけてくれない？』

名前？無いのか？

『もとはあったのよ。でもね、『グレーテル』に奪われてしまったの。

それに、登場人物には名前が必要でしょう？』

わけがわからない。

『まあ、とにかく…貴方はあたくしに名前をつける。
あたくしは貴方達にもう一度チャンスを与える…残念だけどすぐには無理よ。少し時間はかかるわ。
でも、必ずやってみせる。どう？悪い話じゃないと思うわ。』

……。…川崎慎は？

『そこまで無茶言わないでくれない？登場人物が多すぎても話がうまく回らないわ。』

……。

『どうする？』

…わかった。その取引、やってやるよ。
奈々と…元の世界に戻れるかもしれないなら。

『ふふ…やっぱり貴方は馬鹿ね。でも根性はある。
諦めのいい賢いのよりはずっといいわ。
じゃあ…取引成立ね。』

…ああ。名前を付けりゃいいんだよな？

『ええ。ちょうだい、素敵な名前…』

考えこんだ。だが何かに名前なんて付けたことがないからなんて付ければいいかよくわからない。
考えた末に出てきたのは一つの花の名前だった。

……あやめ。

『あやめ…か。古臭い名前ね。
まあいいわ。有り難く受け取っておくわよ。』

これで、本当にもう一度チャンス…くれるんだろうな？

『ええ、勿論。
数ゲーム待ちなさい。私がゲームに参加できるようになった時に、必ず果たしてみせるわ。
それまで待っていてちょうだい。いいわね？』

すっぽかすなよ。

『勿論よ。
それと、川崎奈々のチェーンソー、借りていくわよ。伏線くらいには使えそうだわ。』

そう言うと、「あやめ」の声は遠ざかってどこかへ消えていった。
そして再び、「遠藤鏡」の意識も記憶もどこかへ紛れて消えていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4089i/

“ The Reddest World ”

2011年10月9日17時23分発行